
私が猫になった理由

ずび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が猫になつた理由

【Nコード】

N3285S

【作者名】

ずび

【あらすじ】

誰にでも良い顔をする八方美人な女子高生の「私」は恋も部活も順調な、爽やかで充実した青春を謳歌していた。しかしそんなある日、学校からの帰り道で「私」はある事件を起こしてしまう。そして翌日、「私」の身に襲いかかった、あまりにも衝撃的な出来事とは……。

人の心の裏側を垣間見た「私」の心の葛藤を描く、ちょっと不思議な物語です。

私が猫を語る理由

猫被り、と言う言葉がある。

本性を隠している人間の事を、そうやって言うんだそうだ。

実際は凶暴な猫が、餌をくれる人間に媚を売る仕草からきている言葉、という説があるが、全くその通りだと思う。

人は皆、皮の厚薄はあれども、多少なりとも猫被りだ。

当たり前である。人間、心の奥には邪悪なる魔物を……程度の差こそあれど、飼っているのだ。猫を被らなければ、自分の醜い姿を晒してしまう。そんな者を晒して生きている人間は周りにいるだろうか？

……はい、居ませんね。

当然だ。そんな奴と付き合いたくないなんて、私だって思わない。つまり、人は誰でも猫被りなのだ。はい、これ大事。覚えておいて頂きたい。

ちなみに私は生粋の猫被り女である。どんな猫被りかは……まあ、話を進めていけば分かるだろう。

そう、人は猫を被って生きている。悲しい事に、それがこの冷ややかなる世界の常識である。

……ところで、猫は何を被って生きているのだろうか。

猫が被っているものは猫に決まっている。猫被りは猫が猫被りだから猫被りと呼ばれている訳だし。……とまあ、私もつい最近まではそう思っていた訳だ。

さて、長々とした無意味な前置きはこれくらいにして、と。

そんな猫被りの私は、大惨事と呼ぶに値する恐るべき出来事に巻き込まれてしまった。冒険譚と呼ぶと大袈裟だけど、珍事で済ますにはあまりにも衝撃的な体験だ。今から始まるのは、怪しくて不思議

議で絶望的で悲観的だけど、ちよっぴり希望もトツピングされた物
語。

信じるも信じないのも貴方次第……なんちゃって。

私が猫を被る理由

動物、とは動く物と書く。猿だろつが馬だろつが麒麟だろつが象だろつが、猫や犬や狸や狐や兎や鼠に至るまで、生きとし生けるものであつても人間でない者は即ち、物であるのだ。

物は者となれず、者は物になれない。

どれだけ頭のいいチンパンジーがいてもそれは所詮チンパンジーであり、人間足り得ない。狼に育てられた少女も、それは少女だから、狼として生きる事は出来ない。

人は人と交わるのが自然なのだ。

さて、何故私がこんな面倒で回りくどい話をしているかと言えば。

「私、動物つて嫌いなよね」

私が真理に極めて近い結論を述べると、私の目の前で席に腰掛けて弁当のおかずを箸でついばんでいた少女が、妙な視線を向けてくる。

「……いきなり何？」

確かに今私達は二人とも黙っていた。黙々と、この高校の昼休みの時間に、騒がしい教室内で机をくつつけ合つて、弁当を頂いていたのだ。会話の発端として動物嫌いをカミングアウトするのは少々唐突過ぎたかもしれない。でもいいじゃないか。思った事を口にして何が悪い。私の前で弁当を食べる少女は、私の結論に疑問を投げかけ、そのまま押し黙って白米を口の中に運んでいく。私は購買で買った日替わり弁当に入っていた小さな唐揚げを取り上げて、そのまま私の弁当から彼女の弁当箱に移し替える。

「と言う訳で、動物を食べるのも嫌な訳」
「動物嫌いじゃなくて肉が嫌いだけだろ」

私に対して、少し乾いた声で割と苛烈な言い分をする彼女は、しかし別段嫌がる様子無くその唐揚げを一口で飲み込んだ。私は肉は嫌いであるが、ちなみに動物が嫌いと言うのも本当であり、肉と動物であれば動物の方が嫌いと言える程度には動物が嫌いだ。

「唐揚げ、もう一口あるけど食べる？」

「マジ？ いただきまーす」

餌をねだる雛鳥のように口を開けて上を向く彼女の口の中に、私は代わりにプチトマトを放り込んでみる。気づかずに彼女は二三度噛み、口の中で広がる独特の酸味を味わって、そこでようやく口の中の物体を判別したようだった。

「……噓つき」

「ごめんごめん、間違えた」

そう言っただけで私は、苦手ながらも唐揚げを半分だけ齧る。何だかんだと理屈をこねた所で好き嫌いが肯定される事はないのだから、直す努力を怠ってはならないのだ。

もっとも、もう半分は食べずに未だに開きっぱなしの彼女の口の中に放り込む訳だが。二個目の肉塊を咀嚼し、飲み込んだ彼女は、食べ終えた弁当を包み始めた。

「ふう、食った食った、と」

今更ではあるが、私の目の前で弁当を食っていた少女は、飯山典子いづまのりこと言っりこつ。

彼女は藪蛇高校に通う一年一組の生徒で、空手部に所属する私の同級生だ。

女子としては少々無精で、まるで男子の様に短く切りそろえた髪は大して手入れも行き届いておらず、ボサボサとあちこちに跳ねている。しかし、高めの鼻に切れ長の目と眉を兼ね備える、素材だけは優秀な女である。磨けば宝塚の男性役として活躍出来そうだ。

事実彼女は、女子からは良くモテる。中学時代から通算すると、彼女の下駄箱の中には三通のラブレターが入っていたのだが、その全てが女子からのものであったと言うエピソードがそれを裏付けている。案外そつち系の女子とは居るものらしい。ちなみに男子からは……推して知るべきだろう。具体的には、今の「ふう、食った食った」等と言う台詞から漂う中年臭辺りから。全体的にガサツであるが逞しい彼女を好む男子もそれなりにいたのだろうが、そういう強気で姉御肌な女子を好む男子は往々にして引つ込み思案で、女子への告白なんてとんでもない、と言わんばかりのチキン共なので、今現在、飯山典子に浮いた話は一つもない。

「……今、なんか失礼なこと考えなかった？」

典子が私を睨んでいる。

何故バレた、と考えてみるが、彼女にとって私の機嫌や思考の機微を読み取ることなど造作も無い。

彼女とは付き合いが長いのだ。どの程度かと言われれば、私がランドセルに黄色い交通安全カバーをかけていた頃からの仲と言えば、程が分かるだろうか。十年来も友人をやっていたれば自ずと相手の考えもアバウトには読み取れるようである。

「典子って、モテないよね」

今更包み隠す事も無いので、私は正直に言っただけ。典子は片眉

を上げて何か言いたげに身を乗り出したが、やがてゆっくりと身体を机に伏せる。

「……んな事あ、身近でアンタを見てる私にや、よおく分かってるよ」

自分で言うのもなんであるが、私は確かにそこそこモテると言う自負がある。容姿は上の下程度から中の方に片足を突っ込んだ程度のレベルと自負しているのだが、それだけではない。

簡単に言えば、私は性格が良いのだ。

……と言つと完全に性格が悪い奴みたいになつてしまつのだが、
実態は違つ。

「世の中間違つてるよなあ。アンタみたいに悪しき心を偽りの笑顔で包み隠してる奴がモテるなんて」

「失礼な」

悪しき心とは随分な言われようである。

確かに笑顔を偽っているシーンは、止まったら死ぬマグロみたい
に一本気な性格をした典子からしてみれば遥かに多いだろう。しか
し私は常に周りの目に気を配り、穏やかでたおやかな言動を心がけ
ているだけである。何も悪い事はない。

「アンタ、私の前だと偏屈で計算高い素が出るよね」

「偏屈つて……計算高いつてのはまあ、事実かもしれないけど」

人には好き嫌いがある。明るい人が好き、静かな人が好き、真面
目な人が好き、など、好みの属性なんて無限にある。

人間の性格なんてそう簡単に変わる訳も無いので、その理屈で行
くと誰とでも仲良くするのは不可能である。よって、己の性格を偽

る事こそが解決する唯一の手段となる。

誰々の前では明るく振るまい、誰々の前では口数を普段より減らしてみたり。これ位は意識すれば誰にでも出来る。私はそれを人一倍多めにやっているだけだ。

「そう言うの、八方美人とか、猫被りって言うんだよ」

「知ってる」

典子に言われなくても、そんな事は百も承知だ。

八方美人と言うと聞こえが悪いのだが、現実的に考えると、八方美人程性格の良い人間は居ない。なにしろ「八つ方向の何処から見ても美しき人」なのだ。誰に対しても分け隔てなく接し、共感を得てやるのが八方美人である。より良い人間関係を構築し、人間社会で生きていく為にこれ程有効な性格はない。

「いつか墓穴掘るよ、そういうどっち付かずな性格ってさ」

「モテない奴の僻みにしか聞こえないわ」

「黙れ馬鹿」

刺のある声が飛んでくるが、この程度は日常茶飯事。

この程度の言い合いは喧嘩にすら届かない、いわゆる冗談の応酬、単なる親友同士の戯れ合いだ。典子は気にした風も無く机から身を起こして、立ち上がり、弁当箱を持って自分の席に帰っていく。それを見送った後、私は自分の弁当の残りを再び突つき始めた。

*

時間は一気に放課後まで駆け抜け、私は自分の所属している女子硬式テニス部の部室で制服から練習着に着替えていた。

今は十月。温かかった気温も下がり始め、練習着の上に長袖ジャージを羽織らねばならない季節が近付いてきている。練習用のユニフォームに袖を通し、肩の辺りにかかる髪を簡単に手櫛で整えた丁度そのとき、背後の部室の戸が軋んだ音を立ててゆつくりと開いた。振り返ってみると、朗らかで人懐っこい笑顔を浮かべた制服姿のシヨートヘアの女性が立っていた。

「よう！」

「あ、外山先輩。こんに……お願いします」

「おいおい、もう入部して半年だぜい。いい加減、挨拶くらい身につけるよ」

我が部では先輩への挨拶は「お願いします」で統一されている。先輩に指導を頂きたい、という懇願の念を込めた格式高い挨拶らしいのだが、未だに「こんにちは」と言ってしまう事があるのは、私がこの挨拶に常々疑問を抱いているからに他ならない。

何故私よりテニスが下手な人にテニスの教えを請わねばならないのだ、と。

勿論、そんなささいな事で顔を顰める私ではない。こちら、伊達で八方美人やってる訳ではないのだ。笑顔の取り繕いなんて朝飯前である。

「すみません、私って物覚え悪くて……」

「ははは、まあ気にすんな。アタシも身につけんのに一年かかったしな！」

外山先輩は、頭を掻きながら申し訳なさそうに身を縮めている私

の心情なぞ悟る気配もなく、バシバシと背中に平手を打つ。この私の遜へりくだりが如何なる意図をもってして行なわれているかなんて、むしろ悟られては困こまってしまうけれど。

彼女……外山菜穂とよまなほは敷蛇高校の二年生で、女子硬式テニス部の部長である。

たった三言の発言であるが、彼女が豪快な性格をしている事は何となく察せるのではないか。その証拠に、部室の扉が半開きなのに制服のブレザーのボタンを外し始めている。外から着替えが丸見えになる事が分らないのだろうか、それとも単に無頓着なのか。

私が黙って部室の扉を閉めると、気づいた外山先輩は振り返った。

「あ、ごめんな」

「いえ」

既にはは全て脱ぎ去っていた外山先輩に、私は短く答えてやる。別段彼女の着替えを誰が見ようが私はどうだって良いのだが、こっぴどって先輩に細かな気配りをしておくと、色々都合が良い。相手が部内最大の権力を握っている部長ともなれば尚更である。恐らく彼女の目には、「良く気の利く真面目で先輩想いな後輩」が写っているだろう。上の人間から好かれる典型である。

「そつえばさ」

「はい？」

「さっき神宮寺がお前の事、探してたぞ。えらくそわそわしてたな。だからありや多分……」

外山先輩は私をニヤつきながら見つめた後、指を鳴らしてこちらに突きつけた。ウィंक付きのオマケ付きだ。しかしブラジャー晒して下がスカートと言う情けない格好でそんなドヤ顔をされても困る。

「デートの誘いだな」

決め顔で言う事じゃないだろ、それ。内心ではそう言っているのだが、私が顔に浮かべたのは、少し困ったような、眉尻を下げた笑顔である。

「え、そ、そんな……」

「おうおう、赤くなっちゃってえ、初心だねえ可愛いねえ」

羞恥に頬を染めて、手で顔を覆う私の頭を指で突つきながら、外山先輩は心底楽しそうな声を上げる。だが、残念。それは演技なのだ。

むしろ神宮寺先輩からの誘いが少々遅過ぎるくらいだ。私が入学した当初から私に近付いていながら、今ようやくデートの誘いだと？ 始めからもつと来れば良いのに、全く面倒臭い男である。

「良かったねえ、相手はウチの高校で五本の指に入る美少年だぜ？」
「で、でもでも、本当にデートの誘いかどうか分かんないし……」

この場にはいないのだが、軽く神宮寺先輩の事に触れておこうと思っ

う。
神宮寺祐介じんぐうじゆうすけ、と言うその男は、男子硬式テニス部の二年生の先輩である。

見た目は外山先輩の言った通り。日本人離れた背丈と顔立ちに爽やかな笑顔を絶やさない柔和なジャーニーズ系の男で、一度だけ某ファッション雑誌の読者モデルとして起用された事もある程の美男子であり、学内にはファンクラブまで存在している人気の男子生徒だ。見た目だけでなく、成績もトップクラス。運動神経の方は、男子硬式テニス部にて個人戦で唯一人だけ全国大会に出場した、と言

えば大体把握出来るだろう。

人当たりも良く、厳しい所は厳しいが、緩める所は緩められると言う、先輩としても理想的な存在である。

「もしかしたら、単なる部活のお話なんじゃないでしょうか……？」
「いや、それは無いでしょ流石に」

呆れる外山先輩の言う通りだ。そんな馬鹿な話があったたまるか。部活の話なら外山先輩に話す筈で、まかり間違っても私に標的が向く事はない。一年生の私に用事があるとは、つまり色恋沙汰以外に考えうる要素なぞ存在しないのだ。

「今部室前に居るから、話を聞いてやんな」
「近づ！」

思わず少しだけ素が出てしまったが、外山先輩は気にした様子はない。幸いだった。

しかし、幾ら何でも近過ぎる。下手をすればこの部室内の会話も駄々漏れである。別に聞かれて困る話があった訳では無いが、なんというか、今冷静な語り口を装っている私も実のところテンパっているのは否めない訳であり、つまり恥ずかしい。

胸に手を当ててみれば返ってくるちよつと強めの鼓動。それを叩いて何とか沈めようと試みるが、無駄な抵抗である。

「ゲホッ」

叩き過ぎた。ちよつと咳き込んでしまった。そんな私の失態を外山先輩は微笑ましい者を見る視線で眺めている。未だにブラジャー一丁のくせに生意気な、と思ってみても、今はどう足掻こうが私に分は無い。

「ほれほれ、早く行つたれや」
「わ、ちよ、痛！」

碌に使つた事も無い関西弁を使う外山先輩に背中を蹴り飛ばされ、私は部室の扉に頭から叩き付けられた。頭上で鳴った、何かが軋む音は木製の扉から出たのか、或いは私の頭から出たのか。粗暴と言わざるを得ない外山先輩の蛮行に腹が立つが、私は澄ました顔で先輩に振り返る。

「蹴るなんて酷いですよ……」

「はは、悪い悪い。ちよつとイライラする事があつてさ」

半分笑顔、半分真顔で外山先輩がそう言った。

イライラとは一体何を指しているのだろう。私があまりに優柔不断であるため、短気な先輩は腹を立ててしまったのだろうか。少々演技が過ぎたようだ。これ以上この場に留まっても外山先輩から虐待を受けるばかりだと気づいた私は、早々に立ち上がりドアノブを握る。

「んじゃ、ちよつと行つてきます」

「おー、さつさと行つてきな。練習、先始めてっから」

外山先輩はようやくTシャツに袖を通して、おざなりにそう言った。

動物でも追い払うように手を振ってソツポを向く外山先輩は、言つては何だが、らしくない。少々違和感を覚えてはいたが、今は自分の事で精一杯だ。構っている余裕は無い。

一度深呼吸をして、心を落ち着けたつもりになった私は意を決して部室のドアノブを捻った。

「うわっつとー！」

少々勢いを付け過ぎていたせいだろうか。扉が開かれるのと同時に男の狼狽える声が聞こえてきた。そして私の眼に飛び込んできたのは。

「いてて……」

「あ……す、すみません、先輩！」

情けなく尻餅を付いていた私の目の前に居る男こそが、神宮寺祐介である。

先程から話題が上がっていた男であり、人となりは既にそこそこ紹介しているため、詳細は省きたい。考えなくても扉に押されて尻餅をついたのだろうか、なにゆえ扉に押される程こちら側に寄っていたのか。

もしや話を聞かれていたのだろうか、と危惧する私の不安げな顔を見て、神宮寺先輩は少し眉を下げて微笑んだ。こんな軽い微笑みさえ一陣の夏の風のように爽やかなんだから、イケメンと言つのはやはり女を幸せにする生き物だ。

「はは、ごめんよ。あんまり気になったんで、ちょっと聞いてたんだ」

普通、そんな事していれば変態扱いされても全く文句は言えないだろうが、それを唱える者はこの場にはいない。私もそれには言及せず、先輩が私を探していた理由を問う。

「ああ、それでなんだけど……次の日曜日、空いてるか？」

「はい、空いてますけど」

「そうか、良かった……ならさ、これ、一緒に見に行かないか？」

神宮寺先輩が制服のポケットをゴソゴソと漁り出した。

恐らく何かしら渡されるのだろう、と言う私の見当は当たっており、それは最近やたらとテレビで宣伝をしている舞台のチケットであった。

ここまではおおよそ予想通り、と言える。展開を予想していたお陰か、私の暴れていた心臓は段々と平常に脈を刻み始めていた。この際チケットの種類は問わない。映画だろうが野球観戦だろうが、要するに彼は私とのデートをご所望なのである。

私は少しだけ顔を俯けて、悩む振りをする。

答えの方はとっくに決まっているのだが、ここで焦って即決するのは愚である。

「ええつと……二人で、ですよね」

「ああ……もしかして、嫌か？」

神宮寺先輩が少し残念そうな顔をしている。

まあ落ち着けよ先輩、と言ってやりたいのを必死で押さえ込んで、私は「うーむ」と小さく唸り声を上げる。神宮寺先輩の前での私は「淑やかで、ちょっと異性が苦手な後輩」を演じているのである。

このキャラの選択は正しかった。神宮寺先輩は爽やかなで清潔なイメージの割りには案外肉食系らしく、何度か他の女生徒……往々にして大人しい女生徒との交際が学内で噂された事もある。

そう言う男は大抵の場合、少し攻略が難しそうな……例えば異性が苦手そうな女性を落とす事に達成感を覚える。私自身のキャラ作りは既に手慣れたもの。後は素の魅力の問題であったのだが、こちらはどうにかクリア出来ていたらしい。

結果として、最早交際直前と言える程度の間柄まで発展できたのだ。

内心では良くやった私、とガッツポーズの一つでも取りたいのだが、キアラ崩壊にも程があるので何とか踏みとどまる。少し困ったように視線を泳がせて、辺りに誰も居ない事を確認する振りをして私は小さく、まるで勇気を振り絞って声を出したかのような細かい返事を返した。

「……私となんかで、良いんですか？」

「勿論だ。いや……君とが良い」

神宮寺先輩は真っ直ぐこっちを見る事無く、蚊の鳴くような声でそう言った。

今の台詞は流石にこちらも素で照れる。「君とが良い」とは、最早愛の告白も同然である。

……のだが、ここはいつそストレートに「君が好きだ」くらい言ってくれば良いのにと考えていた私は、内心少々落胆しつつも、笑顔を浮かべて頷いてみせる。

「分かりました。是非、ご一緒させて頂きます」

満面の笑みを作ってそう答えると、神宮寺先輩は不安そうな表情から一転、普段通りの爽やかな微笑を私に向ける。

「ありがとう！ いやあ、断られたらどうしようかと思っていたよ。じゃ、そろそろ練習の準備しなきゃならないから、またな！」

私の手にチケットを一枚手渡し、先輩は早々に部室棟をかけていく。恐らく女子部の部室が並ぶこの棟に長居したくないのだろう。遠のいていく先輩の足音を聞き届け、私は手の中にあるチケットを眺める。どうやら恋愛物らしい。なるほど、デートで見るとしたら、妥当と言えない事もないか。しかし舞台劇とは渋いチョイスだ。

単に好きだからなのだろうか、或いは別に意図があるのか。

私には分からないし、重要なのは二人で見に行くと言う事である。舞台劇を見終わってしばしその余韻に浸った後、恐らく帰り道すがらにて彼から告白されるのだろう。彼と付き合うのは願ったり叶ったりである。神宮寺先輩は先にも述べた通り、魅力的な男だ。彼よりも理想的な恋人は恐らくこの高校には存在しない。

しかし一応、問題もある。

その原因は、その神宮寺先輩が理想的な恋人として挙げられる事にこそある。

仮に私が彼と付き合い合おうとしよう。しかし、当然付き合い合おうとなれば他の誰かに見られる可能性もある。周りに二人の関係が知られる。その時、神宮寺先輩に憧れを持っていた女生徒、特にファンクラブに所属しているような熱心な彼のファンは一体何を思うだろうか。当然私に怒りの矛先を向けるだろう。私達の神宮寺祐介を独り占めにするなんて許せない、と激昂するのは想像に難くない。

なお悪い事に神宮寺祐介ファンクラブには、私の中学からの友人もそこそこ所属していたりするのだ。

彼女達との良好な関係を崩さずに、尚かつ神宮寺先輩と恋仲になる。

私に課せられた使命は難題である。しかし、どちらか一つを選び取ろうと言う気には到底なれない。

友達に友達として上手に付き合い合っていきたいし、神宮寺先輩のような素敵な彼氏を手に入れるチャンスをみすみす逃すなんて馬鹿な話はない。

「上手く誤魔化しながら……か」

「……何をだ？」

私の背中から低い男の声がかかった。

神宮寺先輩の声を真夏に吹く爽やかな海風と喩えるのなら、こち

らは鬱蒼と茂る冬の林の奥地にある沼地から沸き上がった沼気である。この声の主が誰かなんて考えるまでもない。この残念な意味でオンリーワンの声の持ち主は、知り合いに一人しかいないからだ。まあた面倒な奴が来たな、と内心では齒軋りしながら、私は後ろを振り返る。

「……奥田先輩、こんにちわ」

「先輩への挨拶は、お願いします、だろうが」

後ろに立っていたユニフォーム姿の男は、ワカメみたいに長い前髪を指で掻いて分けながら、眉間に皺を寄せたまま私の頭を平手で軽くはたいた。そしてそれきり男は何も言わずに、ただひたすら私の眼を見ている。私は張り合うのも嫌なので、早々に先輩の要求に応えた。

「お願いします、先輩」

男子とは部活動が別なのだから、お前に教わる事なんて何もねえよ。なんて事が言えたら気も楽になるのだが、流石に男子硬式テニス部の部長に弓を引く勇氣はない。私が素直に頭を下げるが、奥田先輩は私を無視して、女子テニス部の部室の扉に目をやる。

「……外山は居るか？」

「居ますけど……って」

私が答えるや否や、奥田先輩は全く躊躇無くドアノブに手をかけた。

当然中には着替え中の外山先輩が居る訳で、入室なんて許可出来る筈が無い。私は慌てて奥田先輩と扉の間に身体を挟じ込んで、奥田先輩を押し返す。

「何してるんですか！」

「何って……今日のコート割りの話だ。今日は男子が二面使う日なのに、先に来ていた女子が」

「そうじゃなくって、ですね……今、外山先輩は着替えてるんですよ」

「……待って言うのか？ 面倒臭え……」

ぶつくさと陰鬱そうにそう言った奥田先輩は、部室棟の壁に背を預けて腕を組み、そのまま黙り込んだ。どうやらここで待つつもりらしい。

私は早々にこの場を去りたくなつたが、また奥田先輩が部室に入する可能性があるため、目を離したくはなかつた。よって私は部室の扉を背に、つまり奥田先輩の隣に、彼と同じように寄りかかった。

しばしの沈黙が我々二人の間に流れる。別段話すつもりもないし、話す話題も無いので、それで妥当だったりする訳だが。

さて、暇なこの時間、私の隣の男の紹介でもしておこうかと思う。彼は奥田和也^{おくたかずや}。男子硬式テニス部の部長である。その性格は無愛想、と言う言葉一つで説明がついてしまう程に無愛想である。基本的に無口な上、彼の顔面に張り付く表情の七割がしかめっ面と言う剣呑な男で、その強面^{こわもて}っぷりから男女問わず怖れられている。

特に女子からの嫌われ具合が半端ではない。

理由は……今のように勝手に女子部の部室に入ろうとしたり、平然と女子である私に手を上げたりする彼の行動から察して頂きたい。彼は女子部員のほぼ全員から毛嫌いされており、恐らく彼とまともに口を聞いているのは私と外山先輩のみである。外山先輩は彼に如何なる感情を抱いているか分からないが、部長と言う立場柄、彼を嫌う訳にもいかないだろう。

私は、と言えば……持ち前の八方美人の延長線上だろうか、他の

女子程露骨な嫌悪を表にする事が出来ないうでいた。誰にでも良い顔をする、と言う私の本能にも近いモットーが、彼と私の間柄においても発揮されてしまったのだ。別に彼に嫌われても私の他の交友関係及びこれからの交友関係に影響があるとは思えないのだが、全く八方美人と言うのも楽ではない。

ちなみに私は特にキャラ作りをせずに彼と接している。今後付き合っていく予定のない人に対しては、流石にキャラを新調する気にはなれなかった。

「……まだか？」

「……さあ、分かりません」

「催促しろ」

「……はいはい」

「はい、は一回で良い。これも外山に言われてんだろ」

ああもう面倒臭いしうつとおしい！ 苛立ちを隠す事もせずに、私はしかめっ面で部室の扉をノックする。

「外山先輩ー、奥田先輩が待つ」

言いかけた私の言葉は、勢い良く開いた部室の扉が私の身体を吹き飛ばした事で中断された。後に聞いた話だが、外山先輩は部室前の私達に流れていた不穏な空気を察知していたらしく、慌てて飛び出したのだそうだ。期せず扉を顔面に強打した私は、一瞬だけ遠のいた意識を何とか繋ぎ止めて、いつの間にか倒れていた身体を起し、二人を見上げる。

何でこんなに私は満身創痍なんだ畜生、と愚痴をこぼしても私を責められる人はいないだろう。

吹き飛ばした加害者の外山先輩は言わずもがなであるが、奥田先輩も僅かに眉を下げて私を見下ろしている。程度の違いこそ雲泥の

差があるが二人とも心配の色を顔に含ませていた。

「ご、ごめん！ 大丈夫？」

「……だ、大丈夫です」

本当は頭が少々ふらついているし、鼻なんかへし折れたんじゃないかって位痛い。

しかし、まさか「痛えじゃねーか馬鹿野郎！」なんて言える訳も無く、私は健気にも微笑んでみせた。わざわざ手を借りる必要も無いが、私は外山先輩から差し出された手を頼って立ち上がった。

「ありがとうございます、先輩」

「いいのいいの、アタシが悪いんだもん。それよりも……」

外山先輩は一度私の頭を撫でた後に、隣で未だに腕組みをして佇んでいる奥田先輩に向き直る。彼に、まるで悪魔を前にした勇者のような険しい視線を投げかけながら彼の胸倉に掴み掛かる。

「アンタねえ！ ちょっとは悪いと思わないの！？」

「……はあ？」

肉迫された奥田先輩は訳が分からない、といった表情で外山先輩を睨み返す。

……流石にこれは外山先輩の理屈がおかしい。

奥田先輩はただ扉の脇に突っ立っていただけで、悪いのは全面的に外山先輩である。だが、こんな理屈をこねて奥田先輩を弁護してやるうなんて気はさらさらないので、私は黙って事の成り行きを見守る。

「俺は全く関係ねえだろうが」

胸倉を掴んでいた手を強引に引き剥がした奥田先輩は、いつも通り無然とした顔でそう吐き捨てた。

「アンタが事前に察知してればこんな事には」

「俺はエスパーかよ……こんなコントにいつまでも付き合う程暇じゃねえんだ。」

今日のコート割り間違っただのかわかんねえが、早く来てた女子がウチの分のコート整備してんぞ」

「ありゃ？ ……あれ、今日って男子二面？」

とぼけた顔をしてみせる外山先輩に、奥田先輩は容赦なく詰め寄った。

「昨日二面使ったのはテメエらだっただろうが……」

「あはは……悪かったよ。めんごめんご」

「氣いつけるよ」

外山先輩が頭を掻いて苦笑いしても誤魔化されてくれない奥田先輩だったが、それ以上の追求は無駄と判断したのだろう。私達に背を向けて、ゆっくりと部室棟から歩き去っていく。先程の神宮寺先輩とは対照的だ。

その背中が完全に見えなくなっただけから、外山先輩は溜め息を吐く。

「アイツの相手は疲れるねえ」

「そうですね」

私は外山先輩の相手も結構疲れるのだが、確かに奥田先輩程相手にしたい人間はいない。

見た目通り陰鬱だし、なにより彼と同じ空間に居ると空気が妙に

張りつめる。概ね爛漫かつお気楽で、周りとの不和に細心の注意を払って生きてきた私は、恐らく彼のような常に周りとはぶつかっているような人間とそりの合う事はないだろう。

別にそれを残念に感じたり、逆にラッキーと感じたりする事は無い。心底どうでも良いからである。

「私らも早く行かなきゃね」

「……それもそうです」

私は一年生であるので、本当なら早めにコート整備組に加わらねばならないのだが、今日は色々ハプニングがあったから見逃してもらえそうである。本当に外山先輩と言う人は都合が良い、もとい、人の良い先輩である。

*

そして、まもなく決定的な事件が起こる。

もしもこの世にタイムマシンがあれば私は迷わずその瞬間までタイムスリップをして今すぐ歩みを止めさせただろう。或いはもしも私に未来予知能力が備わっていたら、この時私は家路にこの道路を選び取る事すらなかった筈だ。

それ程までに後悔するような事は後にも先にもない。私はそう言い切る自信がある。

私が猫に呪われた理由

練習終了後、私は一人、夕暮れ過ぎの家路についていた。

吹く風は秋風と言うには少し冷たく、部活疲れの私の身体には芯から響く。

陽光煌めく青春の夏の日々はテニスの練習に費やされたお陰で、とうの昔に終わってしまったている。日が落ちる時間も段々と早くなっているのが日々の夕空を眺めるだけで実感出来る。足元で舞い上がる出身地不明の木の葉を踏みながら、私は疲労とは裏腹に一人、顔をニヤケさせていた。

理由はたったの一つ。私の制服の胸ポケットに突っ込まれている舞台劇のチケットである。

なんととっても一緒に観劇するのは校内でもトップクラスのイケメン。しかも顔だけではなく、頭が切れる上に性格も温和で紳士と、非の打ち所の無い理想の男。

彼のファンクラブの存在こそ邪魔であるものの、そんな男性とお付き合いが出来るであろう私は、世界幸せランクのトップ100くらいにはランクイン出来そうな気さえする。そんなランク無いだろうけれど。

「次の日曜日か……」

今はまだ火曜日。日曜日は五日後。それまで私は悶々とチケットを眺めながらにやけ、ファンクラブ対策を嬉々として練る事しか許されない。なんとという焦れったださだろうか。なんとという、幸福な焦れったださだろうか。

作り慣れていない清楚で淑やかな後輩キャラを演じてきた苦労も報われた達成感と相まって私は胸を躍らせて、半ばスキップ状態で街灯が照らす薄暗い道を駆ける。

その時不意に、一陣の風が少し強めに吹き付ける。

「きゃっ！」

普段より練習が終わるのが遅かったせいだろうか、或いは単に気圧配置が悪い日だったのか、風は私のスカートを捲るのに必死なのかと言ってやりたい位に冷たい空気を乗せて続けざまに吹き荒び始める。

早めに帰って、家でシャワーを浴びて暖まろう。私がスキップを止めて、本格的に駆け出して、三步目の事であった。

「ぐにゃ！」

足元からヒキガエルが鳴いたような、不細工な声が聞こえてきた。次いで右足の裏に返ってくる、アスファルトとは違う感触。まるで粘土でも踏んだような、ちよつと柔らかめの感触だ。

何かを踏んだ、と言うのは直感的に理解出来た。慌てて右脚を持ち上げて、通り過ぎてしまった道を振り返って足元を見る。

そこには黒い塊があった。真っ黒のその塊はアスファルトに溶け込んでいたせいか、私の眼に入らなかつたのだ。少し身を屈めて、その塊の正体を見極める。よくよく見ると黒い塊は、黒い毛に覆われた何かのようであった。

「なう………」

黒い塊が音を発した。一体なんだろうと手を伸ばすと、その黒い塊は身じろぎを始めた。

「んみやあああ」

「うわあ」

普通ならもつと早く気づくべきだろうが、生憎今は薄暗いので物の判別が出来なかったのだ。

黒い塊は一際大きく鳴き声を上げ、丸くて金色に輝く二つの双眸をこちらの方に向ける。私は伸ばしかけていた腕を引っ込めて、地面にうずくまっているそれ……黒い猫としばし睨み合った。

体毛はアスファルトと宵闇に溶け込む黒一色。満月を思い起こさせる二つの金色の目。細い六本の髭のみが白く街灯を反射していた。首輪がない所を見ると野良らしいが、その割に毛並みは美しく、まるで手入れされているかのようにさえ感じられる。

私の足が踏みつけた物体は、どうやらこの猫だったらしい。

「……ふうふううう」

道ばたで猫が横たわっていると言う事がまずよく分からないのだが、踏んでしまったのは事実である。踏まれて怒り心頭な猫が、立ち上がって毛を逆立て、ついでに尾先も天に向けて威嚇してきた。

よくよく見るとその尾先は先端で、芽生えたばかりの植物の二葉のように裂けている。アスファルトには僅かに血が付着しており、どうも尻尾が裂けたのはつい最近らしい。

もしかして踏んだ時に、と懸念した私が靴の裏を見ると、案の定であった。ローファアの踵の辺りに少し血がついている。おそらくこの猫のものだ。踵で猫の尻尾の先端を、踏みつぶしてしまっていたらしい。

「あっちゃあ……」

この時私の頭に思い浮かんだのは、猫への謝罪の気持ちではなく、靴に付いた血痕への嫌悪であった。動物の血……私の嫌いな、触れるのも嫌な、動物の血がこべりついているのだ。多少嫌な顔をする

くらいは許されるだろう。

私は身を屈め、威嚇を続ける猫を強く睨み返してやる。猫はこうして相手を威嚇し続け、そのうちに喧嘩に発展する習性があるらしいのだが、この時の私はそんな事を知る由もない。

十秒程互いに睨み合いを続けた後、私が喧嘩を買ったと判断したのでろう。黒猫は私の懐に俊敏な動きで飛び込んできた。

「ひい！」

情けない声を上げた私は飛びかかれて尻餅をついてしまう。そして猫はそのまま私の腹の上で前肢を屈めて、すぐさま顔面に突進してきた。

「ふしやああ！」

到底猫とは思えない咆哮を発した黒猫は、右前足から爪を覗かせ私の顔面に猫パンチを繰り出した。

咄嗟に顔を避けようとしたが、無理だ。私の反射神経はプロボクサーのように鋭敏な訳ではない。

頬の辺りに鋭い痛みと熱を感じた。

確認しなくても分かる。猫に引っ搔かれた。

野良猫風情が、人間様の、しかも嫁入り前の娘の顔に傷をつけた。つけやがった。

この時の私の激情たるや、筆舌に尽くし難い。急激に視界が狭まり、私の眼には最早憎き野良猫しか映っていなかった。

「いっ！」

私は、腹の上に乗っかっているその猫を靱で、全力で殴りつける。殴られたその黒い猫は面白いように横に吹き飛び、アスファルト

の上で二三回横転した後、こちらに背を向けた状態で倒れ伏した。私は立ち上がってそれを追いかけて、倒れている猫に向けて、思い切り足を振りかぶり、そのまま振り抜いた。

猫は案外重く、サッカーボールのように吹き飛ぶ事はなかったが、宙に浮かされた身体はブロック塀に激突、猫の身体は再びアスファルトに叩き付けられた。

そこに追い討ちをかけるように、私は無抵抗に倒れているその猫の脇腹を、思い切り踏みつけた。

「この、この、クソ猫！ この！」

一度だけではない、二度、三度、四度……幾度となく、猫を踏みつけた。体重を乗せて、全力で。リズムよく、テンポよく、何度も何度も、猫の痛みなんて考えずに、激情に任せるままに猫を踏みつぶす。

「はあ……はあ……はあ……」

気付いた事には、既に遅かった。

私の右足……猫を踏みつけていた方の足を上げて、猫の様子を窺う。

猫は四肢を投げ出して、微動だにしない。目は半開きで生気がなく、猫の小さな口からは血が垂れている。

足先で猫の腹を突つてみるが、猫は何の抵抗も示さない。

猛烈に嫌な予感がした。今まで頭に上っていた沸血が一気に冷め切っていた。

ヤバイ、これはヤバイ。いくらなんでも殺すつもりはなかった。

この辺りは住宅街で、人通りもそれなりにある。誰かに見られていたら一大事だ。来た道の方、誰もいない。行く道の方、同じく人はいない。良かった、なら、さっさと逃げよう。

私は慌てて立ち上がり、未だにグツタリと横たわっている黒猫を見ないように目を離して、再び家路に着く。

猫の自業自得だ。道ばたなんかで眠ってて、勝手に私に襲いかかってきて、私の顔に傷をつけたのだ。それに反撃して何が悪い。猫如きが人間様に逆らうのが悪いのだ。猫の命より、乙女の顔の傷の方が重大に決まっているじゃないか。

私は悪くない。そう、悪くない筈だ。

自分にそう言い聞かせながら、私は息を切らせて必死で街灯照らす住宅街を駆け抜けた。

*

「ただいまー」

「あら、お帰りー」なんて返事があるのが一般的な家庭なのかもしれないが、生憎我が家はそれには当てはまらない。別に家に誰も居ない訳ではない。その証拠に、家の灯りは灯っているし、鍵だつてかかっている。

母親が家に居る筈だ。

しかし玄関を開けて出迎えてくれるのは、室内の寒々しい空気と電気の付いていない真っ暗な廊下だけである。

今はそれが幸運だった。

未だ猫の殺害で動揺していた私は、出来るだけ誰とも顔を合わさずに、靴に付いた血と顔に付いた傷を処理して、先程の事を忘れようと必死だった。恐らく母親は奥のリビングで夕方再放送しているドラマに夢中なのだろう。

私は靴を脱ぎ、右側だけ持つて上がり、リビングの扉を素通りして、風呂場の洗面台で鏡を見る。

「うわぁ……」

左の頬に二本の短い裂傷が入っている。傷の深さはうつすら血が滲んでいる程度であることが幸いだった。

靴を洗面台脇に置き、顔を洗う。冷たい水が左頬の傷に良く染みる。少し痛むそこを特に念入りに荒い、私はもう一度顔を上げる。

「……目立つなあ」

傍目では分からないかもしれないが、近くに寄れば頬に赤い二本のラインが入っているのが見える。

痕にならないかどうかも不安だが、それ以上に不安なのは、来週の日曜日の事である。神宮寺先輩とのデートを控えていると言うのに、頬に絆創膏を張る羽目になりそうである。かさぶたか何かになつてしまえば、化粧で隠すのも少々難しい。

だからといって断るつもりはないが……畜生、あのクソ猫。余計な心配事増やしやがって。

「……つと、そうだ」

傷に気をとられていたが、私の靴裏には猫の血が付いている。

量は本当に僅かであり、アスファルトに赤い足跡をつけてきた訳ではないので、私が猫を踏み殺したと言う事実が露呈する事はないだろうが、万全を期する必要がある事に変わりない。念入りに洗い落としておく必要があるだろう。

少し多めの量の水を流し、雑巾で擦つて完全に血を落とす。少し朱に染まった水が排水溝に消えて行くのを見送る。

これで私とあの猫を繋ぐ線は頬傷のみとなったが……こちらは幾らでも言い訳が効く。ちよつと転んで切っちゃった、とでも言っておけば大半の人は納得するだろう。少し大きめの絆創膏で傷を覆えば、傷が裂傷であるかどうかも判別することは出来ないのだし。

私は安堵の溜め息を吐いていた。この間、リビングに居る母親は、私が目まぐるしい証拠隠滅を行なっていた事に気づきすらしない。いや、そもそも私が帰宅した事も把握していないかもしれない。

私は靴を玄関に戻し、頬傷を消毒して絆創膏を貼る為に薬箱を求めて、母親が居るリビングに向かう。

「……………」

「……………あら、おかえり」

ソファに寝そべった、ウェーブがかつた髪の毛、太った中年女性が咳くようにそう言った。

私ではなく、テレビの方を向いたままである。

今テレビ画面に映し出されているのは新作の菓子のおCMであり、別段母が興味を惹かれるようなものではない。単に私の方を向こうとしないだけだ。

私はその女……悲しい事にその女は私の母なのだが、彼女の挨拶には何も返さず、一目散にテレビ脇の戸棚の最上段に手をかける。

「ちよつと、テレビ見えないわよ」

「……………」

私は無言のまま、彼女の言を無視してテレビの前に立ちはだかり、棚に入っていた薬箱の中から消毒液とバンドエイドの箱だけを取り出す。そして母とは一言も会話を交わさないまま、私はリビングから歩き去って行く。

ここ最近、私と母はずっとこの調子であった。

大きな喧嘩をした訳でもない。ただ、私が母を一方的に嫌っているのだ。

これは単なる反抗期と言う言葉で片付けられる程単純な問題ではない事を先に言っておく。母を嫌いになる理由なんて、私には三秒もあれば五万と上げられるだろう。

取りあえず真っ先に思いつくのは、そのカバを思わせる容姿である。

ふくれた顔、ふくれた腹、ふくれた腰回りとふくれた脚。ドラム缶でももう少しメリハリのある体型をしているんじゃないだろうかと思う程球体に近いそのある種近未来的なフォルム。体重は聞いた事はないが、聞きたいとも思わない。これ以上彼女を嫌う要素を増やしても仕方ない。太っているだけならまだしも、何故か常に不機嫌そうに眉間に寄る皺と細い目が彼女の醜悪さに拍車をかける。顔には染みやニキビが大集落を築いており、彼女はそれを減らすようにとする努力すらしていない。母の昔の写真を見ると、これがどうにも私と瓜二つで「私の将来がこんなのか」と深い絶望に陥ったのは記憶に新しい。

二つ目に、家事をしない事。

今は夕暮れ過ぎであり、一般的な専業主婦であればそろそろ夕食の支度に取りかかっているだろうが、母は別だ。炊事だけではない。洗濯掃除なども、何もしないのだ。パートで仕事に出掛ける事すらない。やっている事と言えば一日中家のソファで寝転がり、光合成も出来ないくせに日光を浴び続ける事だけだ。現に今彼女が着ているのは、朝も着ていたパジャマである。

そして更に悲しい事なのだが、母の存在を無視しても、私達家族……両親と私の三人の生活は全く問題無く運営出来るのだ。私が家事を覚えたのは小学校低学年程度。十年近く家事をやっている私はそこらの新婚さんのちよー幸せ一杯花嫁修業って何ですか？ っとな嫁よりもよっぽど主婦をしているに違いない。家事は私と父で7：3に分担して行なっている。今日は私が夕食の当番だから、そろそ

る夕食を準備しなければならぬ。当然不満はあるが、母に料理を作らせた所で名状し難き物が生まれるだけなので、その部分は諦めた。もう、本当に彼女は何の為に存在しているのだろうか。ひからびて死ぬ、と思ったのは一度や二度ではない。

三つ目に、態度が悪い。

こんだけ場所と年を食った二トのくせに、彼女は一丁前に母親を気取つていやがる。横柄な態度は、年々と肥大さを増して行くばかりで、おさまりを知らない。私が無視している事に関しても説教を垂れる事がしばしばあるが、お前にだけは言われたくないと内心ではいつも反駁している。

これ以上はきりが無い。

とどのつまりは私はこの態度と身体のデカいグウタラなカバらしき何かが嫌いなのである。だから私は、せめて私はこうはなるまいと抵抗する意味を込めて、母の存在を無視しているのだ。

「……………あ、そろそろ夕食お願いね」

背中にかかったその声に、手を振って返してやり、私は自室へと引っ込んで行く。

どう足掻いても彼女は私の母親で、健気な父の愛する人である。父も不運な人だ。何故こんな女と結婚を決意し、なおかつ離婚せずに生活しているのだろうか。幾ら面倒臭いと思っても作らねばならない食事のメニューを勝手に考える頭の片隅で、私はひたすらに現状を憂いていた。

*

今現在、私を取り巻く環境で特筆すべき事は精々この程度だ。
細かい友人関係を突き詰めて行くと、まあ、色々あるのだが、正
直物語上関係あるかどうかは判断しかねる。

とりあえず私が、結構エグい性格の上に猫を被って生きている人
間である事は薄々分かって頂けた……かな。素を出して接している
人も中にはいるのだが、そういう人は往々にしてどうでも良い人、
或いは気の置けない人だ。

しかし、それも当然だと思う。人間、常に自を出しすぎでは生き
ていく事は出来ない。

出る杭は打たれるのだ。だから、出る杭にはならない。たとえ出
たとしても、自分から飛び出て行く事はない。そうやって自分の本
性をひた隠しながら生きていく。

それが人間である。やっぱり、猫を被らない人間なんて、どこに
もないのだから。

*

何だかんだと夕食を作り、そして母と別々に食事を取って入浴、
その日は残業しているらしい父の帰りを待たずに就寝。頬の傷の事
は寝る寸前までずっと私の心の中で管を撒いていたが、殺した猫の
方は既に頭の中から消え始めていた。

そして、その翌朝。

私は身体に吹き付ける少々冷たい風を受けて意識を覚醒させた。

風なんて受ける筈がない。自室の窓は締め切っていたし、私は昨
晩は普段以上に低い気温に身を震わせながらベッドに潜り込んでい

たのだ。最も寝惚けて窓を開け、そして掛け布団を蹴り飛ばしたと言っ可能性だつてゼロとは言い切れないが。

……流石にゼロか。私は寝相は良い方だと自負しているし、理由なく窓を開けるような夢遊病の気さえない。であれば一体どうして私は朝からこの寒さに震えさせられているのだ。

原因を確かめる為に、ゆっくりと目を開く。

「……あれ？」

おかしい。視界が異様にぼやけている。まるで霧でもかかっているのかと思う程、周りが良く見えない。

何度か目を擦って、もう一度見回す。視界が悪いのは相変わらずだが、何とか周りの状況は把握できた。

目の前には所々が欠けた石畳の道。その石畳の道の両脇に銀杏の木が立ち並び、落ち葉が辺り一面に散らばっている。

後ろには、柱の殆どが腐りかけて、なんとかギリギリ形を保っている木造の建物。

顔を前に向けて見上げると、無骨で荒く切られた花崗岩で作られた鳥居が私を見下ろしている。

「ここは……」

幼い頃の記憶を検索すると、一件だけヒットがあった。

ここは私の住む町の郊外。野山の中腹にひっそりと佇んでいる無人の神社……いわゆる祠である。小さい頃は鬼ごっこやらかくれんぼやらで近所の友達とこの辺りまで遊びにくる事も稀にあったのだが、当時はもう少し整備されていた筈である。

最も、誰も参拝しないのだから汚れてゆくのは当たり前かもしれない。私だってこんな遠くまで来て名も知らぬ神を祀った祠を掃除しようというボランティア精神は持ち合わせていない訳だし。と言

うかそもそも、今は懐かしさに浸るよりも先にもっと考えるべき事がある。

なんだって私はこんな所で寝ているんだ。

私の家からここまででは子供の脚で一時間近くかかる程遠い。例えば私が夢遊病患者となったとしても、一時間近くも夢遊する程の重症であるとは、幾ら何でも信じられない。

「……兎に角、帰ろう」

原因は兎も角として、私がここで寝ている事は事実。それは事実として受け止めよう。

今の時間は分からないが、肌寒さと太陽の低さから考えて、朝なのは間違いない。

今日も学校があるのだし、何より朝食を作らないと。母はどうでも良いのだが、父が可哀想である。急いで立ち上がろうとした時、私は更に衝撃的な光景を目の当たりにしなければならなかった。

「……………」

立ち上がる時、不意に顔を下に向ける。そして私の眼に飛び込んできたのは、妙に白い毛の塊であった。

「……うん？」

おかしい。私の身体があるべき所に、白い毛の塊がある。

脚があるべき所にも白い毛の塊が転がっている。

腕があるべき所も同じ。そして、胸があるべき場所も、全身の何処もかしこもが白い毛の塊だった。

昨晩着たパジャマはブルーの水玉模様。下着は上下共に白だったが、まさか下着がこんなに肥大する訳がない。

よくよく目を凝らしてその白い毛の塊の正体を探ると、私の脚は確かに脚だ。腕も確かに私の腕だ。胴も。動かしてみればそれに応じて上下するのだから。

立って見下ろそうとして、バランスを崩し、転ぶ。腕も脚も異常に短くなっていた。指の感覚が妙だ。指が開かない。

「っていつか……」

どう見ても私の四肢、そして胴体は人間の物ではない。人間がこんなに毛達磨な筈がない。

そこにいたのは白い獣だった。顔が青ざめていくのが自分でもよく分かる。感覚鋭い聴覚が、私の高鳴る心音を的確に捉えていた。

これは何だ。私は人間だ。こんな白い毛に覆われた動物じゃない。

「……………これって……………」

上手く立ち上がれないので、私は四つん這いで前に歩みを進める。むしろ普通に歩くよりも自然に脚が進んだ。まるで赤ん坊のように視界が低い。背の高い草に阻まれて遠くが見えない。飛び交うバツタやらコオロギやらに何度も道を阻まれながら、私はあてどなく駆け回る。

おかしい。おかしいおかしいおかしいおかしい。

明らかに異常な事態に、眠気は完全に吹き飛んだ。草の根を掻き分ける事に違和感がない今の自分の行動が不可思議極まりなかった。これは何だ。なんのドッキリだ。誰が得するドッキリなんだ。飽くまでドッキリと言う可能性を捨て切れない私は、最後の確認として姿見を探し求める。

鏡はないが、祠のすぐ側には池があった。私は池を前に、少し怖じけ付く。

確認してしまえば、何かが音を立てて崩れてしまいそうだった。

最後の理性の砦が崩壊してしまふ気がしていた。このドツキリをドツキリとして認める事が出来なくなるのではないか、と今更な不安を抱く。

しかし、見た。勇気を出して、決着をつけるため、池を覗き込んで写った自分の顔を見る。

「……………おかしいよ」

自然と口をついて言葉が漏れた。

おかしい。

おかしいおかしいおかしいおかしい。

おかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしい。

おかしいってコレ。幾ら何でも、滑稽だ。

こんなものは事実として認められる筈がない。やっぱり夢だ、コレは夢なんだ。

私は早く夢から覚めたくて、自分の手……………と言つか前足に生えた爪を立てて、自分の顔を一度、思い切り引っ掻いた。

痛い。昨日の黒猫に引っ掻かれた時のような熱い痛みが頬に迸る。もう一度引っ掻く。同じだ。痛い。猛烈に痛い。白い毛に血は良く映えて見えた。

痛みが引く気配はない。夢が覚める気配がない。

むしろ時間が経過すればする程、強くなる痛みが嫌がおうにも今が現実であると文字通り痛感させる。

「……………なんなのよ」

水面に映った私らしき何物かは、小さな口を開けてそう呟く。

私が右の前足を上げると、映った私も同じ動きをする。左を上げ

ても同じ動き。首を左右に振ってみせても、映った私は完璧に私の動きをトレースしていた。

つまり、今この池の水面に映る私の姿こそが、今の真の私の姿だ。その現実には、私は意識が遠のきかけるが、踏みとどまってしまった。いっそ気絶したほうが気が楽だった。

水面に映っている白い毛並みの獣が、半分目を空けて頭をフラフラとふらつかせている。その時の私の心境を言葉にして言い表すのであれば……そう。

「……なんなのよコレェ！」

朝起きたら自分の身体が白い猫になっていた時のような心境、と
喩えるだろう。

私が猫に謝った理由

「よお、人間様」

水面に映る、目を丸くして口を開けて呆然としている白い猫を見つめる私の背後から声が聞こえた。

まるで地響きの様に低く空間を揺らす男の声だった気がするのだが、気が動転している私に細かい状況把握能力は備わっていない。

一先ず池から顔を上げ、後ろを振り返る。目線の先にあつたススキの草むらを掻き分けて、一匹の猫がひよっこり顔を覗かせた。

その猫には見覚えがある。

黒い毛並みに、二つの金色の巨星を思わせる猫目。なによりも、尻尾の先端が真っ二つに割れているのが目を引く。昨日踏み殺した猫……いや、生きているのだから、踏み殺しかけた猫、と言うべきだろうか。その猫がそこに座っていた。

「どうだい、猫になった気分ってのは。案外良いもんだろ」
「ひいっ！」

黒猫は私に歩み寄って、目を細めてにやあ、と一つ鳴いた。

しかし、その鳴き声は意味を持っていた。私の耳には、その猫の鳴き声は、あたかも人間の言葉を喋っているように聞こえたのだ。

猫が、人間の言葉を喋っている。その事がまず驚愕である。人語を解すならまだしも話しかけてくるなんて、そんな馬鹿な話があったたまるか。

私は首を左右に振って、辺りを見回す。声当てしている誰かが居るのではないか、なんてこの後に及んでまだそんな事を考えていたのだ。

「周りにや誰もいねえよ。ここら一带は犬の縄張りだ。本来なら猫は出入りを禁じられてる」

全くもって、何の事やらサッパリわからない。

犬の縄張りだろうが猫の縄張りだろうが関係ない。私は人間だ。絶対人間だ。猫の姿が水面に映ったのは、ちよつとした幻覚なんだ。

「な、な、なんの事よ。と言うか、コレは何？ 私はどうしちゃったの？」

「説明する必要があるかい？」

黒猫は大きな眼を半分だけ閉じて、口元を僅かに上げる。まるで人間のように笑っていた。

まるで私を蔑むかのような目で見ているのが苛立つて、私は頭を低くして口を大きく開け、尻尾を振って黒猫を威嚇した。

もうこの時点で私はどう考えても猫そのものなのだが、認めない。断じて認めてたまるか。

「アンタは何を知ってるのよ……言えよ、クソ猫」

「言葉が下品だねえ、人間様」

黒猫は呆れ果てたようにそう吐き捨てて、草むらを掻き分け、私のすぐ横を通り過ぎ、池の水に口をつける。

どうやら水を飲んでいられるらしい。私はその猫が水を飲み終え、次の言葉を吐くのを律儀にも座して待つ。ぴちゃ、ぴちゃ、と言う音を立てながら、黒猫は舌で水を救い上げ、器用に口に運んで行く。

そう言えば、私も喉が渴いた。

隣で水を啜る猫を真似たくなつたが、踏みとどまる。こんなミドリムシやらゾウリムシやらが無数に生息していそうな池の水なんて、到底飲めない。唾を飲んで我慢した。

私のその様子に気づいたのか、黒猫がこちらに目を向けている。
中々耳が敏い奴だ。

「……ねえ」

「あんだよ」

「私、何でこんな姿なの？　って言うかそもそも、私が人間って知
ってるって事は……」

「やったのは俺だからな」

黒猫は水を飲みながら、投げやりで面倒臭そうに、尚かつ実につ
まらなそうにそう言い放った。

「……やったのはって？」

「俺がテメエを猫に変えてやったのさ」

水を飲み終えたらしい黒猫は、顔を上げてこちらを向きながらそ
う言った。

太陽が東から昇る、と言う当たり前の真理を吐くような真顔で、
言いやがったのだ。もう既に頭の中は混乱の極地にあったのだが、
諦めて私が猫と化したと言う仮定で話を進めよう。

となると、私が猫となった原因はどうやらこの黒猫にあるらしい。

「変えてやったってアンタ、意味分かんないわよ。アンタって化け
猫か何かなの？」

「並の猫がこんな事出来るんなら、人間は絶滅してるだろうよ」

それもそうだ。

猫の一存でいちいち人間が猫化してしまえば、地球上で最も優位
に立つ動物は人ではなくて猫だと言う事になりかねない。

という事は、隣に居るこの黒猫は、もしか本当に化け猫なのだろ

うか。

「物わかりが悪いな、お前。ほれ、俺の尻尾見りゃわかるだろ」

立てた尻尾を左右に振ってみせる黒猫の尾先は綺麗に二つに割れているが……これはまさか。

「どこからどうみても猫又だろうが」
「……………」

猫又というのは、人間に化けたり、人を喰ったりと、兎に角ただの猫に化け物らしい特徴を足したような妖怪だ。最大の特徴はその尾である。私が見聞きした記憶では、猫又は尻尾が二本あるから猫又と言う……んだったが。

黒猫の尻尾は一本だけだ。先が分かれて二本になっているが、まさかコレで猫又を名乗る気なのだろうか。

そもそも、その尻尾の先は私が踏みつぶして裂けてしまったのではないのだろうか。

試しにそれを問うてみると、黒猫は後ろ足で首の後ろを搔きながら、大あくびをしたあとようやく答えた。

「人間に踏まれた位で尻尾が裂けたりするもんかい。

先っぽが潰れて血が出たのは確かだけどな。本当に痛かった」

黒猫は右に前足を上げ、手首を少し傾けて、招き猫のようなポーズをとる。

そして上げた前足から少し黄ばんでいるが、艶がある三本の爪が覗いていた。

「そのあと執拗に踏みつけてくれたよなあ。久しぶりに命の危機

を感じたよ」

「……アレはアンタがいきなり私に……っ」

黒猫が一步脚を前に進め、私は口を嚙む。

言い訳が通用しそうにはない。私がこの猫を踏み殺しかけたことには違いなのだ。

恐らく私はこの黒猫に、あの鋭利な爪で死ぬ目に遭わされるのだろう。町で絡んできた不良がナイフを取り出したときとか、目の前の車から黒服の男が降りてきたときと言うのははきつとこんな心境なのではなかるうか。経験はないが。

このままではマズい。何とかして逃げなきゃ。

私は猫から一步後ずさる。

動物には背を向けて逃げるよりもこうして目を合わせながら後ずさりするのが効果的である。長年動物との接触を回避してきた動物嫌いの私だからこそ得たこの極意、果たして化け猫にはどこまで通じるのだろうか。

それは分からないが、抵抗するからには最大限だ。全力で逃げ切るしかないのだ。

黒猫が一步進むと、私は二歩下がる。それを繰り返して、私は徐々に黒猫から遠ざかっていく。四肢の動かし方はまだちょっと慣れないが、間接筋肉共に人間より遥かに柔軟であるためか、動きに違和を感じる事はない。

大丈夫、きつと逃げられる。私は内心でほくそ笑みながら、一步、また一步と後ずさる。

「……おい」

「………何よ」

黒猫が不意に口を開く。今更遠ざかっている事に気づいたか。所詮猫、オツムの程度はたかが知れている。

私が今後ろに振り返って、猫ではなく脱兎の如く駆ければこの生い茂る山中で、黒猫よりも更に一回り小さな身体の私を見つける事は出来まい。黒猫が歩みを止めて立ち止まった。尻を地面につけて尾を立てて、少し首を前に突き出して私の様子を窺っている。

追跡を止めたこの一瞬の隙を見逃す訳にはいかない。私は後ろを振り返り後ろ足を思い切り蹴り出して跳ねた。ビックリする位身体が軽い。碌に勢いもつけていないのに、私は自分の数倍の高さ、長さを跳躍する自分の脚力に驚愕していた。

なるほど、猫の身体と言うのはこう言う時に限って言えば便利かもしれない、と頭の片隅で思っていた矢先。

ふと私は着地地点に視線を落とし、前足の置き場を探す……が、しかし。

「……………遅かったか」

黒猫の声が聞こえた。確かに遅かった。もう少し早く行っておいで欲しかった。

今私達は池の縁で言葉を交わしていた。池は私の右手側にあったのだが、その池が真円形とは限らない。後ずさった先にも、池がないとも限らない。

私の身体は美しいフォームを描いて、真つ逆さまに池に落下する。

「うひゃああ！」

自分でも素っ頓狂だと思ふ奇怪な声を上げて、私は全身を包む冷水に凍えた。

水の温度もさることながら、この池は案外深いらしく、私の短い脚では底につかない。

脚を必死にもがいて顔を浮かばせようとするが、この身体では上手くバランスがとれない。人間の頃は脚がつかない場所で泳ぐ事く

らい造作も無かったのだが、猫として泳ぐのは始めての事。

頭の混乱さえ未だに抜けない私に、猫の身体で器用に犬かきしろ、だなんて無茶以外の何物でもない。私は、池の縁で水飛沫を上げてもがく私を見つめる黒猫に顔を向けた。

「た、助け、ゴボツ、助けてえ！」

「助けて？ 誰が？ 誰を？」

黒猫の、蔑むような声が私の耳に届いた。

いや、この場に溺れている人がいたら助けるのが人情って物だろ。このクソ猫め、私を見捨てる気が。

「テメエなんか助けても、俺は何にも得しねえだろうが」

「何言つて、普通、助けるでしょ！ 困つ、てる、人、見捨て、るの！？」

「見捨てるさ。それが猫だ」

黒猫は残酷にそう言って、ひたすらに溺れる私を見て目を細めている。

実に楽しそうだ。こちら今まさに命の危機に瀕していると言うのに。

……しかし、よくよく考えなくたってそれは当たり前かもしれない。私は理由はどうあれ、この黒猫を殺しかけたのだ。

私だって、もしも私に向かって刃物を振り回してきた様な輩がいて、ソイツが池で溺れていたとして……果たして助けるかどうか。

……いや、やっぱりきつと助けるだろう。それが理想の人間像であるからだ。

自分を殺そうとした人間を身を呈してまで救出する。なんともヒロイックな展開だ。それが正しい人間の姿なのだ、と偉い人は述べらるだろうし、周りの人間も、私の心の広さを褒め讃えるだろう。

つまり、人を助けた事が、私と言う人間の株を上げる事に繋がるのである。

「あの人は良い人だ、なぜなら自分を殺そうとした人間すら救い出すのだから」と言った具体的エピソードを交えた賛美が私を待っているだろう。

情けは人の為ならず、と言うが、まさしくその通りである。

「俺は猫だ、人間様。情けなんかかけりゃ、野良猫の社会では生きていけねえ」

「そんなの、知らない！ お願いだから、助けてよお！ 何でもする！ 何でも言う事聞くから！」

「嫌だね」

黒猫は傍観に徹している。

まるで自分には関わり合いのない事だと言わんばかりに、首を脇に反らしている。

この畜生風情が生意気を言いやがって。絶対に報復してやる。例え私が死んだとしても、それこそ化けて出てやる。

段々と身体力が抜け始める。口の中を通して飲み込んだ筈の水が、食道を逆流する。息が苦しい。前が見えない。なにも分からなくなっていく。

こんな訳の分からない死に方をするのか、私は。猫になって、池で溺れて、そんな馬鹿げた死に様を晒すのか。

息が止まる。酸素の供給が止まり、身体が麻痺する。視界が汚い池の水に覆われていく。

そして遂に、私の意識は途切れた。

目を覚ました私は、一瞬だけ自分が自宅のベッドで跳ね起きる夢を妄想した。

ああ、やっぱり私は人間だったんだ。踏み殺した猫は普通の猫で、あの猫の呪いで猫になったりなんて事は全く無かったんだ。あれは単なる私の罪悪感が生んだ幻想だったんだ。そんな夢だった。そう、夢であつたのだ。

所詮。

「やっと起きたか、人間様」

悪夢のような声が地面を伝って私の鼓膜を揺さぶる。

霞がかつていた意識が瞬く間に覚醒し、私は声の主を目をやって、絶望に打ちひしがれた。私は祠の境内の石畳に四肢を身を投げ出していた。

白い毛は濡ればそつて灰色がかり、身体のあちこちに藻が付着していて、今の私の毛並みはさながら斑緑猫まだらと言わんばかりの奇怪な容姿をしているだろう。黒猫がそんな横たわっている斑緑猫の顔を覗き込んで、いやらしい猫撫で声を上げながら、右前足で私の頭を搔いている。

「もしかして、助けてくれたの？」

「……よくよく考えたらよ」

素直に「うん。俺が助けました」と言ってくれる訳ではないらしい。私は黒猫の次の言葉を、唾を飲み込んで待つ。

「ここでテメエに死なれちゃ、面白くねえよ。もっとテメエで遊び

「てえ」

「え、何言つて」

不意に私の頭を撫でていた右前足が大きく振りかぶられ、私の鼻先に叩き付けられた。

思い切り体重の乗せたその一撃は、猫のものとは思えない程重く、私の顔面をひしゃげるには十分な威力だった。痛み悶絶して転がる私の脇腹に、黒猫は俊敏な動きで飛び乗った。

そして容赦なく追撃を加える。私の顔、腹、胸、四肢、尻尾全てに、化け猫パワーの乗った猫パンチや引つ掻きを加えられる。暴漢が一切の容赦なく少女を襲っている、と言えば聞こえは最悪だが、今現実になんて生易しいものではない。

猫の戯れ合いなんて生易しいものではない。完全な暴力であった。

「よくもあれだけ腹踏んづけてくれやがったなあ、人間様」

「や、止め……」

「お返しだ」

既に溺れていたときの疲労と全身の痛みでまともに身体の動かない私の後ろ首をくわえた黒猫は、後ろ二本脚で立ち上がる。そしてそのまま飛び上がり、祠の前に高くそびえ立っていた鳥居の上へ飛び乗った。

私の身体は鳥居の上で宙ぶらりんになった。今黒猫が口を離せば、私は為す術無く石畳に叩き付けられる。

碌に抵抗する体力もなかった私は、再び訪れた命の危険の前に、泣きながら黒猫に懇願する。

「お願い……助けて……お願いします……死にたくない……お願い

……」

「……………」

黒猫は何も答ええない。口を開けば私を離してしまうのだから、それは当然かもしれない。

答える代わりに、黒猫は時折くわえている顎の力を緩める。今にも落としてやるぞ、と言わんばかりだ。

「お願いします……お願い……殺さないで……！」

視界の下に広がっていた祠の境内の全貌が、急激に近付いてきた。私の身体は既に落下を始めていた。風を切つて、瞬く間に視界に石畳が広がっていく。

黒猫は非情だった。

紐のないバンジージャンプ。パラシュートのないスカイダイビング。急に足元を掬われるトランポリン。

どれとも喻えられるが、そのうちのどれだってマズい。死ぬ。

地面に叩き付けられる間際。私は首を持ち上げて、黒猫の方を窺った。

そしたらあの猫……今あの顔を思い出しても腹が立つ。

その時あの猫は、猫とは思えない程口を大きく裂けさせて、ケケケ、と言う擬音でも聞こえてきそうな程の満面喜色の笑顔を浮かべていやがったのだから。

……唐突だが、一つ豆知識を話しておこう。猫の身体は極めて衝撃吸収能力に優れている。

柔らかい関節は緩衝材としての役割を果たすし、身体の大サイズの割りに、体重は小さい。

身体を大きく広げれば、高い所から落ちても身体がパラシュートそのものとなるため、高所から落ちて死ぬ事はほぼないらしい。高所から落ちたら、身体を大きく広げて勢いを殺す。これは恐らく全ての猫に備わった本能なのだろう。

今の私は野生の猫のご多分に漏れない普通の猫であった。

鳥居から落下して四肢を石畳の上に落下させても、全く怪我がない私は、それを悟ってしまった。同時に、黒猫が私をからかっていた事と、黒猫に物凄い醜態を晒していた事も。私は鳥居の上でこちらをニヤニヤと眺めている黒猫を睨みつけた。

「……騙したわね？」

「なんの事やら」

別に私は騙された訳では無い。

自分の身体の何十倍も高い所から落ちれば、死に至る。それは人間の感覚だ。猫の常識ではない。黒猫は私が死なない事を知っていた。そして恐らく、私が恐怖に脅えて命乞いをする事も知っていた。あのクソ猫は、私が泣きながら命乞いをしているのを、座して嘲笑っていたのだ。

「久しぶりに良いもの見れたぜ、人間様。ありがとう」

「……………どういたしまして。」

それよりも、もう満足したんなら、早く元に戻してよ」

鳥居から降り立った黒猫にそう言ってやる。

私も今散々死ぬ目に遭ったのだから、これでもうオアイコだろう。後顧の憂いなく、私の元の人間の姿に戻して欲しい。もうこの黒猫に関わり合いたくない。

何より、私は人間なのだから、人間としての人生を全うしたい。猫生なんて送る気は鼻っからない。

「嫌だね」

「……………」

黒猫は私の希望を両断した。「出来ない」と言われるよりはマシ

だが、どちらにしる同じ事だ。

「嫌って……そんなの私嫌よ！ 私、人間のの！」

「今は猫だ」

「アンタのせいだね！ だから元に戻せよ！」

黒猫は前足で顔を洗いながら、面倒臭そうな声を出す。こちとら必死だ。この心境を共有しろとは言わないが、私の怒りを逆なでするような仕草をとるのは止めて欲しい。

「テメエを猫に変えるのって、結構大変だったんだぜ？

元に戻すのだって疲れるんだ。だから、嫌だ」

「……それで理由になると思ってたんの？ ふざけんな！」

私は黒猫の狭い額に頭突きしてやった。結構な速度で突進したのだが、黒猫は対してダメージを受けた様子もない。逆に黒猫に押し返されて、私はひっくり返ってしまう。

「これは俺の復讐だ。化け猫の祟りって奴だよ、人間様。

人間風情がこの俺に楯突いた罰だ。これからテメエは死ぬまで猫として生きるしかねえんだよ」

黒猫がドスの利いた声で冷たく言い放った。

正直、怖い。化け猫の身体が少し大きく見えるのは、この猫の放つ威圧感のせいだろうか。

しかし、言われっぱなし、やられっぱなしで気が済む程私は人間が出来ていない。起き上がった私は、再び猫にヘッドバットをぶちかましてやった。

「猫として生きるなんて冗談じゃないわ！ 私はね、動物が嫌いな

の！

猫みたいにグウタラで恩知らずで自己中心的な動物は特に嫌いだわ！

私を元に戻せ！ 人間に戻せ！」

「うるせえんだよ、馬鹿」

猫に押し返されて宙に浮いた私の身体は、背中から地面に叩き付けられた。

背骨が軋みを上げる。鳥居に落ちたときとは比べ物にならない位痛い。私はもう一度立ち上がって猫に突進するが、またしても上手くいなされて、白い身体が宙を舞う。合気術でも使われている気分だ。

再度地面に叩き付けられた私を見て、黒猫が小さく呟く。

「化け猫に普通の猫が勝てると思うのかよ……」

「五月蠅い！ 知らない！ 元に戻せ！」

死ぬまで猫のままなんて、絶対に嫌だ。死んでも嫌だ。しかし、この抵抗は虚しいものであった。螻蛄の斧を振りかざすよりも弱々しい私の猫パンチでは、化け猫どころか単なる猫にすら到底太刀打ち出来ないだろう。

喚きちらしながら化け猫にぶつかっていても無駄だ。

私は人間なのだから、頭を使わないでどうする。どうにかしてこの猫の機嫌を取って、何とか平和的に人間に戻る手段を考えよう。

「お願いします……私を、元に戻して下さい」

「何度も言ってるだろうが。嫌だつてな」

低頭平身作戦は失敗。

「分かった。貴方の言う事を一つだけ聞いて上げるから」
「テメエにあ何も期待してねえよ」

ランプの妖精作戦も失敗。

「人間に戻してくれたら、貴方を家で飼う！ だからそれで」

「……………」
「ね、ね？ いいでしょ？」

「……………」 俺を殺そうとした奴の家で飼われるのは嫌だな」

飼われる事自体は案外まんざらでもないらしい。今度は惜しい所まで行つたかに見えたが、ダメだった。

化け猫家畜化作戦も失敗。どれもこれもダメダメダメと、我が儘な猫だ。これ以上何を望むと言うのか。

もしかしたら本当に元には戻れないのだろうか。

そう思うと、自然と涙が零れ落ちた。つい昨日まで人間として生きてきたのに、今は猫として、猫に虐められている。

このまま生きていく自信なんてない。帰りたい。典子と話がしたい。外山先輩と話がしたい。神宮寺先輩と一緒に居たい。この際奥田先輩でもいい。

「……………」 ねえ、どうしたら元に戻してくれるの？

このまま猫として生きていけ、って言われたって、そんなの酷過ぎるよ……………」

私にだって、私の人生があつたのに。

友達だっているし、家族だつて一応居る。それに、恋人だつて出て来たかも知れないのに……………」

「……………」
「私が、悪かったです。ごめんなさい、猫さん。」

だから、っ、お願いします……………」私を、元に戻して、下さい」

「こう言ったつもりだったが、自信がない。泣きじゃくりながら無我夢中だったから。」

土下座した。猫に頭を下げるなんて、普段の私なら考えられなかった。しかし、確かに悪いのは私だった。自分勝手にこの猫の命を弄んでしまった。殺されかけて怒り心頭なこの猫に与えられた仕打ちも仕方のない事かもしれない。

最早諦めかけていた時、私の頭に黒猫の前足が乗った。

そのまま地面に押し付けられるのかと私は脅えたが、黒猫はそのまま前足を左右に振って私の頭を撫でる。幼い頃一度だけ父にやつてもらって以来、そんな経験はなかったため妙に新鮮で、しばらく呆然と為すがままにされていた。

「……なにやってるの？」

「いや、人間ってのは面白え奴だなんて思ってたさ」

答えになっていない。頭を撫でている理由を聞いているのに。

「高々一回頭下げんのにどんだけ時間がかかってんだ、人間」

「……………」

「始めから一言「ごめんなさい」って言えば、痛い目に遭わずに済んだのによ。」

「こう言つの「驕り」とか言っただけか。昔の俺の主人が良く言っていた」

黒猫は前足を私の頭からどかす。黒猫は先程とは別種の、慈愛に満ちた微笑みを私に向けていた。黒猫の望みは、どうやら最初から私の謝罪だけだったらしい。

それに気づかないとは、私も中々自分勝手な人間である。回り道と手痛い犠牲は払ったものの、私は安堵していた。許されたのなら、

もう猫でいる必要はないだろう。

「……なにか勘違いしてるらしいな？」

「え？」

希望を前に微笑んでいた私の頭を、再び黒猫の前足が捕らえ、今度は石畳に押し付けられる。痛い、苦しい、等と言う暇もなく、黒猫は言葉を続ける。

「謝れば許すなんて一言も言つてねえぜ、俺は。」

呪いは解いてやらねえ。テメエは猫として生きていけ、人間」

「そ、そんな……！」

あまりにも外道。逃げようにも、身体の節々が痛くて、碌に抵抗出来ない。黒猫は前足を私の頭にグリグリと押し付けて、楽しそうに唸っている。

「お願い！ それだけは！」

「ま、そうだな……それじゃあまりにもテメエが哀れだ。」

……よし、良い事を思いついたぞ。お前に取っても朗報だぜ、人間」

「………どんな報せ？」

どうせこの碌でなしが吐く言葉なのだ、碌でもない事に決まっている。もう段々自分の不幸に慣れが生じ始めていた私は、正直どうでも良かった。しかし、次の猫の言葉を聞いて、そうも言っていられなくなる。

「もしもこの俺と喧嘩して、勝てたら人間に戻してやるよ。簡単な話だろう？」

ここらは最近、野良が少なくなっちまって、齒向かってくる奴も減ってなあ。

俺も退屈してたんだよ。

挑戦はいつでも受け付けるぜ。例え寝込みだろうが、飯の最中だろうが、クソしてる時だろうが」

確かに朗報である。人間に戻れる手段を提示してくれたのだから……だが。その条件を満たす事なんて、果たして出来るのだろうか。今の私は一介の猫。相手も一介の猫であるが、化け猫である。人間を猫化させるような妙な力を持っている猫なのだ。

もしも私が齒向かって、この化け猫に鼠にでも変身させられてしまえば……。

背筋が震える。鼠と化すのも吐き気がする程嫌だが、為す術無く捕食される未来が瞼の裏に映るようだ。

正攻法で挑んだ所で、勝てる筈がない。と言うか、既に何度も抵抗して、その度負けを見ている。なんとか相手を油断させつつ、尚かつ化け猫を殺さない程度に負けを認めさせなければならぬ。

……あれ？ 無理じゃね？

「……そんな無茶な」

「だがそれ以外の手段は提示してやらねえ。

人間に戻りたきゃ、俺の屍を超えて行きな」

猫は前足を上げて、私を解放する。

ふらつきながらも立ち上がった私は、せめてもの抵抗……殆ど負け惜しみなのだが、威風堂々としている黒猫を睨みつけてやった。黒猫は私のその挑みかかるような目を見て、ニヤリと微笑んだ。

「……ほう、早速やるかい。威勢のいい奴は嫌いじゃないぜ？」

「え、いや、えっと……ええい！」

そんなつもりはなかったのだが、喧嘩を買われてしまったのだから仕方ない。

私は結局また黒猫に向けて、猪張りに単純な突進を繰り返す。結果は……まあ、言わなくても分かるだろうから、省略する。吹き飛ばされて祠の柱に激突して、意識が霞んでいく。本日二度目の気絶だった。

「……精々頑張んな、人間」

黒猫の声が、何故か少し優しく聞こえた気がした。

私が猫になった理由

それからの私の生活は、それはもう酷い物であった。

あの黒猫を負かせるにはどうすればいいか、と考えてみるもの、現時点で分かる事は説得が不可能と言う事。そしてこの丸まった四肢では、碌に道具を使う事も出来ない。勿論黒猫を陥れる為に罠を張る事も出来ない。加えて、あの黒猫はやはり化け猫らしく気配に敏感であった。

例えば食事中。あの黒猫が捕らえた鼠を丸飲みに使っていた場面で、後ろから飛びかかると。

「よっと」

飛びかかった私の前足を掴み取り、いとも簡単にそのまま背負い投げ（柔道技）に以降。受け身知らない私は腰を強か打ち付け、悶絶した。

猫のくせにどうして背負い投げなんて会得しているのか分からない。昔の主人が柔道家なのかもしれない。だが、私が負けた事に違いはなかった。

ならばと思つてあの黒猫が就寝中に襲いかかつてみる。

「ほらよ」

飛びかかった私に合わせて黒猫もジャンプ。攻撃を意識したあまり防御姿勢なんて考慮していない私の腹に向けて思い切り頭突きをぶちかます。

はい、私の負けー、と。

埒があかない。不本意だけどしかたないな、と奴がトイレの最中に襲いかかったら、どうなったかを記す。

「ていや」

飛びかかった私に、黒猫自身の糞尿が浴びせられた。

思い切り目の中に猫の糞が入った私が痛みのみあまり悶絶していると、黒猫は私の無防備な腹にジャンピング・エルボー・ドロップをぶちかました。

10カウントなんて必要無い。アイムルーザー。

とまあ、こんな具合で、日々はまるでビデオの早回しのように経過していく。

私は、一日一回は黒猫に挑みかかり、敗北して昏倒。翌朝頃に気絶から覚める……と言った、戦後間もない頃のプロボクサーよりもハードな日々を送っていた。そんな生活を三日も続けた頃である。

私は重大な事に気がついてしまった。

「…………お腹空いた」

食糧問題である。

ここ三日程は人間に戻る事に夢中なあまり、碌に食事を取る事も考えなかったが、流石に三日も飲まず食わずのでは体力も落ち込むというものだ。

だが、今の私は小腹が空いた時にコンビニで気軽にオヤツを買い取る事の出来る女子高生ではない。天涯孤独の白い野良猫である。

金なんて勿論無い。でも、腹は減った。飯を食わねば生きていけないのは生物の理である。猫の理として、猫が食うものと言えどキヤットフードであるが、私は一応人間である。こんな形なりをしてはい

るが。取りあえず山にキヤットフードやコンビニ弁当が転がっている事はまずないので、私は山を下りる事にする。黒猫との戦いは一旦休憩だ。

「おい、何処行くんだ、お前」

黒猫の声が私の背中に浴びせかけられる。今日は挑んでこないのか、と言いたげな不満そうな声だ。

私はそれには返事をしてやらない。自分でも悲しくなる程ささやかな反攻だが、これくらいが今のやせ細った私には限界である。

藪の間を縫うようにして、私は祠を、そして祠のある山を後にして、町に降り立ったのである。飯を食って精をつけて、その後は覚えてろよ、と内心で黒猫に吐き捨てながら。

*

私の住む町は、県内ではちょっと田舎な部類に入るかもしれない。人口がどの程度か、とかそう言う細かな部分は知らないが、電車に乗らないと映画館すらない程度には田舎だ。

そんな私の住む町では今、小さな小競り合いが密かに行なわれている。

古くから地域住民に密着してきた商店街と、最近出来た一部上場企業のスーパーマーケットが客を取り合っているのだ。

スーパーマーケットは大量入荷で仕入れのコストを下げる事で実現可能な安売りを目玉にして客を引く。対して商店街側はスーパーに比べれば割高ではあるが、値切りOKやオマケ付き等のサービスをメインに客足を伸ばそうとしている。

進退の方は今現在ややスーパー有利、と言った所で、商店街の組合は更なるサービスを身を削る思いで捻り出している頃である。

私は、そんな苦心している商店街に足を踏み入れていた。

道路の真ん中に座り込んでいては自転車に轢き殺されるかもしれないので、狭い路地の間に体を擦り込み、商店街の様子を見回して愕然としていた。私が何を期待して商店街までやってきたか、と言えばそれは勿論、食事にありつく為だ。肉屋か魚屋から猫の体でも食べられそうなものを掠めとる心づもりだったのだ。

普通に万引きだけど、生きる為なんだから仕方ない、と覚悟してきたが、私の期待はもの見事に裏切られる形となった。

「……………」

ガラスケースの向こう側に陳列されたマグロの切り身を見て、私は頭を抱えなくなった。

畜生、そんな頑丈そうな檻に入れられたマグロさんが可哀想じゃないか！ という現実逃避はこの程度にしておこう。

マグロだけではない。その魚屋は売っている魚全てがガラスケースの向こう側にあるのだ。よくよく考えれば、今のご時世、魚を野ざらしにして売っているのなんて築地とかの魚市場くらいなものだろう。

たかだか商店街の一角のシヨボイ魚屋なんて、ガラスで魚をカバーしないとそこの鴉とか、私のような猫に魚をかっ攫われたりしてしまう。こんな事町に住んでれば分かるだろ、と自分でも思うが、まさかこんな目に遭うなんて思いもしないのだから仕方ないじゃないか。

そもそも私はスーパー派なのだし。………と言う言い訳はこの辺りにして、だ。

今、グウー、と腹の虫が鳴いた。猫でも人間と同じように腹が鳴るらしい。腹が減っている事に変わりはない。私は、どうしたって食事にありつかないといけない。

そこで私は思い出す。押して駄目なら引いてみな、である。昔の

人は偉かった。

路地から足を踏み出した私は、魚屋の前で足を止め、座り込む。見上げると、魚屋のガラスケースの中には様々な魚が色鮮やかに鎮座していた。マグロやタイ、サバなどのメジャーな魚を押しつけて、季節もののサンマが砕かれた氷の上に並んでいる。

少し睡が出てきてしまったのは、余程腹が減っているせいか、はたまたベタに猫の性か。

「はい、らっしやいよー」

今の時間は午後一時。昼時も過ぎて、夕食の買い物には少し早過ぎる時間。

商店街のアーケード街は人通りも疎らである。魚屋の中年の店主も店のカウンターに座って、やる気なく呼び込みをしていた。店主は店の前に座り込む一匹の白い猫に気づいていないらしい。

私は意を決して声を上げた。

「あ、すみません
みやあふう」

「ん？ ……なんだ、ネコか」

どうやら私の言葉は人間には全て猫の鳴き声になって届くようだ。……まあ、ここまででは予想通り。猫の声帯で人間の言葉を話せたらそれこそ金に困らない珍猫になれるし、自分の境遇を訴える事もできる。あの意地汚い黒猫がそんな逃げ道を作る筈がない。

私の存在に気づいた店主は、行儀良く座り込んでいる私の方を眺めて、少し顔を顰める。野良猫は魚屋の天敵だ。良い感情は持たれていないだろうが、ここで挫けてはいけない。

私はわざと弱ったような猫撫で声を上げてみせた。

「じゃー……」

「なんだお前、腹でも減ったか？」

私は大きく頷いてみせた。人間でなくても、こうすれば意思の疎通は可能だ。

私の頷きを見て、店主は目を丸くする。どうやら私がただの猫でない事に気づいたらしい……と、思ったのだが。

「へえ、まるで頷いてるみてえだ。おもしろい猫だな、お前」
「ふしゃあああああ！」

頷いたんだよ馬鹿親父、と罵ってみるが通用しない。

店の親父はもう私への興味を失ったのか、私から目を逸らしてアーケード街の客足を見つめる。いや、待って。ここにお腹をすかせた可愛い子猫ちゃんがいるんだよ。何かご飯を恵んでくれよ。

「にゃー、みゃー」

「……五月蠅いネコだなあ」

店主が煩わしそうに言う。あまり良い印象は抱かれていないようだが、無視され続けるよりマシだ。五月蠅いネコだ、これやるからさっさとアッチ行けよ、と言ってサンマの一尾でも投げてくれるかもしれない。

なんて期待した私は本物の馬鹿である。

「あー、もう！ シッ、シッ！」

「にゃあああああ！」

「……ったく、面倒くせえ」

店主が立ち上がって、店の奥に引っ込んだ。何か食べ物を持ってきてくれるんだ、と期待に胸を膨らませる私に。

「ほれ！ さつさとあっち行きやがれ！」

物干竿が突きつけられる。

カウンターの向こう側から長過ぎる長柄武器を、魚屋の店主は容赦なく私に向けて振り回した。

不意に私の足元数センチ先に突き立てられた物干竿がアスファルトとぶつかって、ガツンと言う音を立てた。

私は全身の毛が逆立った。こんな重いもので下手な所を突かれたら、無事で済まないのではないか。私は慌てて退散した。氷の上のサンマは名残惜しいが、命に代える事は出来ない。

*

次いで私が訪れたのは、先程の魚屋から十軒程離れた肉屋である。こちらの店主は優しそうな中年の恰幅の良い女性。昼下がりであるせいか、魚屋の店主同様に少し惚けた表情で道行く人々を眺めている。

肉は魚以上に管理されている。当然ガラスケースの向こう側。盗み出すのは不可能だ。

先程と同じ轍を踏まないように、私は先程よりも少しだけカウンターから身を引いて待ち構えている。三十秒程その肉屋の女店主を眺めていたのだが、私に気づく様子はない。

もしかして私は存在感が薄いのだろうか、と言う懸念とともに、私は声を上げる。

「……みゃあ」

先程よりも弱々しく、か細く震えた声を上げる。全身の毛を寝かせ、少し俯き加減で、弱々しさを存分にアピールする。

こつやって同情を引いたりする演技は私の得意分野である。伊達に猫を被って生きていない。今は本当の猫になっているけども。

「おや……」

「……みゃーん」

女店主が私の存在に気がつく。その目はまさしく、弱った子猫を労る慈愛に満ちた目。これは期待大だ。私は更に畳み掛けるように、カウンターに向けて歩み寄る。

「にゃー……」

わざと大きく震えながら足を進める。弱ってますよアピールだ。

幸い……とは到底言えないが、今の私はそこらの野良よりよっぽどやせ細っている。ガリガリの猫だ。

私の命は風前の灯火ですよ、さあ、救えるのは貴方だけですよ、どうするんですか？

……と私自身でアピールする。

「あらあら……可哀想な猫ちゃんねえ。お腹空いてるの？」

「みゃあ」

女店主は同情の声を上げる。ここまでくれば、もうあと一押し。

私は最後の力を振り絞って……いるように見せかけて、よるめきながらガラスケースに前足をかける。決して爪は出さない。ここでガラスを傷つけてしまつては元の木阿弥だ。肉球で、慎重にガラス

ケースを撫でるように叩く。

この向こうの肉が欲しいにゃん。でも、ガラスが邪魔で肉が食べられないにゃん。どうだ、私はなんて可哀想な猫なんだにゃん？

コト、コトと言う弱々しくケースを叩く私を見て、女店主は哀れに思ったのか、遂にカウンターから立ち上がった。そして、ケースの中側から揚げ物の一つをトングで摘んで、小皿に乗せて私の目の前にそれをおいた。

「お昼の売れ残りだから、たんとお食べ」
「にゃう」

勝った。

私はガッツポーズを取れない代わりに、一つ鳴いた。ささやかな勝利の雄叫びである。

私はこの女店主の同情を引いて、食糧を確保する事に成功したのだ。野生の野良が、人間様の食物を獲得したのだ。黒猫に私に差し出されたこの黄金色に輝く肉塊を見せびらかしてやりたかった。

ざまあみる。私をこんな境遇に落としても、私はちゃんと人間の食事を取る事が出来るのだ。

勝利の美酒ならぬ勝利の美揚びよう。私はその少し冷えてしまっている揚げ物にかぶりついた。丸くて厚い円盤状のその揚げ物は、どうやらメンチカツらしい。

猫は基本的には肉食だ。確かにこれならば問題無く食えるだろう。コロツケじゃなくて良かった。そう思いながら三日ぶりの食事を全力で噛み締め、飲み込む私。

どうやらこの肉屋、ハンバーグも売っているようだ。カウンターを見れば分かる。メンチカツにしては少々大き過ぎるこのメンチカツは、恐らくそのハンバーグを揚げたものだ。

先程からシャリシャリと言う食感から、私はタマネギが交じっている事に気づいたのだ。

ハンバーグは主婦層向けで、メンチカツは恐らく買い食いする学生向けのだろう。なるほど、さすがサービス精神旺盛な商店街勢だ。需要がよく分かっていらっしやる。私が人間に戻ったら、今度からはこっちに来る事にしよう。魚だけはスーパーで買うけどな。……と、ここまで考えてから、私の脳裏に何かひやりとした懸念が通過した。

懸念の原因は、他ならぬ私の口の中で食感の違いを楽しませてくれる野菜にある。前述の通り、猫は基本的には肉食だが、野菜を多少食べても恐らく問題はない。

でも……タマネギって食べて大丈夫だっけ。

「おや、猫ちゃん、どうしたんだい？」

女店主の声が遠くに聞こえる。夢中でメンチを貪っていた私が急に動きを止めて、驚いているらしい。

私は必死で思い出していた。猫とタマネギ、猫とタマネギ、猫とタマネギ……なにか、あった気がする。一体、なんだっけ。食べたらヤバいんだっけ。いや、ヤバいと思わせて、それは民間伝承で、実は問題無し、だったっけ。うなぎと梅干しの食べ合わせ、みたいな感じの。

どっちだどっちだ、と頭を巡らせていると、不意に私の背中の方から声がかかった。

「あら、お肉屋さん。猫飼ってるの？」

その人は恐らく、肉屋に買い物にきた主婦だろう。買い物にきているだけなのに、綺麗に髪を巻いて、化粧までしている。

見栄を張った若奥様、といった感じだ。年の頃は三十代前半くらいに見えた。

「ああ、ごめんなさいね。この猫、野良みたいでねえ。あんまりにもお腹空かせてるみたいだから、余り物食べさせてるのよ」

女店主は立ち上がった、カウンターの中に戻っていく。

主婦はあまり良い顔をしていない。それもそうだ、どんな病気を持っているか分からない野良に餌をやる肉屋なんて、あまり歓迎されるべきでない。子供がいるであろう主婦なら尚更そう思うだろうが、主婦は「気にしてないですよ、全然」と取り繕っている。

これは私の勝手な推測だが、彼女は八方美人だ。私と同じ匂いにする。仮面を被っている者独特の匂い。

……とまあ、そんな事は別にどうでも良くて。私は、私の餌皿を見て驚く主婦の言葉に体が強張った。

「ね、お肉屋さん。おたくのメンチカツ、タマネギ入ってなかった？」

「入ってるけど……ありゃ、マズいのかい？」

入ってなかった？ ……と聞いたと言う事は、つまり、猫の体にはやはり良くないのだろうか。

良くない、と言っても程度の差はある。食ったら即死レベルのヒ素並みにヤバい代物か、はたまた銀杏のように馬鹿みたいに食べ過ぎなければ問題無いものなのか。私は高鳴る心臓を押さえ込みながら、祈るような気持ちで主婦と肉屋の会話に耳を傾けた。

「ええ。タマネギって猫にとっては猛毒なんですって。食べると死んじゃう事もあるとか」

「あらららら……そうなの？ ごめんね、猫ちゃん」

女店主はあくまでも呑気だ。

「ごめんねじゃねえよこの馬鹿女。」

私は激昂するが、それ以上に戦慄した。タマネギは猛毒。食べると死ぬ事もある。その二つの言葉が、私の脳内をグルグルと駆け巡る。

私はその場から脱兎の如く駆け出した。背中から女店主の声が聞こえるが、完全に無視した。

狭い路地に飛び込んで、奥に向かう。電気屋と喫茶店の間の、極々狭くて、誰も来ないだろう狭くて日の光も碌に届かない袋小路の最奥で立ち止まる。

私は体を前に倒した。そして、猫の小さな口の中に、強引に自分の前足を突っ込んだ。

「……………！」

……………一応、私も女であるので、流石にこれ以上の描写は勘弁してもらいたい。

*

結局食事に取りつけた矢先に胃の中身を空っぽにした私はその後何も食べる気が起きず、何の収穫も得られぬまま再び山の祠に帰って来ていた。

ここは犬の縄張り、と黒猫は言っていたが、犬は一向に姿を見せない。もしかして、方便だったのだろうか。それか、あの恐ろしい黒猫のせいで犬さえもその縄張りを明け渡した、とか。

有り得ない話ではないが、いずれにしろ、寢床に困っていた私に

は有り難い話である。

祠の中が私と黒猫の寝床であった。黒猫と一緒に眠るのは最初は怖かったが、今は然程眠れる。

奴は私から喧嘩を吹っかけない限り、襲いかかってくる事はないのだ。そのくせ普通の猫の何倍も強いことから、寂しく一人でいつ何に襲われるとも思えない場所で眠るよりはこの猫の隣で寝る方が遥かに安全なのだ。

それともう一つ。……なんだかんだ言っても、まともに話し相手になっっているのはこの黒猫だけだ。この町には、殆ど野良猫がいない。今日町を巡ってみて、改めてそれが分かった。恐らく、保健所に回収されてしまったのだろう。いかなる結末が待っていたかは想像に難くない。

故に、今の私の言葉にちゃんと返事を返してくれるのは黒猫だけなのだ。

私を猫にした張本人に助けられているというのも業腹だが、今はコイツを頼って生きるしかない。何としても人間に戻る為に。

……と言う私の決意も、今やすっかり萎んでいた。

「……………つう」

私は祠の穴だらけの板床に体を投げ出して、呻いていた。

先程私はメンチカツを半分程平らげていた。すぐさま吐き出しはしたが、胃の中には恐らくまだタマネギが残っていたのだろう。その消化が始まったから、だろうか。私は段々と気分が悪くなっていた。

頭がクラクラする。視界がはつきりしない。貧血の症状によく似ていた。

この空腹に貧血は辛い。加えて言えば、水も碌に飲んでいないので、体全体が乾いていた。肉球もしなびているし、本気で体が動かない。

ああ、もしかしたら……もしかしたら、私はここでこのまま死ぬのかもしれない。

このまま目を瞑って、そのまま死ねたら、楽になれるだろうか。それとも、まだ簡単には死ねないのだろうか。飢えと乾きで気が狂いながら、苦痛の断末魔を上げてようやく死ぬのだろうか。

だったらいつそ殺してくれ、こんな惨めに生きていても辛いだけだ、と思ってしまうのも無理はない……私は諦めた。

生きる事を、人に戻る事を諦めて、目を瞑る。

「おい」

耳も塞ぎたかった。しかし、猫の短い前足と丸っこい手先では、大きな耳は塞ぎ切れない。

私は再び目を開けて、目の前の黒猫を見やった。月光を思わせる二つの眼差しが、薄暗い祠の中で輝いていた。私はそれを見つめ返す。さぞかし力無い視線だったのだろう、黒猫の耳が少し垂れるのが見えた。

「これ、食べ」

黒猫はぶつきらぼうにそう言っつて、前足を前に押し出す。

私は視線を下げて、押し出されたものを見て、背筋を寒くした。

それらは、普段この黒猫が口にしていた獲物の数々だった。尻尾を掴まれて逃げられない鼠。ひっくり返って死んだゴキブリの死骸。羽をもがれて動けないトンボ。

私の体が元気だったら、全力で飛び退くであろう、それら不気味な代物の数々が私の目の前にあった。黒猫は、私が聞こえていなかっただと思っただのか、もう一度口を開く。

「これ、食べよ」

「……………やだ」

私は自分でも驚く程か細い声で断った。

「食べ、と言われても、こんなものは食べ物ではない。

人間にしてみればゴミだ。全て害。ゲテモノの極地だ。口の中に入れるなんて、想像しただけで体が寒気に包まれる。私は人間だ。

猫にしてみれば食い物かもしれないが、私は猫じゃない。私にゴミを食べと言っのか。

黒猫はただ、私を黙って見つめている。ちゅう、と言っ鼠の小さな声が聞こえた。

「……………死ぬぞ」

そんなコトは分かっている。今であろうが、いつであろうが、私は恐らく数日以内に死ぬ。この碌に動く事も出来ない衰弱した体では、もう町まで降りる事は出来ない。もう死は覚悟した。私は視線に乗せて黒猫にそう言った。

「……………俺は一度、死んだ事がある。死は恐ろしい。

衰弱死は、衰弱していた時の何倍も苦痛を味わいながら死ぬんだ」
「……………聞きたくない」

「全身が痺れ、やがて体のそこかしこが悲鳴を上げる。
穏やかな死なんてとんでもない。全身を腐敗に引き裂かれて、気が狂う程の痛みに侵されて死んでいくんだ。

真綿で絞め殺されるように、ゆっくりとゆっくりと、ただひたすら破滅に向かっっていくんだ。

お前、それで良いのかよ」
「じゃあ、殺せばいいじゃない」

黒猫の言葉が端的で迷いないのと同じく、私も言葉を真っ直ぐに

吐いた。しかし、黒猫は首を横に振る。

「お前、心の底からそう思っているのか？」

「うん」

「それは嘘だな」

黒猫は残酷に私に言い放つ。死に体の私に顔を、獲物を捕らえているのと反対の足で踏みつけて、蔑むような目を向ける。

「心の何処かでは『生きたい』と思っている。

死にかけの私に同情して、黒猫が元に戻してくれるんじゃないか……と、僅かにだが期待している。

この化け猫なら、人間の食べ物を用意してくれるんじゃないか……なんて甘い考えをまだ捨て切れていない」

私は返す言葉がなかった。今、確かに私は死にたいと思っていたが、黒猫が言った言葉もまた、頭の片隅に残っていた。

当たり前だ。私はまだ高校生だ。交友関係も部活の成績も恋愛も順調で、それらに連なる希望溢れる未来が私の目の前に横たわっていた筈なんだ。こんな所でそれら全てを投げ捨てる、諦めるなんて言われても、多分私はどんな目に遭わされても絶対に100%捨て切る事なんてできやしない。

死にたくなかった。黒猫に、助けてほしかった。だが、黒猫の態度は何も変わったりしない。

「だが俺がお前に差し出す答えはこれ以外有り得ない。

これが、俺達野良猫にとっての食事だからだ」

「……なんで、私に？」

ふと沸き上がった疑問。

私の事を憎んでいる筈の黒猫が、何故私に食事を差し出すんだ。黒猫は瞬時に答える。

「猫は気紛れな生き物だ。

今の俺は、死にかけているお前を見て、哀れだと思っている。

あ、コイツに死んでほしくないかも、と少しだけ思っている。

だから、これをお前にやるのも良いか、と……思っている。それだけだ」

黒猫は一切淀む事なくそう答えた。その二つの目からは、何かを偽るような色は見えてこない。

私のような人間とは全く違う。猫のくせに、この黒猫は全く猫を被っていない。

多分、私は馬鹿なんだ。人間としてはそこそこ賢く生きてるつもりだったけど、きっと猫としても人間としても、最上級に馬鹿なんだ。嘘偽りで自分を塗り固めて自分さえ偽って、それを誰かに見抜かれて、ようやく気がつく。

私は、生きたい。どうしようもなく生きたい。どんなに惨めでもいいから、生きていたい。死にたくない。生きて、人間に戻りたい。そんな自分の中の本心を認めるしかなかった。

「だから、これ、食べ」

黒猫がもう一度そう言った。

私は多分、泣いていた。体はカラカラだったから、涙は出なかったけど、多分泣いていたんだと思う。

私は力無く口を開き、羽をもがれて床に這いつくばっていたトンボにかぶりついた。

……………これ以上は最早語るに値しないだろう。人間にとっては、

吐き気のする話でしかない。

ただ……私はこの日、生き延びた。苦痛でしかなかったけど、己の心に眠る本音を発見したこの日を、生き延びたのだ。そして私はこの日一旦人間を辞め、猫になった。それだけは、確かだったと思う。

私が恋に破れた理由

私が一時的に人間を辞めて猫になってから、既に二日経っていた。正確には既に五日経過しているのだが、この事態を真つ直ぐに受け止めてからは、二日だ。私は昨日一日かけて、黒猫から獲物の狩り方というものを教わった。

黒猫は私が猫として生きる事に関しては協力的な態度を示していて、教え方も丁寧で、上手だったと言って良いだろう。曰く、ゴキブリや鼠、雀は数こそ多いが、すばしこいから狙いにくい。この時期は、比較的鈍重な鈴虫やコオロギ、バッタが狙い目らしい。

昨日一日かけて何とかそれらの昆虫を仕留める事が出来た私は、その日も生き延びる事が出来た。不思議なもので、一度そう言うものを食べてしまつてからは、次からも抵抗なく食せる。虫だろうが鼠だろうがトカゲだろうが、今の私には明日への命を繋ぐ大事な食糧である。今朝も油断しているバッタを三匹程後ろから喰らって腹を満足させた私は、祠から町に向けて足を伸ばすことにした。

「……何処行くんだ？」

祠の中でひなたぼっこしている黒猫が、欠伸混じりでそう問うた。私は一度振り返ったが、答える気はしなかった。すぐに黒猫に背を向けて、祠を後にする。黒猫も興味を失ったのか、それきり何も問わずにひなたぼつこの続きをはじめた。

私は山から下りて、私の住まう町に向けて小走りで駆け出した。記憶が正しければ、今日は日曜日。私が人間のままだったら、神宮寺先輩とデートをする筈の日である。

少し心に余裕が出来た今、私は好奇心に身を任せて町に向かう。好奇心は猫をも殺す、なんて言葉を心に思い浮かべつつも。

猫の視点から見る住み慣れた町は、全く別の町に見えた。

猫の視線だからこそ気づくもの、と言う物は案外沢山ある。

例えば、塀に穴が空いていたとする。人はそれを見ると、家主がずばらな性格なのかな、とかどうやればこんなとこに穴が空くんדרうか、とか色々と思うだろう。しかし猫は家主のことを邪推する事なんて全く無い。ただそこに、穴がある。通れるか通れないか、活動範囲が広げられるかどうかだけが重要である。猫にとって大切な物事は、それが自分にとっていかなる関係を示しているか、と言う事だけだ。

幸いなのかどうなのか、今の私は人間の価値観と猫の価値観を共有する事が出来る状態にある。

町を歩いて新鮮な気分を味わうのは、ここ数日で参っていた私の気分転換にはかなり役に立った。公園の時計で確認すると、時間は午前十時。日が暮れる頃には寢床に帰った方が良さだろう。

「ここまで来ると、帰ってきたって気分になるなあ」

いつも通学や買い物の時に通る道で立ち止まって、私はふと自分の事を振り返った。

私がこの姿に変わってから、かれこれ五日。私と言う意識がここに存在する以上、高校生としての私は一体どんな扱いになっているのだろう。黒猫に聞けば嘘をつかずにちゃんと教えてくれただろうが、やはり自分の目で確認したい。

今日は日曜日でも人通りも車通りも多い。猫の体というものはいこう

言う時は便利なもので、私は先程から人の家の庭や軒先、屋根の上を飛んで町を歩いている。

見咎める者もないし、何より安全だ。しかし、こうして高い場所から下を見下ろすと、ますます野良の動物の少なさに驚かされる。時折すれ違ふ猫は須く首輪を付けている。そして私が野良と見るや、飼猫達はすぐさま目を逸らし、そそくさと逃げ出すのだ。ここに住んでいた野良猫達は、ヤクザ扱いされてしてしまうような輩だったのだろうか。それなら保健所行きも納得ではあるが。

「……つと、それよりも、私の家は」

この町の野良事情を憂いても仕方ない。私が自宅に向けて足を伸ばすと、ふと視線の端に私の見知った顔が目映った。

「あれは……」

背の高い若い男が、私の座する石垣の面する細い道路を歩いていた。

細くて長い脚はジーンズに包まれており、全体的に細いが肩幅の広い体を、茶色のダブルコートが守っている。首に巻いた赤いマフラーから覗く男の顔色はあまり良くないが、ジャニーズ系の顔が男の周りの空気を華やかなものに彩っている。時折漏れる物憂げな溜め息さえも様になるその男は、首をマフラーに埋めて寒さを耐え忍びながら早足で歩いている所を見ると、何処かを目指しているようだ。

「神宮寺先輩だ……」

私が本来今日、デートする筈だった、私の彼氏（予定）、神宮司祐介だ。

どうにも顔が優れないのは、恐らく今日デートする筈だった私がこんなことになっっている猫と化しているからだろう。

行方不明にでもなっているのだろうか。それを聞きたくて、私は私の目の前を通り過ぎていく神宮司先輩に思わず鳴き声を発してしまった。

「先輩みゃあ！」

「あれ……？」

神宮司先輩がこちらに気づいた。私の方を見て少し怪訝な顔をしている。

「珍しいな……まだ、この辺に野良猫がいたのか……」

「にゃーん」

「しかも、妙に人懐っこい……」

そう言いながら私の方に手を伸ばす神宮司先輩。

頭を撫でる先輩の手つきは優しくかった。普段ラケットを握る右手はマメだらけで少し固いけど、私は久しぶりの人間の手の感覚を存分に傍受した。時折耳の裏も搔いてくるその手つきはなれたものだ。もしかしたら彼は猫でも飼っているのかもしれない。

先輩は私が大人しく撫でられているのに気を良くしたのか「おーよしよし、いい子だなー」と猫撫で声で私を可愛がり出す。

うん、なんていうか、これ、良いよ。マジで良いわ、これ。心が温かくなる。

そうか、これが萌えか。なるほど、私は今先輩に萌えているんだな。そして恐らく先輩も私に萌えている。新たな境地であった。もし私が無事人間に戻って先輩と付き合ったら、エッチの時にネコミミ付けてこう言うプレイを迫ってしまうかもしれないぐらい私は気分が良かった。

……のだが、そうして互いに萌え合っていたのは、精々十秒程度だ。

「……っと、そろそろ行くか。」

野良で大変だろうけど、お前も頑張れよ。じゃな
「にやう」

最後に私の頭を強めに撫でて、先輩の右手が離れる。私から漏れた声は、名残惜しさに思わず声が出てしまっただけだ。しかし先輩はどうやら返事をされたと思ったようで、そのまま私の方を振り向かずに歩き出す。

「あ、先輩、待って
みやあああああ」

「ん……？」

私は自分でも気づかぬうちに、先輩の後を追っていた。自分の足元にまとわりつく白い猫を見下ろして、神宮司先輩は少し困ったように眉を下げた。

「お前は、俺ん家じゃ飼えないぞ？」

「みやーあ」

「……やれやれ」

先輩は私から目を離して、再び早足で歩き出す。先程同様に暗い顔をしている。彼の暗い顔は、白い野良猫とのスキンシップで晴らす事はとても出来そうにないらしい。まあ、それもそうだ。好きだった女子が行方不明なんて、落ち込まない方がどうかしている。

しかし、ここで私の頭に疑問が浮かぶ。

今日のデートの約束はふいになってしまった筈なのに、彼はそんなに急いでどこに行くんだろうか。少し考えてみるが、どれもこれ

もシツクリくる案ではない。

「着いてくる気か？」

「みゃう」

先輩は呆れたように私を見下ろしていたが、自分の足元を追いかけってくる白猫を決して邪険には扱わなかった。

私はまさしく忠犬のように、彼の後ろ二歩を歩く。先輩の足は速かったけど、私は必死で着いていく。好奇心というより、もはや探究心に近い何かを胸に秘めながら。

*

先輩は一軒の家の前で立ち止まる。

閑静な住宅街のうちの一軒。中流階級層の極々一般的な家でしかない家の門を押し開け、神宮司先輩はドアのチャイムを鳴らす。

私は相変わらず先輩の足元に纏わりついてしたが、妙に落ち着かない気分だった。普通の門構え、普通の石垣、普通の庭園、普通の玄関。何もかもが、普通。私の家と遜色無い。私はふいに首を上に向けた。先輩の無表情な顔と、その奥にこの家の表札が見えた。

外山。

そう書かれている。じゃあもしかして、この家って。

「……いらつしゃい」

玄関の扉が開いた。奥から出てきたのは、私がよく見知った顔の

女だ。

外山菜穂先輩だった。

私の一つ上の部活の先輩で、朗らかな屈託ない行動が魅力的で、少し面倒臭い性格の持ち主である。

上下灰色で、少し丈を持って余し気味のスウェットに身を包んだ彼女は、気怠そうに神宮司先輩を出迎えた。その表情は私の知るものではない。学校での外山先輩は体内に原子力発電機でも埋まってるんじゃないかと思う程エネルギーシユな筈だ。彼女の死んだ魚のような目は新鮮だが、何となく見ていていい気はしない。

「親は？」

「昨日言っただじゃん。出張だよ、しゅっちょー」

神宮司先輩は尋ねながら、慣れた様子で玄関の扉を潜って中に入る。

いや待て。なんかエラく自然な流れで上がり込もうとしてるけど、それってどうということなのよ。

部活繋がり？ いや、なら部活の時に言うだろう。じゃあまさか……いやいや、だって私、神宮司先輩とデートの約束してたし。神宮司先輩って今、彼女居ない筈だし。少し混乱気味の私も慌てて着いていこうとすると、扉を開けていた外山先輩と目が合った。

しばしの見つめ合い。外山先輩はこれまた気怠そうに、既に靴を脱ぎ始めていた神宮司先輩に尋ねる。

「この猫なに？ 祐介の飼い猫？」

「知らねえ。野良猫みたいだけど、勝手に着いてきたんだ」

「へー。この辺ってまだ野良猫居るんだ」

外山先輩が私を見る目は、決して歓迎の目ではない。このままでは締め出される。

私は彼女が神宮司先輩と会話している隙に、素早く玄関から家の中に飛び込んで、家の上がっていた神宮司先輩の足元に駆け寄る。

「あ、こら！ 勝手に入るな！」

「みやふううう」

外山先輩が眉を吊り上げて私を追いかけるが、こちらら伊達に野良をやっていない。

外山先輩の襲いかかる右手をすり抜け懐に潜り込み、喉をゴロゴロ鳴らしながら、外山先輩の胸の中で存分に甘える攻撃。白くて丸っこい愛玩動物に抱きつかれて、外山先輩は一瞬眉を顰めた後、神宮司先輩の方を困った顔で振り返った。

「祐介え、コイツ本当に野良なの？ 並の飼い猫よりよっぽど人に慣れてる気がするう」

「……よく分かん。元飼い猫かもな。でも、大人しい奴だよ」

二人の会話の最中も私はひたすらに外山先輩の胸に頬擦りして、存分に可愛げをアピールしている。こうしている間にも外山先輩は戦闘意欲を奪われていき、最早陥落は時間の問題。現に、既に彼女の手は私の背中を優しく撫で始めている。

「なんでちゆかあ、子猫ちゃん？ ポンポン空いちやっただんでちゆかあ？」

外山先輩が赤ちゃん言葉で私に尋ねる。

なあにが「でちゆかあ」だ。アホか。こっちは成猫じゃボケ。

……なんて私が心の汚い事を考えているとは露も知らない外山先輩に抱えられ、私は外山家の台所に通される事を許された。

フローリング敷きのリビング。窓側にはカーペットとソファ、キ

キッチン是对面式。ごく普通の家だ。

私は床の上に丁重に下ろされた。一旦キッチンに向かった外山先輩は、ミルクを入れた底の薄い皿を私の目の前に置く。

「ふふふ……可愛いでちゅねえ、猫ちゃん」

ミルクを舐め始めた私を一つ撫でた外山先輩は早々に立ち上がって、既にソファの方に座って寛いでいる神宮司先輩の隣に腰掛ける。私は少しイラツときた。そこは本来、恋人（予定）の私が腰掛けるべき場所である。

「祐介、なんか暗い顔してるねえ」

「……まあ、そうだな」

二人が会話をし始める。私はミルクを啜りながら、聞き耳を立ててその会話を窺う。

「……今日、デートする筈だったあの子の事かな？」

「……………」

……私の話？ 私は訝しむ。続きが気になる。肝心の神宮司先輩は何も答えず、顔を上に向けて天を仰いだ。ソファに身を埋めた神宮司先輩は、呟くようにこう言った。

「……つか、アイツも可哀想だよなあ。交通事故で意識不明の重体……って聞いたけど」

……交通事故って意識不明。なるほど、そういう事になってるらしい。まあ、正直それはどうだっていいかもしれない。いずれ人間に戻るつもりなのだし、多分私が人間に戻れば人間として目覚める

って言うギミックだろう。じゃないと私が二人存在する事になる訳だし。

私は自分の所在に着いて一先ず安堵する。二人の会話は続いていく。

「聞いたけどって、見舞いは？ アンタ行ってないの？」

「行ってねえ」

思わず私の舌が止まる。見舞いに来ていない？ ちょっと薄情じゃない？ 仮にも恋人（予定）だよ？ もし神宮司先輩が病院に入院したら私は毎日学校帰りに病院に寄って健気に介護する自信があるのに。

次の言葉を聞き逃さぬように、私は聞き耳を立てる。

「つーか、寝っぱなしなんだし、俺が行ってもしかたねえじゃん？」

「まあ、そうだけどさ。私もあんま行ってないし」

外山先輩は神宮司先輩の言葉に同意を示した。

先程と同じように、外山先輩はまた少し気怠そうに、少し面倒臭そうに会話を返す。ちよつと待て、私が、アンタの可愛い後輩が意識不明の重体なんだぞ。もっと心配しろよ。

「何だよ菜穂、妬いてんの？」

「……つーかさ、彼女居んのに目の前で彼女の後輩に手え出す？」

「どう言う神経してんのさ祐介」

「……おい、ちよつと待て。」

どう言う意味だよそれ。彼女居るのに？ 目の前で彼女の後輩に？ どう言う事だよそれ。当てはまるシチュエーションは一つしかない。と言うより、今この場を見れば……少し拗ねた顔をしている

外山先輩の肩を抱いて苦笑いする神宮司先輩を見れば分かる。

「おいおい、そうマジになんなよ。」

「ちよつと遊んでやるうと思っただよ。」

「アイツ、ちよつと調子に乗ってたからさあ。」

「あの子、本気だったもん……祐介もちよつとマジな顔してた。」

「それでブー垂れてんの？　ったく、お前って本当。」

二人の顔が近付いていく。近い近い近い、おい、待てよ。馬鹿、止める。や、止めて下さい。外山先輩、嘘でしょ、そんな……嘘だって言っして下さいよ。何期待して目え瞑ってただよお前！

神宮司先輩も……そんな、なんで？　私の事、好きだったんじゃないの？　違うなら、なんで私に言い寄ったの？

「お前って本当、可愛い奴だよな。」

神宮司先輩の色っぽい淫美な囁きで、外山先輩は頬を桜色に染める。

そして私の足元まで伸びてきていた二人の影が、重なった。

私はただ、呆然とそれを見つめるしかなかった。

なんだ、そう言う事か。つまり、外山先輩と神宮司先輩は、付き合っているんだ。私は神宮司先輩に遊ばれただけ、そう言う事だ。デートに誘われて、してやったりだ、なんて得意げに舞い上がった私だけが、馬鹿を見たって訳だ。

「ん……ちよ、ちよつと……。」

長い長いキスの後、外山先輩が顔を赤らめながら神宮司先輩を押し返す。少し息が上がっている。神宮司先輩はそれを見て、ソファの上に外山先輩の体を押し倒した。幸か不幸か、背もたれが衝立て

代わりとなつて、外山先輩と神宮司先輩がどういう体勢で絡んでいるのか、私にはよく見えない。

「あ、ちよ、ま、待ってよ。もう?」

「今日は親、どっちも居ないんだろ? じゃあ一日かけてタップリさ」

「せ、せめて部屋行こう?」

「我慢出来ねえ。そんなエロい顔してるお前が悪い」

「ほら! あの猫、見てるにゃん?」

「どうせ見てもどうも思わねえって」

思うよ。めっちゃ思うよ。真つ昼間つから動物みたいに盛りやがって。不潔なケダモノが。死ねよお前ら。今すぐにここで泡吹いて死んでくれよ。

私は既に踵を返していた。いつまでもこんな茶番に付き合っていない。こんな腐った奴らの道化なんて真つ平ゴメンだ。

少しだけ開いていた扉に体を押し込んで、廊下に出る直前、私は思い出したようにもう一度部屋に舞い戻る。最後の抵抗と言う奴だった。憂さ晴らしと言い換えても良いかもしれない。

私はミルク入りの皿を思い切り蹴り飛ばしてやった。フローリングの床に牛乳が盛大にぶちまけられ、プラスチック製の皿は乾いた音を立てて床の上を跳ね回る。

物音に気づいた二人が体を起こして私の方を見た。

「あー! あの猫! …… ったく。ほら、祐介も手伝って」

「えー、後でいいじゃんかよ」

「部屋が牛乳臭くなるじゃん」

「どうせヤツたら臭くなるし」

「……いいからさっさと雑巾取ってくる! 台所にあるから!」

厳しく言いつけられた神宮司先輩は私の方を恨めしげに睨みつけながら台所に向かつていった。

ざまあみやがれ馬鹿め。野良なんて家に招き入れるからこうなるんだ、よく覚えとけ。二度と入れるなよ。

負け惜しみも甚だしい私は、今度こそ二人に背を向けた。飛び跳ねて玄関の扉を押し開け、そのまま外山家を出て駆け出した。

取りあえず、一ミリでもいいから遠くに、一秒でも良いから早くこの家から離れたかった。

私はあてどなく町を駆ける。塀に登り、木を飛び越え、屋根瓦を蹴り飛ばしながら、走り回る。

悔しいとか、そんな感情は湧いてこなかった。ただひたすらに憎悪と憤怒と、それらを全て飲み込み尽くす程の深い悲しみが私にのしかかっていた。

逃げたかったんだ。多分現実から逃げたかったんだ。

私は、多分神宮司先輩の事が割と……いや『多分』とか『割と』なんて言い訳は止めよう。

私は神宮司先輩が本気で好きだった。

周りに自慢出来る素敵な彼氏だから、なんて理由は最早建前だ。彼は格好良かった、だから私が惚れた。それだけの事なんだ。自分を偽るのは止めると決めたくないか。私は今、人間じゃない。本能のまま生きる猫なんだ。器用に生きようとしては駄目だ。愚直に、真っ直ぐに自分に向き合って決めたくないか。

「う……うああああ……」

心臓が締め付けられる。目から大粒の涙が、まるで壊れた蛇口かと思う程大量に流れ落ちる。私は天を仰いだ。雲も太陽も、秋の高い天空から私の事を見下ろしているのが目に映った。

どいつもこいつも、私の事を馬鹿にしゃがって。死ぬ。みんな死んじまえ畜生。

「ばかやろおおおおお！」

空に燦々と輝く秋空の太陽に向けて、私は一人、孤独に慟哭した。

私が友に裏切られた理由

叫ぶと多少スツキリした。

突然昼の往来のご真ん中で大きな鳴き声を発したこの白い猫を見て、通行する人々は怪訝な顔をする。それらに少し刺のある視線を返して追い払った私は、一つ大きな溜め息を吐いて、顔を上げた。

「ええい、失恋くらいなんぼのもんじやい」

そうだ。たかだか一回恋に破れたくらいで何を落ち込んでいるんだ、私よ。

大体、あんな男に引つかかってたら碌な目に遭わなかっただろう。それを考えれば傷は浅い。それに私はもつと大変な目に遭ってるじゃないか。なんせ、人間としての尊厳を全て奪われて猫として生きているんだから。

衣食住どれもままならぬ生活を送る私にしてみれば、失恋くらい……いや、駄目だ。結構シヨクケカいよコレ。想像以上だ。

たとえ相手がどれだけのクズであつても、私の好きな人だった事に変わりはないんだ。神宮司先輩への失望。そして落胆。ついでに外山先輩への憎悪と羨望。そんな感情が私の心にこべりついている。風呂場のタイルに蔓延る頑固なカビを剥ぎ取るよりも苦勞しそうだ。まるでダイソンの米国仕様掃除機でも向けられているのかつてからの勢いで生きる気力が吸い取られていく。

やばい。こんな事ではまた死にたくなる。なんとかしてポジティブな事を考えなければ。

こんなとき、普通の人間だつたら大体は同性のモテない親友に慰めてもらうのが常道と言えるだろう。そう言えば、こんな私にも同性でモテない親友がいる。

「典子は元気にしてるかなあ……」

私の幼馴染みで同じ高校に通う、空手部所属の飯山典子は、私の親友と呼んで差し支えない存在である。

ちよつとツカ系っぽい顔に短く切りそろえた髪の毛を乗つけた、男前で爽やかな笑顔を思い出し、私は酷く懐かしい気分を味わった。思えば私は、本当に彼女とよくつるんでいる。

小中高と、私はそれなりに広めに交遊範囲を広げてはいたのだが、典子だけは常に私の隣にいた。何というか、私は彼女と居ると安心するのだ。ライナスの毛布……とまでは言わないが、彼女が居なくなるるとちよつとした不安を覚える。

接する人によってキャラをコロコロ変える私なのだが、そのキャラを作る上での全ての基本は典子にある。私が典子と接している態度を基準として、そこから愛想の振りまき方や態度、会話の内容なんかに変化をつけてキャラを作っていくのだ。典子が居ないと、私がちゃんとキャラを作れているかが分からなくなる時があるのだ。

だから典子は、私の核を為す部分に非常に大きく関わっていることになる。これを親友と呼ばずになんと呼ぶ。

今なら、典子が男だったら婿に貰ってやってもいい気分である。

「あー……どうしてるのかなー……」

典子の事を色々と考えていたら、なんだか無性に彼女の顔を見なくなった。なんせ五日も彼女の顔を見なかったなんて事は、彼女と出会って以降の私の人生では一度だって無いんだし。

なにより、この失恋の傷心の慰めになりそうな人間は、彼女以外には他にいない。

「今日は日曜だし……部活かなあ」

腰を上げた私は、一旦私が通う藪蛇高校に足を向ける事にした。

*

藪蛇高校の校舎の時計を見るに、現在の時刻は十二時半。

学生達の比率は、午前の部活が終わって帰宅し始める生徒三割、午後の部活の為にやってきた生徒七割、と言った所だろうか。私はどこかで身を隠しておくべきかどうか少し迷ったが、元々私の白い体毛は目立ちすぎる。

むしろ堂々と、この高校の招き猫やってます、くらいのふてぶてしい態度で、私は校門の上に箱座りして、高校に出入りする学生達を見つめていた。

時折私に気づいた学生達が、校門に寝そべる私に向けてそつと手を伸ばしてくる。

「可愛い〜」

「全然逃げないね、この子」

少し頭の悪そうな女子高生二人組が私を撫でながら目を輝かせている。

逃げようとしらない私の顎の下を撫でて頬を綻ばす彼らを見ていると、一体どう言うつもりなのか、と真剣に疑いたくなってくる。だって野良だよ？ 私がどんなに不潔な動物かまさか知らない訳でもないだろうに、良く平然と私を撫でられるなお前ら。その可愛らしのお手てにシラミが住み着いても私は責任取らないからな。

「……みゃあああう典子はまたなの？」

「あ！ 鳴いた！ 鳴き声も可愛いなあ」

撫でられるがまま私は視線を左右に振って学校周辺を見回す。

空手部は基本的に午前中朝早くから練習を始め、正午には終わると典子が言っていたのを覚えている。振り返って時計を見上げると既に一時近い。

例えば部室で駄弁ってるんだとしても流石にそろそろ場所を移すだろう。もしかして今日、部活休み？ ……可能性はあるにはあるけど。兎に角、ここで待っていても駄目だ。そろそろ私を撫でる二本の腕が鬱陶しくなってきた頃だ。

「あ、猫ちゃん何処行くの？」

校門から飛び降りた私の背に、先程の女子高生の声がかかるが、無視する。

私はこれ以上面倒な目に遭わない為に、人に見つからないように慎重に校内の藪の中を進んでいく。

空手部の活動場所は体育館下に作られた畳敷きの道場だ。空手部と柔道部と剣道部の活動スペースの他、体育の授業にも使われるため、そこそこの広さがある。もともと、三つも部活がひしめいてる上に部員も多いから狭い、と典子がよく愚痴を零していたが。

幸いにも道場は学内の隅で、藪に埋もれるようにして建造されている。私は誰にも見つからぬうちに道場の非常口前に到達した。

本来なら部活動をやっている武道家達の掛け声が聞こえてくるのだが、今はそれも聞こえてこない。二階の体育館から、バスケットボールをドリブルする音が幽かに聞こえてくるだけだ。恐らく、空手部の部活は終わってしまったのだろう。

ならば部室か、と思って私が腰を上げて、部室に向かう為に道場

の脇を藪を掻き分けながら歩いていると。

「……………ん？」

女の笑い声が道場の影になつて見えない所から聞こえた。大体三人から四人くらいだろうか。こんな細かい所まで判別出来るんだから、猫の聴力も中々捨てたもんじゃない。

気になった私は、藪の中から目を覗かせて、そちらを窺った。

ウチの高校のジャージ姿の女子が四人。誰も彼も髪は、精々肩にかかる程度に短く切っている。そして、その女子の中に、典子がいた。地面の上に胡座を掻いて座つて、道場の壁に寄りかかっている。彼女達は全員、笑っていた。誰が何を言つて笑っているのかは分からないが、それ以前に、どうして彼女達がこんな薄暗い場所であるか分っているのかが分からない。この場に典子が居る、と言う事は彼女達は多分、全員空手部の部員なのだろう。

ただ話をしているだけなら部室でやれば良いし、そもそも、こんな不良の溜まり場とか、カツアゲの際に連れ込まれる場所のような人気無い場所に集まる意味も無い。

そんな私の疑問を、その怪しい集いに居る一員である、他ならぬ典子が証明してくれた。典子がジャージのポケットから何かを取り出す。手に握られているせいで良く見えなかった、と思つたのは一瞬。

典子のちよつと大きな手から覗くそれは、間違いなくタバコの小箱と百円ライターだった。

「なんだそれえええええ
みやあああああ！」

「うお！ ……びつくりしたあ、猫か」

思わず叫び声を上げてしまった。典子がそれに気付き、肩を跳ねさせるが私を見て、安堵の溜め息を吐いた。

「田嶋の奴かと思ったよ……心臓に悪いなあ」

そう言っただけで彼女は箱をはたき、出てきたタバコをくわえ、慣れた手つきで点火する。その動作があまりにも手早く、そして様になっていた。私が何か言う暇はなかった。

「ははは、典子ビビリ過ぎじゃね？」

「大丈夫だって、今まで一度も見つかってないんだし。……つか、なんで田嶋？」

「アイツの声、なんとなく猫っぽくないっすか？」

「あー、わかるわかる。見た目も茶色いデブ猫って感じだし」

周りもわかるわかる、と頷きながら、それぞれ慣れた様子でタバコを取り出し、吸い始めた。そして四人とも、少し首を上に向けて、肺に吸い込んだ紫煙を満足そうに吐き出す。

すごく自然な流れだ。あまりにも自然で、一瞬だけこの場が公園の隅に設置されているサラリーマン達の喫煙所に見えた。

いや、でも、違うだろ。アンタら高校生だろ。タバコは二十歳になつてから、だろ。なんでタバコ持ってるんだよ、なんでタバコ吸ってるんだよ、不良かよお前ら。

私は思わず藪から飛び出して、典子の胸元に飛び込んだ。

「典子、止めなさいよふしやああああああ！」

「うわ、危ね！」

タバコを挟んだ手を高く掲げた典子が、煙とともに言葉を吐き出す。

その煙をもろに吸い込んだ私は咳き込んだ。嗅覚も人より優れ過ぎていて、ちよっとした煙の匂いでも息苦しい。

だが、こんな所で負けてたまるか。私は典子の指に挟まれているタバコに向けて飛びかかった。典子は反応出来ない。私は彼女の手から前足でタバコをはたき落とした。

「あ！ この猫！」

「ははは！ 『タバコは止めるにやー！』とか言ってるんじゃない？」

先程典子から先輩、と呼ばれていた背の高い女が笑いながらおどけた。まさしくその通りだ。

タバコなんて、百害あつて一利無し。健康は害するし、依存性もある。ただでさえ値段が上がった今、買い続けるのは経済的にも宜しくない。典子が二十歳を過ぎているんだったら私だって何も言うつもりはない。好きにすればいい。

だけど、まだアンタ高校生じゃんか。ましてやスポーツマンなのに、肺を汚してどうするんだ。私はそんな戒めと怒りを視線に乗せただが、典子はそのアイコンタクトを受け取ってはくれなかった。典子は落ちたタバコの火を消して、今度は立ち上がって私の手が届かない所でタバコに火をつける。

「一本無駄にしちゃったなあ」

「ま、猫に腹立ててもしやーないっしょ」

「まあ、そうっすけど……」

私はジャンプして典子のタバコを奪い取ろうとしたが、妙な悪寒を感じて躊躇した。四人が私を見下ろしていた。少しもニコリしていない、苛立ったような睨みだ。

この場で暴れるのはマズそうだ。殺気を感じ取った私は、大人しく典子の隣で座り込んだ。

目立たないように体を縮めている私から視線を離れた彼女達は再び話し始める。最初に口を開いたのは、ずっと口を閉じていた、奥

の方に座る赤毛の女だった。

ジャージの色を見る限り、その子は一年生で、私や典子の同学年だ。見た事はないから、他クラスの子だろう。

「……って言うか、典子。アンタ、こんなトコでグダってて良いの？
見舞いとか、行つといた方がいんじゃないかね？」

見舞い、と言う言葉に私は反応する。

一方の典子は、タバコの煙で輪っかを作るのに挑戦するのに夢中で、片手間に返事をする。

「見舞い？ 誰の？」

「あの子。……ええっと、名前何て言つたっけ。

アンタと良く一緒に居た子。ぶりっ子してる奴」

「ああ……アイツか」

典子は少し遠い目をして、もう一度大きくタバコの煙を吸い込んで、吐き出した。

ぶりっ子で通じるんかい、と突っ込みたいが、まあ確かに私はぶりっ子だ。ここは我慢して口を閉じておく。紫煙が立ち上って空に消えていくのを眺めながら、典子は咳くように言った。

「別に、行きたくないし」

典子の声は冷たかった。私の体を冷やすには十分過ぎるくらいに。問うた女子も怪訝に思ったのか、質問を重ねる。

「なんで？ 重体って聞いたんだけど、心配じゃないの？」
「……………」

典子は答えない。

嫌な予感がした。動物に宿った第六感と言う奴だろうか。兎に角この場から逃げたくなつたのだ。何かとてつもなく大きな物が崩れ落ちるような気がしていた。神宮司先輩の時よりも大きな何か。私はその恐怖に縫い付けられて動けない。典子の反応を窺うように、その場の三人も動かない。時だけがゆっくりと進んでいた。

「……………こんな事言つたら、引くかもしんないけどさ」

やがて典子が口を開く。足元で震えている白猫の方を見ながら、自嘲するように薄い微笑みを浮かべていた。私はそれに、脅えた視線を返す。止めて、引くような事なら、言わないで良い。そのままでいて。貴方は私の親友でいて。私を、貴方の親友でいさせて。

「ぶっちゃけアイツが事故つたつて聞いて、私ちよつと嬉しかったかも」

空気がざわめく。その場にいた三人が目を見開いて典子を見つめていた。

私は、たとえば…………大して変わらないだろう。黙って典子の顔を見上げていた。もう聞きたくはなかった。でも、理由を聞いてみたいと思う心も確かにある。駄目だった部分を直して、彼女との友情に縋りたい、と確かに思っていた。

「…………典子、仲良かったじゃん」

「確かに、仲は良かったよ…………うん。でもさ…………たまに思っちゃうんだ。」

もしアイツがこの世に居なかつたら…………なんて事」

典子は静かに呟く。

「アイツは可愛いし、頭も良いし、要領が良くって、私とは大違い。私はガサツだし、入試もラインギリギリだし、ぶきっちよだ。一応、私なりに頑張って努力したつもりだけど……全然駄目、追いつけない。」

小さい頃から何をするにも一緒に、だからこそいつも比べられてきた。

「いつつも私はアイツの後ろ。何をするにも私より遙かに上手くやっつてのけて、後ろから来る私を見て笑ってやがる。」

「だから……ずっとそんな奴が側に居て……正直、辛かった」

典子は顔を俯けている。誰も何も言わない。息を吞んで、典子の独白に耳を傾けている。

「それなのに、向こうは私に親友面して近寄ってくるんだ。」

「……馬鹿にしてるとしか思えなかったよ。」

『私は出来損ないの貴方のような人でも親友だと思える程心が広いんだよ』って言ってるようにしか見えなかった。

裏で絶対私を馬鹿にしているとしか思えなかった」

「……何を馬鹿な。何を馬鹿な事を言ってるんだ、典子は。タバコの吸い過ぎで脳味噌が腐ったんじゃないか？」

「いつ私がアンタを馬鹿にしたんだ。そんな事、一度だってないのに。」

「そんなの、私は関係ないじゃないか。ただただ典子が卑屈になって、勝手な被害妄想で私を悪者にしてるだけじゃないか。私は別に典子の事を下に見たりした事は……。」

「事故る前の日さ、昼休み、一緒に弁当食ってたんだ」

典子はタバコの煙を吸い込み直す。すっかり禿^ちびたそのタバコを地面に投げ出し、火を踏み消す。

「いつも見たいに、馬鹿みたいな話をしてたんだよ。」

動物がどうか、モテるかモテないか、とか。それで、私がモテないって話になった訳よ。

まあ、別にそれくらいはいつも通りでさ、適当に流しとこうと思っただけど……ね。

アイツ結構猫被りでさ、そう言うの止めとけよっていったら『モテない奴の僻みにしか聞こえないわ』……ってさ」

そんな事を言ったかどうか、私は正直に言っつて、あまり覚えていない。

ただ、その言葉を今聞いても、別にどうとも思いはしない。親友同士で戯れ合っている時の言葉なんだから、大した意味はない。だが、どうやらそう思っていたのは私だけのようだ。

見上げた先にいた典子は、拳を握って歯を食いしばって震えている。無感情で、氷塊で作ったかのような、冷たい目をしている。

「私だつて、言葉だけ聞いたら単なる冗談だと思っつて流してたと思っただけどさ。」

人を見下してる笑顔だつたよ。アイツのあの表情は。

駄目な人間を蔑み笑うような、汚い面で私を見た。

何となく気づいてた事だけど、それで確信がもてたよ。

アイツに取つて私は、自分が優位に立っているのを確認するため
の存在なんだ。

貴族が奴隷を見て自分の恵まれた境遇を実感するような感じさ」

典子の言葉に、私は頭をハンマーで殴られたように打ちのめされ

ていた。

私は反論の言葉を思い浮かべる事さえ出来なかった。

反論が出来ない。違う、と言い切れない。言い切れない自分の卑屈さが、情けなくてたまらない。自分の心に素直に生きる。今、”そう言うキャラを作っている私”は、自分の心の汚さに吐き気さえ催しかけていた。典子は私にとつての基準だ、と私は考えていた。核の一部である、と考えていた。つまりそれは、私が典子の事を『自分より劣った存在である』事を前提に考えているのだから。

私は自負のある八方美人だ。自分の心が澄み渡っているとは思っていない。

でも、私は私が無意識であるうちに、随分と心を汚してしまっているらしかった。

典子の事を対等に考えようともしていないのに、典子は親友だ、等と自分すら気づかないうちに甚だしい勘違いを犯していたのだから。

「……………」

場の空気が張りつめている。誰も、何も言わない。何も言えなかったのだ。顔を上げた典子は、顔を凍り付かせている空手部の同僚達に向けて、慌てて苦笑いを向けた。

「や、やだなあ。そんなマジな話じゃないっすよあ。冗談、冗談だっつて」

今更そんな事を言っただって、誰が信用するものか。

私だつて、無理だ。冗談であればどれだけいいか、と思っても、そう思い込む事はもう不可能だ。

あれだけ真面目な顔で、真面目な声で語られちゃあ……………もう、無理だよ。

私の足元に典子が投げ捨てた、まだ長いタバコが落ちてきた。典子はそれを踏み消し、溜まり場に背を向ける。

「あ、じゃ、私帰るんで、また明日」

典子はそう残し、走り去って行く。溜まり場にいた赤毛の同級生は、その背中を見て一つ呟く。

「……典子も、結構苦労してんだね」

大した感慨もなく、溜め息混じりに発せられたその声は、タバコの煙と一緒に空に立ち上ってすぐに消えてしまった。

私が親に見放された理由

私は失意のまま、人通りの疎らな町の中を歩いていた。

夕暮れも過ぎて、半月が空に浮かんでいる頃になっても、私はねぐらにしている祠に足を向ける気にはなれなかった。

私が一番信頼していた親友の吐露を聞いて以来、私の頭はインフルエンザと貧血が同時に襲ってきた時のようにボーツとしていた。足元さえおぼついていないのだから、人間が如何に精神に依存する生き物であるかどうかが良く分かる。

ふと見上げると、丁度街灯が灯る時間であつた。俄に町灯りが広がっていく。

足を止めて近場の街灯の真下を見ると、アスファルトに点々と、妙な赤黒い跡がついている。どうやら血痕のようだ、と気がついてから私は今自分が何処にいるかを思い出した。

「……あの黒猫と会つた場所だ」

ここは私がああ黒猫と運命的出会いを果たした場所で、私が猫を踏み殺しかけた場所で、私が猫に変えられる切っ掛けを作つた場所だ。

私はあの時自分にわき起こつた激情を思い出し、身の毛がよだつた。

何故、私はあれ程恐ろしい事が出来たのだろうか。嫌いな動物に顔を傷つけられたのは、確かに腹が立つ。今でもそれに違いはない。でも、体の上に乗つた猫を張り倒すだけで良かったんじゃないかなんで私はそれを追いかけて蹴り飛ばし、何度も何度も念入りに踏みつぶしたんだろうか。

あの時の私には、それこそ熟達のエクソシストが三日三晩かかっても対処し切れないほど強大な悪魔が取り憑いていたとしか思えな

い。気の迷いとか、それまでの鬱憤とか、そう言う要員が全て重なって、私を残酷な凶行に走らせたのだと思いたい。

アスファルトと石垣に飛び散った血痕を見やって、私はそれに前足を重ねてみた。

「……………」

あの黒猫は、今の失意に落ち込む私を見たら何と言うだろうか。

嘲笑うだろうか。嘲笑ってくれるだろうか。私がどれだけ醜い化け物なのか、と罵ってくれるだろうか。……いや、黒猫はそんな事をしない。あの猫が私の望む事をしてくれるとは、私には思えない。

「典子お……私、私……」

今まで典子が私の隣で感じてきた感情を、僅かでも心に留めたかった。同じ目に遭って、彼女の痛みを思い知りたかった。

自己満足甚だしい贖罪だと、自分でも分かっている。でも、今の私は猫だ。

私が典子にどれだけ頭を下げても、どんなに心を込めた贖罪の言葉も吐いても、彼女には届かない。もし仮に人間に戻ってから私が彼女に頭を下げて、私の言葉は本当に届くだろうか。

自信がない。彼女が私の反省を受け止めて、私への印象を改善してくれるかどうか、分からない。私がまた典子を知らぬうちに見下してしまうかもしれない。

多分典子は普段通り私と接してくれるだろう。表面上では変わらぬ友情でも、心の奥では舌打ちするかもしれない。

それが、どうしようもなく怖い。想像するだけでこの世の全てに見放されたような気分になる。いっそ、このまま猫として過してしまえば、典子とは顔を会わさないで済むんじゃないか。

「……………」

私は自分の顔を研いでないせいで太くなってしまった爪で引っ掻いた。

こんな事ではいけない。何の為に生き延びたんだ。私は人間に戻りたいんじゃないのか。私は首を振って、妙な考えを追い出した。今日は少し嫌な事が多かった。神宮司先輩の事も、典子の事も、どちらも私の心を深く抉り取っていった。

だが、こんなものは一過性の傷に過ぎない。

先輩の事は残念だが、単なる失恋。典子との事だつて……毎日のように喧嘩してた頃もあつたじゃないか。一回本音でぶつかり合つて、ちゃんと話し合えば悪い結果以外の道が見えるかもしれない。そうやって自らを何とか奮い立たせながら町を放浪する私は、一軒の家の前で自然と足を止めた。顔を上げてその家の表札を見て、私は驚いた。

「私の家だ……………」

ここは、私の家……………ねぐらにしている祠ではなく、人間として住んでいたときの自宅である。

帰巢本能というものは人間にもあるのだろうか。特に意識して歩いてた訳では無いのだが、自然とここに向かってしまっていたのだらう。

自宅のリビングの窓から明かりが漏れている。今日は日曜日だから、恐らく父も居るのだらう。

今となつては、仕事に実直な父は勿論、あのカバのような”母らしき何か”さえも懐かしい。親と一週間近く顔を合わせていないと言つのは、意識して振り返ると少し寂しい気分になつた。

あの唾棄すべき母親の醜悪な顔さえも一目見たいと思つてしまうのは、ある意味では呪いか何かではないかと私は思う。その呪いの

名は、家族。互いが無条件に共に寄り添い、無条件に愛し合わなければならぬと言う、素晴らしく強固な呪いの鎖である。

「父さんも母さんも、どうしてるかなあ」

窓の中が気になった。

植物状態となった私を見て、父や母はどう感じているのだろうか。一体今、どんな気分なんだろうか。

私には当たり前だが夫も娘も居ないので、良く分からない。

でも、父や母が事故に遭って意識不明、などと言われたら、多分私は赤ん坊より遙かに大きな声で泣きじゃくる。あの役立たずの穀潰しである母でさえも、亡くしてしまったら私は向こう三日間は呆然としていられる自信がある。

なんだかんだ言っても、家族の事は大切だ。父は勿論、母の事さえも私は心の何処かでは愛情を抱いていたのかもしれない。無償で自分を愛してくれる唯一無二の存在なんだから、大事に思うのは当然である。

当然母もそう思ってくれているのだろう、父もそう思ってくれているだろう。

そんな確信めいた期待を胸に抱いていた私は、気づけば家の扉を飛び越えて、縁側に腰掛けた。自宅の懐かしく、ちよつとだけ温かい雰囲気を味わいたかったのだろう。窓にはカーテンがかかっているため、中の詳細な様子は窺い知れないが、耳を窓に押し付けると、中の生活音は聞こえてくるはずだ。

「……？」

私が聞き耳を立てている部屋はリビングである。

普段なら誰が見てる訳でもないのに常時つきっぱなしのテレビの音が聞こえてくる筈なのだが、物音は聞こえてこない。怪訝に思っ

ていた私が、窓の冷たさを我慢してさらに耳を強く押し当てる。
幽かに、女の声が聞こえてきた。

「今、なの？」

幼い頃から聞き続けてきた、聞き間違いようがない母の声だ。

「今だからこそ、だ」

母の言葉に、父が答えを返す。会話の端々からは、妙な緊張感が漂っていた。私は更に窓に耳を強く押し付ける。

「なにもこんな急に……あの子があんな状態なのよ？　なんでこんな大変な時に」

「今話さないと、多分俺はずっと話せない」

母の疑問を遮る父の声は、どことなく苛立っているように聞こえた。こんな父の声は初めて聞いた。私の父は普段から温厚で、苛立ちなんて言葉は辞書登録していないとばかり思っていたんだが。

「後はお前が判を押すだけだ。それで、離婚が成立する」

「^{離婚}みやおおお！？」

突拍子もない、なさ過ぎる父の言葉に、私は思わず鳴き声を発してしまった。

「……外に何か居るみたいだな」

「ねえ、ちよつと貴方。そんなのどうでも良いわ。」

それよりも離婚だなんて……どうして今になって「

そつだ。どうして今更離婚なんて考えるんだ。確かに母はどうしようもない人間だ。家事をしない専業主婦、つまりニートだし、見た目も悪いし、性格も横柄で良い所を見つけないのが難しい。

でも、父さんは、そんな母さんと結婚したじゃないか。

私を産んで、十五年も育ててくれたじゃないか。

それなのになんで離婚なんてするんだ。

恐らく、私と母は同じ事を考えていた。父は、一体何を考えていたのだろう。

「もう随分昔から、我慢なんて出来てなかったよ。

お前は家事もしないし、子育ても碌にしない、駄目な母親だ。

俺がどれだけ苦労してきたと思ってるんだ。

あの子がいなかったら、とっくに離婚してる」

……あの子、と言うのは私の事、だろう。

あの子が居なかったら、とっくに離婚してる……って、ちょっと待て。私は今、事故に遭って意識不明と言う事になっている……つまり、病院に入院していて、まだ生きているんだろう。なのに何で離婚の話が始まるんだ。

居なくなってるじゃないよ。私、まだ生きてるのに。

「……あの子はまだ生きているわ。

お医者さんも、奇跡的に外傷は殆ど無くって、意識がないだけで「なら何であの子は目を覚まさない！」

意識が戻らない原因は、医者にも分からないそうじゃないかっ」

父が半ば怒鳴るように言っている。貧乏揺すりしている様が見えるような気さえする。

「入院費だって馬鹿にならない。

俺の稼ぎだけじゃキツいって前から言ってるのに、お前はパートにさえ出ねえ」

「そんなの別に私の知ったこっちゃないわよ」

「……お前って奴はいつもいつもそうやって自分の事ばかり考えやがって」

「なによそれ。貴方だって仕事仕事って、そればっかじゃないの」

離婚の話が、段々と夫婦喧嘩の様相を呈し始めた。

二人の罵り合いを聞くのは、そう言えば随分昔、まだ私が物心ついた位の頃以来な気がする。私が小さい頃は二人は良く喧嘩していた。内容はあまり覚えていないが、食器や小物が飛び交うような激しい喧嘩もあった。

その度私は大声で泣くのだが、二人はまるで構ってくれず、寂しい思いをした事を少しだけ思い出した。泣いても無駄だと気づいた私は、それ以来しばらくは大人しく過ごしていたんだと思う。父と母に好かれるように、自分なりに試行錯誤した結果、静かにしているのが一番良いんだ、と気づいたのだろう。

私が一番最初に猫被りを覚えた瞬間である。今に思えば、私の八方美人にもちゃんとしたルーツがあるらしい。

お陰で昔から手のかからない子だった、と良く言われていた。

私は二人の会話をこれ以上聞き続ける事に躊躇いを覚えたが、結局窓から耳を離す事はなかった。会話の内容が再び離婚、そして私の話題に戻り始める。

「いいか……俺はお前と離婚する。絶対に離婚してやる。今すぐ別れてやる。」

「養育費だけは払ってやるよ。けどな、慰謝料は勿論、入院費も出さんからな」

「え……な、何ですよ。貴方、あの子が病院から追い出されてもいいの？」

「知るかつ。そうしたくなきゃお前が働け。
俺はもう、死んだも同然の娘の事なんか知らん。お前一人で育てる」

父の興奮したような声が聞こえてくる。

今、私は一体どんな表情をしているんだろうか。怒ってるのか、憎んでるのか、そんな顔だったらいい。泣き顔なんかになっていたくない。悲しみを背負いたくない。

……私は頑張ったもん。何にもしないお母さんの代わりに、家の事はやったし、勉強だつて頑張ったし、それに……頑張ったんだもん。駄目なお母さんと結婚してしまったお父さんのためにも、泣き出したいのを必死で堪えて、逃げ出したいのを必死で耐えて、手のかからない子に育ったのに。

なんでおとうさんはそんなことをいうんですか？

おとうさんは、わたしがきらいなんですか？

わたしは、ふたりとも、好きだったのに。

「な……！ 貴方、それ本気で言ってるの？ 貴方、仮にもあの子の親でしょ？」

「うるさい！ 大体な、俺は最初からあの子を産むのには反対だったんだ！」

「何を今更……できちゃったんだから仕方ないでしょ！ 私だつて、最初は墮ろすつもりだったわよ！」

でも世間体つてもんがあるでしょ！

それに初孫だからって舞い上がったウチの家族が近所に言いふらしちゃって、もう後に引けなくなつて……」

「さつきから言い訳ばっか吐きやがって！ もう我慢出来ない！

ほれ、さつさとサインしろ！ 判子もここにあるから、さつさとやれ！」

私は未だに窓に張り付いたままだった耳をどけて、そのまま家の塀を飛び越えた。

頭では考えまい考えまいとするが……駄目だ、どうしても二人の言葉が耳から離れない。

産むのに反対？　できちゃったから仕方ない？　そんなの知らないよ。じゃあ私は何？　何で産まれてきたのよ。一体誰に望まれて産まれてきたんだよ。

今、私は驚いていた。

好きだった神宮司先輩には弄ばれ、親友と思っていた典子には心の底から憎まれ、拳げ句無償の愛をくれていると勘違いしていた両親から見捨てられ、ようやく気づいたのだ。

この世が如何に私に対して、残酷に作られていてるかを。

私が如何ににこの世に取って、必要のない存在なのかを。

気づくのが遅過ぎた。或いは、死ぬまで気づきたくなかった。

客の冷たい目線を感じ取れない盲目のピエロのまま、舞台上で踊り続けている方が遥かにマシだった。

「……帰ろう」

家の方は最早振り向かず、私は尻尾を下げたまま、私のねぐらである祠に向かった。

もう私の帰るべき家は、この家ではない。人間としての私が帰るべき場所なんて、もうこの世にはないのだ。だから私は野良猫として野良猫らしく、腐った床板の上でゴキブリの内臓を喰らうのがお似合いなんだ。

帰り道は暗かった。街灯の明かりは頼りないし、月も半分しか出ていない。住宅街の電気も、妙に疎らだった。でも、私の眼は猫のまなこ目だ。随分先まで見通す事ができる。

出来る筈なんだが、あまり先が見えない。全てを飲み込んでしまっいそうな暗闇がひたすら広がっているように見える。私はそんな中、

足を止めずに歩いて行く。たとえ途中で道が分からなくなっても、それはそれで構わなかった。

私が孤独になった理由

私が祠に辿り着くと、中で尻尾の裂けた黒猫が箱座りしてこちらを見つめていた。ジツとこちらを眺めて、すぐ飽きたように視線を外す。

「……お帰り、とか言ってよ」

「ここはお前の家でも、ましてや俺の家でもねえぞ」

黒猫のぶつきらばうな言葉が返って来た事が、どうしようもなく嬉しかった。

軋む木製の階段を上り、黒猫の隣に同じように箱座りして並ぶと、私は何故か安心感を得た。何故かは分からない。憎むべき相手なのに、私は心を許しているのかもしれない。

「……なんか喋ってよ」

「なんか」

「……古い上に、なんでそんなやり取り知ってるのよ」

「昔の俺の主人が良くやってたんだ」

黒猫は無感情的にそう呟く。

しかし、それでも言葉が返ってくると言う事がこれほど嬉しいとは思わなかった。だから私は言葉を繋ぐ。

細い藁に縋るような思いで、暗闇の中で人を探すように必死に腕を振るような感覚で。

「アンタは、今何歳なの？」

「知らん。でも、お前よりは長生きをしている」

「へえ……あ、何で起きてたの？もしかして、私を待ってたり？」

「猫はどんな時間でも起きるし、眠る。」

「昼起きて夜眠るお前は、まだ人間の習慣が残ってるだけだ」

「そっか……じゃ、私も昼寝とかした方がいいのかな」

「好きにしるよ。気紛れに、寝て起きるのが猫だ」

黒猫は薄く目を瞑って寝そべった。気紛れ、と言うのはこの猫の口癖なのだろうか。それとも、猫はみんなこんな感じなのだろうか。他の野良が居ないので、私にはよく分からないが。

「そう言えば、犬の縄張りとか言ってたけど、犬全然来ないよね」

「俺がいるからな」

「どう言う事？」

「犬に聞きな。俺は知らねえ」

黒猫との会話は楽しかったと素直に思う。返ってくる言葉は短いけど、それが妙に心地よかった。この世から否定された私の穴だらけで傷だらけの心には、唯一の癒しだった。このままずっと、こうやって話し続けるのも良いかもしれない。私はそんな事を思ってしまった。

「さて、俺はまた寝るぜ。喧嘩だったらいつでもどうぞ」

「……ねえ」

気づけば私は声をかけていた。

気の迷いだったのかもしれないし、本気だったのかもしれない。

こればかりは後になってからどれだけ自分の心の奥を探ってみても、結論が出なかった。しかし、私が行動したと言う事だけは事実だ。

「アンタって、オス？」

「そうだ」

それだけで十分だった。

私は寝そべる黒猫の方に体を寄せた。懐に潜り込むように体を滑り込ませ、黒猫の体温を確認するように密着する。

行動に敵意が感じられなかったからか、黒猫は抵抗しない。私はさらに体を近づける。黒猫の体毛は、見た目通り野良とは思えない程毛並みが良くて、触り心地も絹のように柔らかい。黒猫の顎の下に顔を埋めて、私は深呼吸をした。

そして、黒猫の身体に正面から抱きつくように全身を押し付けて、身体を擦り付けるように動き始めた所で、ようやく黒猫が反応を示した。

「……お前、何をしてるんだ」

「……………」

私は答えない。理由は色々ある。心が沈んでいるせいとか、単に恥ずかしいとか。

でも、止めるつもりはなかった。猫の事情は詳しくないが、やろうと思えば勝手に身体が動いてくれた。本能的行為とはありがたい限りだ。

「……発情期はもう終わったぞ」

「人間には発情期ないし」

私は端的に返す。黒猫は煩わしそうに前足で私の身体を押し返そうとするが、私は必死で黒猫にしがみついた。寝転がったままの妙な相撲は、私主導の黒猫優位で進んでいく。

「人間のくせに、猫に発情するのか？ お前は本当に変な奴だよな」

あ

「もう私は猫だもん。だからいいんだよ」

「意味が分からないぞ、お前」

私の抵抗も虚しく黒猫から突き飛ばされたが、私はなおも黒猫ににじり寄る。

黒猫は身体を起こして、こちらを正面から睨みつけている。威嚇しているようにも見えた。私が一歩足を進めると、黒猫は一歩後退する。外でやるよりは中でやる方がそれなりに安心感はあるので黒猫が逃げ出す事も考えて、私はそれ以上前に進まずに、黒猫と正面から睨み合った。

「理由は何だ」

「気紛れ」

「猫は気紛れだが、子作りは計画的にする。」

それに、テメエは人間だろうが。猫の子を産んでどうする気だ」

「もう人間じゃないもん。私、猫だもん。そう言ったのはアンタじやん」

「人間に戻りたいと言ってたじゃねえか」

「戻る理由も、意味も……全部なくなっちゃった。」

今日偶然会った私の大事な人達は、みんな私の事を邪魔に思っていたわ。

誰も私を受け入れてくれない世界で生きるなら、どんなに惨めでも誰かの側に居れる世界で生きたい。

だから、もう私は人間に戻らない、私は猫になる！」

私の言葉を聞いて、黒猫は一瞬だけ動揺したように瞳を揺らした。そして、前足を屈めて、いつでも私に飛びかかれるような体勢で本格的に威嚇を続ける。

「猫は未来に命を繋ぐ為に交尾をする。

だがお前は違う。欲に身を任せて、自分の寂しさを紛らわせようとしているだけだ。

猫と交尾をして子供を産んで、人間に戻らない事に言い訳が欲しいだけだ。

人間様は姿形が変わっても所詮人間様だな。どこまでも傲慢、自分本位。吐き気がするぜ。

子供の事を全く考えようとしていない。お前に母親になる資格なんてねえよ」

「そんな資格のない母親なんて、この世には掃いて捨てるほどいるわ」

「人間の母親にはいる。だがな、猫の母親にはいねえんだよ」

私の考えを完全に見透かした黒猫は、私に背を向けた。最早欲望の塊でしかない私はすぐさま飛びかかるが、黒猫は背中にも目でもつけているのかと思う程的確に私の襲来を回避した。

飛び退いた黒猫は、既に祠の入り口から私の方を見つめていた。遠過ぎて、彼の顔色が物語る感情を、私は読み取る事が出来ない。

「喧嘩を挑んでこないなら、俺がここでお前を待つ理由もない。

じゃあな、人間様。もう二度と会う事もねえだろうよ」

そう吐き捨てて、暗闇の中に浮かんでいた二つの小さな月はあっさり姿を消した。私はすぐさま祠の外に出るが、黒猫の姿はもう既に夜の帳の向こう側。後に残された白い毛玉の塊は、ふいに吹き付けた夜風に、身体を震わせる。

「……………もう、分かんないよ」

あの黒猫は正直者だ。だから多分、二度と会う事はないのだろう。

人間に戻れない、話し相手が居ない、色々と悲しい事はある。

でも、心の何処かでは納得していた。腑に落ちていたのだ。ある意味では、この展開も期待していたのかもしれない。

何もかも突き放して、ひたすら絶望に溺れて破滅に身を焦がしたいと、望んでいたのかもしれない。

私は一人で祠の中で身体を横たえた。

さっきまで黒猫が寝転んでいた場所にはまだ温もりが残っていて、私はそこに寝転がって眠りについた。おやすみなさいを言う相手が居ないのは、やっぱりちよっと寂しかった。

私が人に絶望した理由

黒猫が姿を消してから、二ヶ月余りが経過した。

多分今は十二月だろう。季節はすっかり冬になり、野良猫である私にはもつとも厳しい季節の訪れである。餌を取るのには随分慣れたのだが、如何せん食べるものがない。

猫になりたての頃、私の胃袋を満たしてくれていたバツタやコオロギは、越冬の為に各々の形態をとっており、私が手を出せるものではない。鼠や雀の類いは年中存在するのだが、こちらは捕まえるまでが一苦労だ。

半日全力で追いかけて回して結局捕まえられない、というのはザラで、最近の私の生活は階級を六つくらい落としたプロボクサーのように苦痛に満ちたものであった。

寢床の問題もあった。

祠は犬の縄張りである事に違いなかったらしく、黒猫が消えた翌日から、徐々に山に住む野良犬が姿を見せ始めたのだ。威嚇するように私に吠えてくる彼らの群れに、私は追い出されるように下山しなければならなかった。そのため、最近はその日その日で気に入った適当な民家の縁側を屋根代わりに眠る事が多くなっていた。

その日暮らした生活を送る私の精神活動はその日その日を生きる事に精一杯で、他の事を考える余裕は殆どなかった。

でも、それで良かった。それが良かった。

何かを考える度に瞼の裏に浮かんでくる知己の顔は、より一層私が孤独である事を再認識させ、私の心を嫌がおうにも締め付けようとする。

温もりを求める度に踏みつけにされた私の心は、二月もの間冬の匂いが薫る秋風にさらされ、すっかり萎びてしまっていた。

生きる気力も目的も碌に持っていない。しかし、死ぬのは怖い。だから私は、死を回避する為に日々を生きている。死んだように生

きる、とは恐らくこう言う事を言うのだろう。誰も来ないような薄暗い路地裏を縄張りに、人の目を避けるようにしながら、私は日々の生活を送っていた。

今日も町で一番不人気の、安さだけが売りのマズいラーメン屋の裏に巢を張っているゴキブリを二、三匹仕留めた後、私は昨日からのねぐらである、とある日本家屋の縁側の下で寒さに身を震わせていた。

「……寒い」

独り言が増えた、と自分でも思うようになった。

誰も答えてくれないけど、それでもまだ、人間に未練があるのかもしれない。

空に消える吐息が白く濁ってすぐに消える。それを目で追って空に目を向けると、白い粒がゆっくりと舞い降りていた。小さな粒はそのまま私の鼻先を通り過ぎて、そのまま地面に落下する。

「雪だ……」

初雪だった。

舞い降りた粒が家の庭の剥き出しの地面に落ちて、すぐに融けてしまった。

それを目で追っていた私は、もう一度空を見上げる。雪は次々降って来ており、灰色の空は白い水玉模様で彩られていた。

時の経過を実感した。私が猫になった頃は、まだ半袖で過ごせる日もあったと言うのに、今や雪さえ降ってくる季節である。粒の大きさを考えると、雪は薄く積もるだろう。これはますます食事に苦勞しそうだ。これから更に寒くなっていく事を考えると、温かい場所を探して寝床も一つに絞った方が良くないかもしれない。

その点を考えると、この家は住みやすい。床下のスペースもそこ

そこ広く、時折鼠が横切っていくから、ここに引き籠つてもある程度の期間は暮らすことが出来そうだ。

今日はもう出ない方がいいな、と考える私の頬を、縁側下まで吹き込んで来た冬の風が撫でた。私はもう少し奥に入ろうと重い腰を上げた時。コトリ、と言う音が私の頭上、つまり縁側の上から聞こえて来た。

この家の家主だろうか、と私は更に身体を床下の奥に引つ込めるのだが、しばらく待ってみても声も聞こえなければ、人の匂い、気配さえもしない。

代わりに、久しく嗅いでいなかった、食欲を刺激する美味しそうな何かの匂いが私の鼻腔を刺激した。

腹は然程減っていなかったけれど、私は知らぬうちに匂いに惹かれて縁側下から顔を出し、音の発生源を見やった。

そこには、サンマを乗せるような細長い皿の上に、細く裂いた力二かまとシーチキンを和えただけの栄養がやたらと偏った海鮮サラダが山盛りになって鎮座していた。思わず口から唾が垂れそうになった。塩っ気のある人間の食べ物をごここまで近くで見たのは、それこそ二ヶ月ぶりだ。

「……………みゃあう」

私は気づけば辺りを警戒する事も碌にしないで、縁側の上に飛び乗っていた。

縁側と廊下をしきるガラス戸は開かれているが、その奥の和室に通じているのだろう障子戸は閉まっている。家の人間からは見られていない。食うなら今だ、と私は歩み寄るのだが、その皿の一手前でかろうじて足を止める事が出来た。

赤と肌色の混ざり合ったそのご馳走は、別に天が私を哀れに思つて神様が置いていった物ではない。

十中八九、この家の人間が置いたものだ。恐らくは、私の存在に

気がついて。

私は手が出せなかった。この餌を差し出した人間の意図が掴めないのだ。

やせ細った薄汚い野良猫を哀れに思つて差し出されたのか、或いは鬱陶しく思つて毒を盛っているのか。幾ら何でも野良猫如きに毒を盛つてまで始末を付けたがる程神経質で酔狂な人間はそう居ないと思うのだが、私はその考えを捨て切れない。もしかしたら、私の事を何処かで誰かが見ていて、美味そうに食事をする私が血反吐を吐いて苦しむ様を見たがつているかもしれない。

そんなネガティブな考えが私の心の中に僅かな虫食いを生じさせ、穴を広げていくのだ。

このねこまんまを食べるのが怖くなつてしまった。善意と哀れみで出来ているねこまんまを、そしてそれを差し出してくれた人間を、信じる事がどうしても出来ない。

私は諦めて皿に背を向けて縁側を降り、そのまま床下に入って出来る限り身体を丸め、目を瞑つて昼寝を始めた。カニかまとシーチキンの脂の匂いが頭から離れなかったので、腹いせを兼ねて鼠を一匹飲み込んで、私はようやくやく眠りにつけた。

*

翌日、私はあまりの寒さに目を覚ましてしまった。

時刻は不明だが、おそらくは昼前くらいだろう。縁側から顔を出した私の眼に飛び込んで来た、天高くから降り注ぐ陽光を見上げ、私は身を震わせた。

昨日とは比べ物にならない程寒い。多分初雪を尖兵とした、大き

な寒波がこの町にもやって来たのだ。降った雪は全く積もっていなかったが、空にひしめく厚い雲達を見ていると、この町が銀世界と化すのも時間の問題だろう。

「……さつむ」

それでも冬用の毛に生え変わっている筈なんだが、猫になってから冬を迎えるのは初めてだ。

野良猫は毎年この寒さに耐え忍んで生きているのかと思うと、炬燵で丸くなる猫がどれほど恵まれた存在なのかを再認識してしまう。私も久しぶりに炬燵で眠りたい。身を切るような冷気に耐えながら身体を丸めて惨めに眠る私には、そんな人間なら当たり前前の事も叶わぬ夢となってしまうているのだ。

……なんて事を考えると、またしても人間だった頃の記憶が蘇ってくる。

みんな、どうしているだろうか。外山先輩と神宮司先輩はまだ続いているだろうか。典子はタバコを止めていないだろうか。親はもう離婚しただろうか。

そしてみんな、二ヶ月間も眠りっぱなしの私の事をどう思っているのだろうか。

「そんなの……決まってる」

どう思っているも何も、私は彼らから疎まれていたんだ。居なくなっただけ清々してる奴の事なんて、覚えていない訳がない。

私だって忘れない。何もかもを忘れ去った一介の猫になりたい、とどれだけ日々の感情を押し殺して生きてみても、ふとした瞬間にはどうしても彼らの事を考えてしまう。こんな時に限って思い出す顔は何故かみんな、見ているこっちが恥ずかしくなる位の満面の笑顔で。夢に出てくる彼らは、爽やかに私に手を差し伸べているのだ。

そんな手を取れる筈がないじゃないか。私には取る勇氣も、取る資格もないんだから。

猫を被ってキャラを作つてまで誰かの側に居るのを求め続けてきた私に訪れた結果は何だ？ これ以上期待を裏切られるのはもう嫌だ。結論はとうに出ているのに、何度も何度も同じ自問自答を繰り返す。なんて馬鹿な奴なんだろうか、私は。何度言い聞かせれば分かるんだ、私は。

そろそろ、頭を働かせるのは止めよう。お腹も空いてきたし、餌を取らなければならぬ。そう思つて縁側から出ると、昨日と同じように私の鼻腔をくすぐる芳醇な香りが辺りに漂っていた。

縁側の上に、丸い皿が置いてある。乗っているのは、昨日同様シ―チキンとカニかま。それに加えてカツオのたたきの端っこが一切れ。皿が違つ所を見ると、別に用意したのだろうか。わざわざ、私の為に？

「…………いや、やめとこ」

私はやはり、皿に背を向ける。町中は寒かつたけど、走ればすぐに身体も温まつた。

*

その後もその家の縁側には、私の為に置かれたのであろうシーチキンとカニかまのサラダが毎日置かれていた。私はそれを食べる事なく、皿を無視して寒さを凌ぐ為に縁側の下から床に潜り込んで眠りにつく日々を過ごしていた。

毎度毎度そのサラダの誘惑を断ち切るのは至難だったが、私は毎日それを耐え抜いて生活していた訳だ。何故この家に住み続けているのか、私には自分でも良く分からないのだが……いや、誤魔化すのは止めよう。

わざわざ餌を置いてくれているこの家は、もしかしたら私の事を歓迎してくれているのかもしれない、と言う浅はかな願望が心の隅に幽かにあったのだ。

あれだけ俗世を捨てた気になっていた癖に、私はまだ誰かに縋り付こうとしている。また、疎まれるかもしれないと分かっているも尚、救いの手を求めずにいられない。

自己矛盾も甚だしい、えらく人間臭い野良猫である。

そして、そんな野良猫の生活に転機が訪れたのは、この家の床下に住み着き始めて十日程経った頃だ。

それまでの豪雪をこの身一つで乗り切った私に神がご褒美をくれたのだろうか、その日は中々の冬晴れだった。体感的には秋頃の気温である。多分天気予報ではポカポカ陽気、とか言い出すだろう。

空に浮かぶ切れ切れの雲はやたらと輝いているように見えて、葉が落ちた枯れ木さえも何故か妙に絵画的に見えるような、浮ついた日だった。私は陽気に誘われるように縁の下から這い出て、そのままこの家の庭で箱座りしてひなたぼっこをはじめた。家主に見つかの可能性もあったが、わざわざ縁の下に住まう飼ってもいない野良猫に餌を出してくるような家主だ。庭でひなたぼっこしている猫を見て、追い出そうとはしないだろう。

私は目を瞑って、日の光をひさしぶりにじっくりと浴びる事にした。風もなく、日の光も穏やかで、まるでぬるま湯に使っているような心地よさだった。

今日はこのままジツとしていよう、と考える私の身体を、大きな影が覆った。恐らくこの家の住人だ。

流石に家主の目の前で野良が図々しく居座っているのも問題か、と思っただけは諦めて腰を上げた。一体どんな人なんだろう、と確認

するつもりで顔を上げ、私はそのまま固まってしまった。

「……みゃう嘘」

「……」

偶然とは時として偶然として片付けていい物かどうか、迷ってしまふときがある。恐らくそう言う場合、人は運命と言う言葉を使いたがるのだろう、なんて、私はどうでも良い事さえ考えてしまふ程混乱していた。

髪は長く顔にかかり、そこから覗く目つきは悪い、若い男が私の眼に映った。顔は無表情で、猫を見てもちつとも綻ばない無愛想な顔の男は、妙な事に私の見知った顔であった。

「……」

彼は奥田和也おくたかずやと言う。

藪蛇高校の男子硬式テニス部の部長を務めており、無愛想と言う言葉が擬人化したんではないかと思う程取っ付きにくい男だ。

私が人間として高校に通っていた頃、私は彼を毛嫌いしていた。

女の私にも手を上げるし、言葉は汚いし、重箱の隅を突つくような細かい事を気にするし、と嫌う要素は私の母親並に枚挙に暇がない。とまあ、そんなどうしようもない先輩のだが、久しぶりに見ると妙に懐かしい気分になってしまふのも否めない訳で。

私はまじまじと彼の顔を凝視してしまっていた。

自分を見上げて剥製のように凍り付いている埃まみれの白猫を見下ろしていた奥田先輩は、表情を変えぬまま、しゃがみ込んで私の方に手を伸ばした。恐る恐る、と言った風に、広げた手が私の頭の方に近付いてきていた。

「ふし触ゃああぁっ……」

「うお！」

私は大きく後ろに飛び退いた。突然の事に、奥田先輩も驚いて一歩後ろに下がる。

私は、そのまま奥田先輩に背を向ける。家の石塀をひとつ飛びで登り、その上を全力で駆けてその場から逃げだした。奥田先輩が何をしようとしていたのか、分からない訳では無い。でも、私は彼の善意の手を振り払ってしまった。

怖かったんだ。人の感触を思い出すのが怖かった。また裏切られる光景が頭に浮かび上がってしまったんだ。

ごめんなさい。ごめんなさい、奥田先輩。

何だってこんな時に昔の顔見知りになんか会わなきゃならないんだ、馬鹿野郎。泣きたい気分になった。既に奥田家は、私の遙か後方で、他の住宅に囲まれて見えなくなっている。恐らく私があの家をねぐらにする事は、二度とない。

私が彼に救われた理由

それから更に数日経った頃。

ねぐらとして丁度良い場所を探し求めて歩く私の足元は、すっかり雪に埋もれてしまっている。冬晴れ眩しかったあの日は夢だったのか、と思ってしまう程ここ最近の天気は荒れに荒れている。冬だと言つのに台風でもやってきたのかと思う程の暴風と豪雪が、寢床さえ用意していない私に容赦なく襲いかかった。

どこに行つても屋内には入れない私は、この身一つでその吹雪の日々をやり過ごさねばならなかった。今日は幸いにも雪も風もない為、私は散歩と狩りを兼ねて、人気の薄い昼間の町中を歩いている。碌に身動きも取れなかつたので、食う物も食えなかつた。水分だけは雪を食えばで補充出来たのだが、身体が冷える事を考えると一長一短だ。空腹も辛い、何よりも足元に積もった雪が辛い。足先が埋もれる位の積雪だが、足の裏が霜焼ける程冷たいし、フットワークも重くなる。このままでは狩りをするのもままならない。

一体どうやって食事をしようか、と考える私の脳裏によぎったのは、ツナとカニかまの和え物であった。あれが食べたい。腹がはち切れる程食べたい。そしてその後飽きる程眠りにつきたい。

食べ物に対する欲求が沸き上がったのは久しぶりだったと思う。

それもこれも、あんな物を縁側の上で見せびらかしていた奥田家が悪いのだ。

「……まだ、やってるかな」

毎日のように縁側に置かれていた皿。私があの家から逃げ出して、まだそれ程経っていない。

もしかしたら、まだ私の為に皿が置かれているかもしれない。そんな事を考えてしまうと、もう止まらない。ちよつと見に行くだけ、

期待しちやだめだぞ、等と自分に言い訳をしながらも、私はついつい奥田家の庭に足を運んでしまった。

高い石塀の上で、私は庭の桜の木の影に隠れながら恐る恐る奥田先輩と鉢合わせしてしまった庭を覗き込んだ。剥き出しの地面、枯れた木々。

そして縁側の上にある、平たい皿。

その皿の上には鍋に入れるネギのように斜め切りされた魚肉ソーセージがあった。

私が食べないのは別にシーチキンやカニかまが嫌いと言う訳では無かったんだが、恐らく勘違いしていたのだろう。そんな事はどうでもいい。見た所、人の気配は薄い。時折家の奥の方から声が聞こえてくるが、縁側周辺には誰も居ない。

私は降り立った。そして、一目散に縁側に飛び乗って、皿を覗き込む。ソーセージは四切れ。最初の頃に比べれば量が格段に少ない。私は慎重に皿に歩み寄り、覗き込む。

「……食べるべきか、否か」

腹は減っている。でも、中々勇気が出ない。食べたいけど……。

「……うううううううう」

空腹の限界が近かった私は首を俯けて、奥田先輩の顔を思い浮かべた。

あの人は怖い。毒殺の可能性も否定出来ない位陰気な人間だ。食べてもいいのか、どうなのか。これ程悩んだのは、正直産まれて初めてかもしれない。

……悩んだ結果、私は食べない事を選んだ。しかし目線だけは未練がましく皿の上のピンクの魚肉ソーセージを眺めていた。

長い事、真剣に悩んでいたからか、私は気がつかなかった。私の

背後に迫っていた巨大な影の存在に。

「よっと」

身体が浮いた。ちょっと待て、なんでだ。いきなり私の身体にヘリウムガスでも封入されたと言うのか。なんて冗談を吐いている場合じゃない。なんで浮いてるんだ私。脇の下に突っ込まれた手は何だ、誰の手だ。

これはまさか。

「……軽いな、この猫」

後ろから聞こえてきた男のつまらなそうな声は、奥田先輩のものだ。私は奥田先輩に抱え上げられていた。それに気づいたのは、身体が浮いて五秒後くらいだ。

「ふみやあああああー！」

「おい、こら、暴れんなコイツ！」

やめて、怖い。やだ、もう人はやだ。触らないで、お願いだから、こっちにこないで。

なんて事を喚いてみても、人間相手には通じない。無理矢理身を擦って奥田先輩の手から離れようとするが、奥田先輩も私を落とさないようにしているのか、手を離そうとしない。そんな無差別級もビックリな体重差で争っていた私達の相撲は、唐突に終わりを告げた。

暴れていた私の爪が、偶然にも奥田先輩の腕を引っ掻いたのだ。

「っつて！」

奥田先輩が私から手を離した。

私は縁側に着地し、飛び退いて奥田先輩から距離を取る。

奥田先輩は右腕を押さえてうずくまっている。彼が着ていたセーターの袖を捲ると、長い引つ掻き傷から血が滲んでいるのが見えた。

「つてて……」

「じゃ……」

一旦手を離れてしまつと途端に冷静さが息を吹き返した。

恩知らずなものだ。餌を貰いかけておいて、その人に怪我を負わせるなんて。

「みゃうつうう……」

「頭下げてんのか？ 変な猫だな」

お辞儀をする私に眉を顰める奥田先輩は、それ以上近寄ってくる事はなく、ジッと私の眼を見つめている。

やがて、しゃがんだままの姿勢で左手を上にした状態で前に差し出して、そのまま動きを止める。どことなく緊張した面持ちだが、それは私も対して変わらない。

左手の人差し指がピョコピョコと上下に動いている。猫じゃらしの代わりのつもりなのだろうか。

私は恐る恐るだが、奥田先輩の方に歩み始めていた。

なんでだろう。あれだけ人間が怖かったのに、私の方を構ってくれているこの光景を目の当たりにすると、自然と歩が進んでいた。それでも一歩進むのに五分くらいかかったが、奥田先輩は粘り強く指を猫じゃらしに見立てて、私の興味を惹こうとしている。

やがて私は、奥田先輩の手元に辿り着く。そして、差し出されている奥田先輩の左手に、震える左前足を軽く乗せてみた。

お手、である。

この私の行動には、固い顔をしている奥田先輩も破顔した。歯を見せる彼の笑顔は邪悪な気配さえ漂っていたのだが、しかもっ面よりは余程良い表情だった。

「ははは、犬じゃねえぞ、おい。お前、本当に変な猫だな」

笑いながら奥田先輩は縁側に胡座を搔いて、私の顎を撫で始めた。指の動きは固く、おっかなびっくりという様子だったが、それは撫でられる私も同じだ。身をガツチガチに強張らせ、猫の剥製みたいに硬直して、先輩の指先の冷たい感触を目を瞑って感じ取っていた。

久しぶりに撫でられている私は、カチコチに凍り付いていた心が一撫で毎に溶けていくのを実感していた。端的に言って、私は数ヶ月ぶりに満足感を得ていたのだ。

お互いがお互いを探り合うような、ぎこちない触れ合いは、たったの数秒間で唐突に終わりを告げた。

「和也ー！ ちょっとー！」

「げ、やっべ」

家の奥から聞こえてきた女の大きな声は、恐らく彼の母親だろう。奥田先輩はその声を聞いて、顔色を変えた。辺りを落ち着きなく見回して文字通りあたふたとしている。

もしかして、猫に餌をやっているのがバレたらマズいとか、そう言う事なのだろうか。私が惚けていると、奥田先輩は強引に私を捕まえて、セーターを捲りながら抱え込み、あっという間に私をセーターの中に押し込んだ。

いきなりの事に発狂して暴れそうな衝動に駆られたが、先程の奥田先輩の腕の傷を思い出して、必死に押さえ込む。身体を丸めて大人しく抱えられていると、先程の女性の声が今度は随分近くから聞

こえてきた。

「和也ー？ あ、ここにいたのね」

「な、なんだお袋。呼んだか？」

「うん。今日の夕飯の買い物頼みたいんだけど……って、どうしたの？」

「こっち向きなさいよ」

「買いもんだな。あとで行ってくる。ちょっと待ってる」

「ねえ、ちよつと」

奥田先輩は母親との会話を早々に切って、バタバタと駆け出した。やがて襖が開く音と閉まる音が聞こえ、私はようやくセーターの中から放り出された。

転がり出た先は六畳くらいの畳敷きの部屋だった。部屋の隅は、教科書の物置と化している勉強机が鎮座しており、本棚には漫画や雑誌等が乱雑に並んでいた。大きめの箆笥が部屋のスペースを大きく占領していて、部屋は四人程がギリギリ座れる位の広さしかなかった。

普通の男子高校生の部屋、と言った感じが。他の男子高校生の部屋は知らないけど。

部屋の中は寒かったが、奥田先輩が机脇のガスファンヒーターのスイッチを入れてくれた。チープな電子音の後、ファンヒーターに火がともる。

「……ふう、あつぶねえ。

って言うか、咄嗟に連れ込んじゃったぜ」

奥田先輩は眩きながら、勉強机の引き出しから魚肉ソーセージを一本取り出し、端を千切ってビニールを剥がした。バナナのように剥いたそのソーセージを私の方に突き出して、上下に振っている。

「ほれ、ほれ、食うか？」

食べさせようとしているのだろうか。

私は魚肉ソーセージを振りかざす奥田先輩の顔色を窺った。

彼は、私が今まで見た事もない程穏やかであったのだが、口端が若干引き攣っていた。

まるで私を安心させる為に無理矢理作ったような優しい笑顔だった。また少しだけ、心が溶けた。

……大丈夫。流石に、毒を仕込む暇はなかった。食べても、死んだりはない筈だ。

そう自分に言い聞かせた私は、なけなしの勇気を振り絞って、差し出された魚肉ソーセージの先の方を少し齧り、咀嚼する。

ピンク色の魚肉の塊が、私の口の中でバラバラに解れる。その一粒一粒が私の久しく眠っていた味覚神経を呼び起こした。美味しい。魚肉ソーセージがこれ程美味しい物だとは思わなかった。塩っ気が猫の舌には少し強かったが、それすらも一種の趣として楽しめる程、私は幸せな気分であった。多分端から見ればガツガツなんて擬音が聞こえてくるだろう。それ程私は夢中になって食べた。美味し過ぎる。あまりにも美味し過ぎる。止まる気配がない。

無我夢中で喰らう私を見て、奥田先輩は静かにソーセージから手を離れた。

そして思い出したように右手を押さえ、立ち上がり、箆笥の上にある救急箱を手にとった。

「……案外浅えか？」

上のセーターを脱いで、傷ついた腕に消毒液を塗る彼の背中を見ていると、私は妙な気分になった。

この人は血も涙もない様な冷血漢だと思っていたのだが、慎重に

傷を処置している彼はどう見ても穏やかな人間である。

彼は、どうして私の事を助けてくれたのだろう。当然のように思い浮かんでくる疑問である。質問出来ない自分がもどかしい。

「うしろみにゃああ」

「ん？ ……もう食ったのか」

既に魚肉ソーセージは丸々一本私の腹の中に収まっている。

私は感謝を示すように、行儀良く座って頭を下げた。奥田先輩は私の拳動に釣られて、何故かお辞儀を返す。

笑ってしまいそうだった。この人も、結構可愛い一面を持っているらしい。

張りつめていた警戒心もいつの間にか大分薄れてしまったようで、私は頭を下げている奥田先輩の頭に右の前足に乗せて、撫でていた。先輩はすぐに私の足をどけて、訝しげな目で見下ろしてくる。

「……変な奴だな」

「みゃふ」

先輩はゆっくりと私の方に手を伸ばし、そして頭から背中にかけて撫で付ける。

彼も緊張して力んでいるせいか、身体を押さえつけられているように少し重かったし、手もヒンヤリ冷たかったが、悪い気はしなかった。一撫でするたびに彼の手つきは柔らかくなっていき、私は心地よさに再び目を瞑った。

「へへへ……」

奥田先輩の邪悪な笑い声が聞こえてくる。

多分悪の総統のような微笑を浮かべているだろうから、私はそれ

を見ないように目を瞑ったまま、大人しく座っていた。

部屋の温かさと満腹のお陰か、私は段々とウトウトし始めていた。油断すれば、あっという間に意識が持っていかれそうな位眠たかった。

そうか、これは……私は、安心していいんだ。

周りに何も敵がない、目覚めの保証されている眠りが私を柔らかく抱き締めているんだ。

「さて、そろそろ買い物行かねえと……」

そう言いつつも奥田先輩の手は離れようとしないう。

別に逃げたりしないから気にしないで行けば良いのに、と思いつつ、私は早々に意識を手放す事にした。奥田先輩のぎこちない優しさは、私が完全に寝付く最後の瞬間までずっと私の背中を包み込んでくれていた。

私が猫になれなかった理由

そんな事があって二日程経過した。

どうやら私は、奥田先輩以外の奥田家の人々からは歓迎されていないらしい。

廊下を歩き回っていた私の首根っこを捕まえて自室に飛び込んだ奥田先輩は、焦った顔で私に言い聞かせる。

「あんまり出るなよなあ、野良猫拾っただなんてお袋にバレたらぶつ殺されちまう」

私が良く見ていたあの険しい表情をする奥田先輩。猫に注意した所で普通は意味がないのだが、生憎私は人の言葉を解する事ができる。

奥田先輩も何となく私の賢さに気がついていようで、言い聞かせれば分かってくると本気で信じていようだ。

しかし、トイレやら運動不足解消の散歩やらと、やはりどうしても外に行かねばならない。残念だが、奥田先輩の我が儘はあまり聞けそうになかった。

奥田先輩はやはりと言うか何とというか、猫飼いとしても乱暴な性格を露にしていた。本格的に飼うつもりはないのだから、猫用トイレも爪磨ぎ器も猫じゃらしも持っていない。餌に関してはキャットフードを買う事を覚えたようで、お徳用の安いキャットフードを大量に押し入れに隠し入れている。風呂には一度だけ入れられた。奥田先輩のぎこちない手つきに全身をまさぐられたのを思い出すと、体温が上がってしまう。これは単なる羞恥であって、特別な意味はない。絶対に無い。

……さて、妙に必死な否定は取りあえず置いておいて、だ。結論から言えば、私は今までの劣悪な生活環境よりは遥かに良い暮らし

をしている。食事も寝床も完全に確保できているし、この部屋に居る限り身の安全も保障されている。

私は今ようやく穏やかで幸せな日々を手に入れた。私を可愛がってくれている人も居ると言う事実だけで、私の心は至上の喜びに満ちていた。もうこのまま奥田家の飼い猫として一生を終えても良いかもしれない。寝ているのか起きているのかあやふやなまどろみの中で、私はそんな事さえ考えていた。

そんなぬるま湯に浸かり切った日々を送っていた、ある日の事。

その日は土曜日で、学校も部活も休みらしい奥田先輩は、午後になつてようやく眼を覚ましたと思つたら、そのまますぐにいそいそと服を着替えはじめた。ジャンパーまで着込んだ所を見ると、何処かに出掛けるのだろうか。私はジッと彼を見上げていると、彼は私を一瞥した。

その時の彼の顔はいつもどおりの剣呑な表情をしていたが、何だか少し寂しそうに見えたのは、私の眼の錯覚か。

部屋を後にした彼と母親の会話が、ドア越しに聞こえてくる。

「……あら、アンタ何処に……の？」

「病院」

「また……ちゃんのお見舞い？」

「……………」

会話は切れ切れにしか聞こえなかったが、要点を抑えると、どうやら彼は誰かの見舞いに行くらしい。

ほう。あの諸悪の根源の塊のような男でも、誰かを見舞ったりするのか。……って言うのは冗談。実は、痩せた野良猫に餌を与えてそのままうつかり飼い馴らしてしまうくらいに優しい人だって事を、私は既に知っている。

机の上に飛び乗り、そのまま窓際に飛び移って、家を出て道を歩いていく奥田先輩を見送る。

家を出た彼の顔色はあまり宜しくない。俯き加減はいつもの事だが、背中から黒い瘴気が立ち上っているようにも見える。

あの景気の悪い顔で見舞いに行けば、見舞われた側も迷惑なんじゃないか？

私は若干失礼な事を考えながらも、彼が出掛けた先が気がかりになった。猫は好奇心で動く生き物だ。今の私は例外なく猫であり、すっかり生活も安定した今では物事を考える余裕もできてきた。

私は前足を上げて、鍵を解錠し、窓を開けた。

そして窓から飛び降りて石塀をひとつ飛びで超え、私は先輩の背中を見やる。

「^{先輩}みやふうつ？」

「あ？ ……つたく、この猫は……」

先輩は私に一度振り返ったが、すぐに目を逸らして再び歩き始める。

私は彼の横について、そのまま歩調を合わせて少し早めに歩く。始めは奥田先輩も迷惑そうに顔を顰めていたが、すぐに諦めたようで、ついてくる私に何かアクションを起こす事はなかった。

*

見舞いと言えば病院である。病院と言えば清潔である。衛生面に關しては飛行機の税関よりも厳しいと言って差し支えないだろう。

そんな場所に埃の塊のような野良猫であるこの私が入れるかどうか、答えを言う必要が果たしてあるだろうか。いや、ない。反語法

を使つてでも絶対的に否定されるべき事実だ。

私は病院の裏手にある広い公園のベンチで、空に向かってそびえ立つ白い巨塔を見上げながら、一人寂しく惚けながら飼い主を待つ羽目となつてしまった。

奥田先輩が病院に入つてから、既に一時間くらい経っているが、彼は中々出てこない。

別に待っている必要もないのだが、ここまで着いてきてしまった以上、待っているのが飼い主への忠義というものだろう。それだとなんか犬っぽいけど。

私の周りでは小学生くらいの男の子達がサッカーボールをサッカーの体裁すら取り繕えずに、無邪気にボールを蹴り合っている。流石風の子、威勢がいい。

「あ、猫だ！」

一人が私の存在に気づき、指を指して声を上げる。周りの子供達も私の方を見て、楽しげにはしゃぎ出した。

それだけだったら別に良かったのが、一体どう言つ神経をしているのやら、子供達は足元のボールを私の方に蹴り飛ばしてきやがった。

「危なっにやっ！」

「おお、避けた。かつけー」

「すっげー、猫なのに」

歓声上がる。全員が全員、感心したように笑つていやがる。

「ふざけんじゃねえにやあふううううう！」

反駁してみても所詮猫語だ。人間様には通じますまい。

だから私は代わりにそのボールを後ろの両脚で全力でガキ共に蹴

り返してやった。

足元に転がってきたボールを見て、ガキ共はますます感激したように、再び私にボールを蹴り飛ばしてくる。

意味が分からん。なんなんですか、コイツら。睨がなってない。親の顔見せてみるクソガキが。動物虐待してんじゃねえ。

悪態がポップコーン製造機みたいにポンポン飛び出してくるが、猫の声帯を通すと全て鳴き声に変換されてしまう。

それでも烈火の如く怒り狂う私の憤怒は伝わったらしく、子供達は一瞬私を見て怯んだ。

よろしい、今からお前達の可愛らしい顔を一回ずつ引つ掻いて回るからそこに立っている。冷静になって考えると結構鬼畜な事を考える私がベンチから降り立つと、子供達はまるで蜘蛛の子を散らすように逃げ去ってしまった。

「あ、ちょっと……」

みんな、私から逃げていく。

その背中を見ると、心に小さな待ち針でも突き立てられたような気分になった。

流石、嫌われ者の私である。出会って数秒の見知らぬ小学生にさえ嫌われるとはね。

なんだか急に怒りが静まってしまった私は、ベンチの上に転がっていたサッカーボールを蹴り飛ばして、ベンチの上に寝転がった。

「なにやってんだろ、私」

あんな子供達にムキになって、馬鹿みたいじゃないか。っていうか、馬鹿だ。

段々と頭が悪くなっているのが自分でも分かる気がする。日に日に考えが短絡的になっていっているのだ。脳味噌が猫だからか、なんて事

も考えてしまったが、何の事はない。私は苛立っているのだ。
自分の言葉を吐く事も許されない現状に満足出来なくなってきた。
いた。

今だって、あの子供達に伝えられたのは私の怒りだけ。本当は反省して欲しかったし、謝って欲しかった。でも、子供達は私の威嚇に脅えて逃げてしまった。

私がしたい事はあの子供達を怖がらせることじゃないのに。

あの子供達はもう、町で出歩く私のような野良猫を見ても、微笑む事はないかもしれない。そう考えると、人間が如何に対話と言う手段で自分を伝えているかがしみじみと分かる。とはいえ、今更私がそんな事を思っても、どうせ人間には戻れないのだけれど。

「……まだいたのか」

奥田先輩の声が聞こえてきた。

顔を上げると、落ち込んだ表情をしている死神のような男が立っていた。奥田先輩は私の隣に腰掛け、そのまま天を仰いで、呆然としていた。

一体どうしたのか。見舞い終わりなら「ああ、あいつ結構元気だったなあ」的な清々しい笑顔を浮かべるべきじゃないのだろうか。訳を聞きたいが、私の身体では無理だ。

どうするべきか、と悩んでいると、思わぬ場所から声がかかってきた。

「あ、あの……」

私と奥田先輩の前に、先程私に向けてボールを蹴り飛ばした男の子が立っていた。服の裾を握りしめて、眼に零れそうな涙を一杯浮かべて、小刻みに震えている。

奥田先輩は怪訝そうに眉を顰める。怖い顔が更に怖くなるが、男

の子は怯まずに頭を下げた。

「さつき、その猫ちゃんを虐めました。ごめんなさい」

「……………」

「じゃあん」

奥田先輩は訳が分からない、と言いたげに一度私の方を見やるが、私は一鳴きするのが精一杯だ。飼い主の登場に、流石に罪悪感が刺激されたのだろう。素直な子供で私も嬉しい。

飼い主より私に謝ってほしいが、そこまで要求するのは高望みし過ぎだ。どうでもいいし。

首を傾げたままの奥田先輩だったが、やがて一つ嘆息した後に、男の子を睨みつけた。

「おい、坊主……………」

「は、はい！」

「もういい……………どっか行け」

奥田先輩はそう言ったきり、顔を俯ける。

今度は男の子の方が怪訝な顔をする番であった。急に声を潜ませた奥田先輩を眺めていた男の子は、少し慌てたようにたたらを踏む。

「あ、あの、お兄さん」

「いいから、さっさとどっか行け」

男の子は、俯く奥田先輩の後頭部を見ながらも、ボールを拾って退散していった。

取り残されたのは、私と奥田先輩。

奥田先輩は、悔しそうに拳を握って震えていた。彼の手に、私は自分の前足を重ねる。

「……慰めてんのか？」

「にゃ」

「変な猫だな、お前って奴は」

奥田先輩は溜め息混じりに私を撫でる。

結局、何も分からない。彼が何を思っているのか、聞き出す事が出来ない。

酷くもどかしかった。聞いて答えてくれるかどうかは分からないが、聞く事すら許されない私は、なんと情けないんだ。猫の身として甘んじている自分が情けない。そんな考えをするのは久しぶりだった。

どうにか出来ないだろうか。私は必死に頭を捻る。

……そして、奇跡的な事が起こった。

「なんか、お前……本当に言葉が分かるみたいだなあ」

しみじみと、奥田先輩がそんな事を言う。

私は、首を縦に振ってみせた。何度も、何度も。感情を伝えるために。奥田先輩はそれを見て、驚く素振りも見せずに私と正面から見つめ合う。

「……珍獣、ってか」

今度は首を横に振る。まさしく、人間の挙動をする私に、奥田先輩は少し口を噤んだ後、ポツポツと話し始めた。誰かに言いたくなつたのだろう。でも、彼には彼の被っている猫がある。陰気な皮の奥に、優しさを押し込んでいる。人には言えないから、猫に言う。きくと、彼は自分でも無意味だと分かっている。でも、言わなければ耐え切れない。だからこんな不気味な飼い猫に話してくれたんだ

ろう。私としては、久しぶりに対話を出来たような気がして、嬉しかった。

「俺の部活の後輩だよ……もうかれこれ三ヶ月くらい前に事故に遭った奴がいてな」

部活の後輩……三ヶ月前、事故……？　　なんだか、凄く身近にそんな奴がいたような……。

「意識不明の重体で……結局今日もずっと眠ったまんまでよ……。碌に外傷もないんだ。ただ、意識だけがなくて、寝たきりの状態だよ……。」

本当に、ただ眠ってるだけみてえなんだよな」

どう考えても私ですね。これは。二ヶ月前に事故って眠りっぱなしって事になっていろいろらしいし。

……って言うか、ちよつと待てよ？　　つまり、奥田先輩って、私の見舞いに来てたの？　　嘘でしょ？　　だってあんなに女子にも私にも冷たかったあの人が。いや、嘘……でしょ？

「ったく……この俺が何回見舞いに行つたと思つてやがんだ」

口振りから考えると、既に何度も見舞いにきてくれているらしいうん。信じられないけど、本当だと言う事にしておこう。人は見かけによらない訳だし。この人こう見えて野良猫とか拾っちゃう人だし。

なんだか照れる。そうか、この人、私の為にこんな寒い中を……と思うと、彼の心の中にある私への感情も何となく予想がついてしまい、どうしようもなく照れてしまう。そして、それ程私の事を考えてくれているのだと思うと、感激のあまり涙がこぼれそうになる。

そして永遠に目覚める事ない私は、罪悪感のあまり、抑え切れなかつた涙が溢れ出した。

「息は細いし、部活で少し焼けてた肌も今じゃ雪みてえに真っ白になっちまった。

メシも食えねえせいか、元々結構痩せてたんだけど、今じゃガリガリだよ。

……なんか、見てるのが辛いぜ」

「^{先輩}みやああうう……」

「代わってやりてえ」

奥田先輩は呟くように言った。

「なんでアイツなんだよ。なんで俺じゃないんだよ。

アイツが何をしたってんだよ。確かに生意気な奴だし、口答えもするけどよお。

でも……クソつたね。畜生、なんだってんだよ」

「……」
「なんで……本当に、なんでアイツがこんな目に……！」

奥田先輩は顔を俯けてしまった。

やがて、ベンチにポツリポツリと、水滴が落下し出す。

奥田先輩が泣いていた。長い髪の毛の向こう側で、私の為に、彼は歯を食いしばりながら泣いてくれているのだ。

始めに来たのは、驚愕。

私には……と言うか、誰に対しても冷たく当たる奥田先輩が、まさか他人の事で泣き出すなんて、私には到底信じられなかった。

次にやってきたのは、苦痛。

こうして泣いている奥田先輩を慰める事さえ碌に出来ない。クヨクヨするなと叱咤する事さえも出来やしない。私は私としてちゃん

と、ここに生きている。だから、泣かないで。心配しないで。

伝えたい。私の存在を、私の気持ちを伝えたい。

そんな簡単な事も出来ないのか、私は。私の為に苦しんでいる人が居ると言うのに、私はこんな所で奥田先輩の涙を見つめて、何をしているんだ。

もどかしさ。そして、無力感。今すぐに死んでしまいたい、と考えるけど、奥田先輩の事を思うと、そんな自分さえぶっ飛ばしたくなってくる。

死んだように干涸びていた心に、雨が降っていた。

拾ってくれてありがとう。ご飯をくれてありがとう。撫でてくれてありがとう。暖めてくれてありがとう。お見舞いにきてくれてありがとう。悲しんでくれてありがとう。泣いてくれてありがとう。

こんな私に、希望をくれてありがとう。

とても、嬉しかった。そして、悲しかった。

人間の私の事を大事に思ってくれている人が、まだここに居た。でも、その人は悲しんでいる。私が不甲斐ないばかりに。

畜生、そんなの反則だ。ずるいじゃないか。私の事なのに、一人で勝手に泣き始めやがって。

そんな事されたら、心の中に押し殺してた物が、膨らみ始めたじゃないか。このまま半分野良猫、半分飼い猫として生きる事に甘んじる事が、我慢出来なくなっただじゃないか。

「先輩にゃあ……………」

「みゃおおおおおおおお！」

「あ、おい！」

奥田先輩の制止を振り切って、気がつけば私はベンチから飛び降りて、走り出していた。

宛はあるような、ないような。曖昧な確信という、矛盾した物を

胸に抱えて、私は一目散に目的の場所に向かう。

分らない。全て、所詮叶わない夢かもしれない。でも、このまま我慢するのは絶対に耐えられない。耐えちゃいけない。

今の燃立つようなこの決意の火は消えないし、消せないし、消させはしない。空が薄暗がりになる町中を、私は四肢が千切れんばかりの速度で駆け抜けていった。

私が人になりたかった理由

私は石段を駆け上がった先の花崗岩の鳥居を潜って、そこでようやく足を止めた。

息切れしていたが、顔は下に向けない。目を辺りに走らせる。

ここは、私が猫として目覚めた最初の場所。町外れの山の中腹にある小さな祠である。

黒猫に虐められ、黒猫に助けられ、黒猫と別れた、嫌な思い出も良い思い出も無理矢理押し込まれた、小さな山中の静謐なる空間。祠の脇にある池の周りに生い茂っていた草はすっかり枯れていて、崩れかけの祠の屋根にはまだ僅かに雪が残っていた。

私はここで、黒猫を探していた。彼と会えるかどうか、なんてちよつと考えれば分かる事だ。でも、どうしても私は黒猫に会わなければならぬ。もし会えるとしたら、と考えたら、この場所しかなかったのだ。

「よお、人間様」

ふと、頭上から声が聞こえてきた。太い男のような声。聞き違えたりしない。

なんで今、ここにいるんだろう。どうしてこう都合がいいんだろう。そんな言葉は今ではティッシュにくるんでゴミ箱に投げつけてしまえばいい。

私は振り返って、鳥居の上に目を向けた。

「随分薄汚れたな、お前。野良らしくなってきたじゃねえか」

余裕の笑みを顔に貼付けた、尾先が二股に裂けた化け猫が鳥居の上でせせら笑っている。

態度がデカいのは相変わらず。挑発的な荒っぽい口調も、懐かしささえ覚えてしまう。私を化け猫に変えた黒猫さんが、私の方を蔑むような目つきで見つめていた。

「……誰が野良猫だ」

「……ああ？ 聞こえねえよ」

「聞こえないんなら降りてきなさい！ 死ぬ程聞かせてやるわよ！」

私の怒鳴り声を聞いて、黒猫はますます口を広げてニヤつく。歯の間で、涎が糸を引いていた。実に妖怪染みた恐ろしい表情だが、私は少しも臆さなかった。

黒猫は素直に鳥居から降り立って、私の方に近寄ってくる。

「まさか、お前がここにまた来るとはねえ」

「……私だって、アンタが本当にここに居るとは思わなかったわよ」

「ま、そんなのはどうでもいいじゃねえか。ここに二匹とも居るってのが、事実だ」

「二匹じゃない。一人と、一匹よ」

私は飽くまでも強気な態度を崩さないように黒猫と相對する。

黒猫は馬鹿にしたように吹き出して、すぐに私に牙を剥いて見せた。前肢を屈めて、尾を振って挑発する。

「おやおや、どう言う風の吹き回しなんだい？」

子作りまでねだってきた色情狂の白猫ちゃん。

まさかたあ思うが、今更人間に戻りてえ、だなんて言うつもりじゃねえよなあ？」

「今更人間に戻りたい、なんて言うつもり」

「……へっ」

黒猫の笑顔は揺るがない。私の返答なんて、私がここに現れた時点で……いや、それよりも前から知っているだろう。だからこそ私は再会出来た。私が全身の毛を逆立てているのを見て、黒猫は逆に落ち着き払ったように溜め息を吐いてみせる。

「やれやれ、前にも言ったけど、俺あテメエを人間に戻すつもりなんて」

「そんなのを聞く必要、あるの？」

会話のおさらいなんて時間の無駄でしかない。

黒猫に何を言われたとしても、私も自分の意志をこれ以上擦じ曲げるつもりはなかった。

湾曲し過ぎて見るに耐えない私の心が、果てしない遠回りの果てに、やっと一つだけ答えを見つけた事が出来たのだ。これを投げ出せだなんて、それこそ今更な話である。

相変わらず私の心の底まで見透かすような黒猫の目が、一瞬だけ細くなった。

「最初の約束通りだ。俺に喧嘩で勝てれば、テメエを人間に戻してやる。」

男に二言はねえ。いつでもかかってきな」

私も黒猫と同じく、牙を剥く。

黒猫は強い。かつて私が襲いかかっても、全てを軽くないなされた。私とは言えば、弱い猫だ。狩りの経験も乏しく、最近是人に飼われていたせいで、運動神経も鈍っている。

喧嘩の為に修練を積んで来たわけじゃないし、猫を陥れる策略を持っていくわけでもない。

竹槍を持った一揆兵が鉄の甲冑に突進をかけるような、無謀な戦いかもしれない。

でも、それでも私は。

「ふしゃああああ！」

飛び出た爪を振りかざして、私は黒猫に飛びかかった。

黒猫は一瞬だけ驚いたように身体を強張らせるが、すぐに身体を
翻し、私の飛びかかりを後ろ足で弾き飛ばした。

体勢を崩された私だったが、宙返りして着地、一呼吸の間もなく、
すぐさま特攻を再開する。

「へへっ、良い気合いじゃねえか」

黒猫は実に楽しそうだ。私を虐めていたときなんかとは、比べ物
にならない位生き生きと、澁刺としていた。

顔だけは笑ったまま、黒猫が自分から私の方に仕掛けてくる。私
と同じように頭を突き出して走り出し、私と正面から衝突をする。

まるで、ガツン、なんて音が聞こえてくるような気がする程の衝撃
が私を襲った。

「……………って！」

「う……………」

私の目の中で星が舞い踊っている。乗り物に酔ったような気持ち
の悪さと血が流れる度に響いてくる鈍痛が同時に襲ってくる。

足元がおぼつかない私の視界の端に、何故か二本足で盆踊りでも
踊っているような千鳥足の黒猫の姿が映った。

当然だ。私が喰らった痛みと同じだけの痛みを、黒猫だって喰ら
っている。何だっかわざわざ自分から自爆してやがるんだ。いつも
通り、ひらりひらりと受け流しながら相手を制する合気道みたいな
体術を使えばいいじゃないか。

馬鹿か。いや、間違いない。コイツ馬鹿だ。

「……ふ、ふふへへへへ」

黒猫が怪しく笑う。焦点の合っていなかった縦長の瞳が大きく膨れ上がった。

「どうしたんだよ……おい、もっと来いよオラあ」
「い、言われなくても……」

まだ足元は怪しいけど、私は必死で身体を直立させる。黒猫も同じようにして、私に正対する。

一瞬だけ睨み合い、再び私達は全力で駆け出した。結果はもう言わなくても分かるだろう。

二度目の交通事故だ。

「く、お、お……」

「あ、ふ、う……」

黒猫はひっくり返り、額を前足で抑えて、後ろ足と尻尾を祠の参道の石畳に叩き付けている。

私も黒猫と対して変わらない。頭に響く鐘の音が二重になった。綺麗に裏拍子を取ってきやがる。目に映る黒猫までも二倍になるけど、私は何とか踏みとどまっていた。二の足で、もとい、四の足で立っていた。

「おお、いてえいてえ……」

黒猫は呑気な声で立ち上がる。ムカつく顔まで二倍に見える。鬱陶しいったららない。

苛立ち紛れに、私はまたしても駆け出した。ドンキホーテもビツクリな特攻精神をどうとるか勝手にして頂きたい。

三度目は三輪車同士の衝突のような、何とも弱々しいぶつかり合いだった。

もう痛いというよりも、辛い。このままぶつ倒れて気絶したらどれだけ楽なんだろう、と言う弱気な考えが頭を掠める。

しかし、駄目だ。ここで寝たら、黒猫はまた何処かに行ってしまうかもしれない。絶対にここで、今この場で、私は黒猫を負かせなければならぬ。

生まれたての子鹿よりも酷く震える四肢で無理矢理身体を起こそうとするが、上手くいかない。

一方の黒猫は、頭から血を垂れ流しながらも、堂々と立ち上がり、悠然と私を見下ろしている。

そして私の頭を踏みつけて、そのまま地面に擦り付けた。

砂が口の中に入ってくる。顔の毛が石畳に巻き込まれて、音を立てて千切れていく。

痛みをこらえる間もなく、黒猫は私の身体を蹴り飛ばした。二転三転と吹き飛んだ私を、黒猫は追いかけて、全体重をかけて踏みつぶす。

首に噛み付いて私を持ち上げ、濡れタオルのように振り回して、何度も地面に叩き付ける。

トドメに高々と放り投げられた私は、受け身を取る事も出来ずに地面に落下した。

「……………ふっ」

叫ぶ事も出来なかった。

全身がくまなく痛い。息が碌に出来ない。片目が見えない。音がちゃんと聞こえない。

骨が何本も折れている気がするけど、確認する勇気も、力も、暇

もない。黒猫はまだまだ、舌舐めずりしながら狂気染みた笑いを浮かべつつ、私を見下しながら歩み寄って来ているのだ。

「おい……もつと来いよ。何寝てんだよ、コラ。」

勢い余って殺しちまうかもしれないねえぞお？」

「う、ぐ………ううう」

黒猫の楽しそうな、威圧的な声。出会ったときと何も変わらない。あの時もこうやって打ちのめされて、自分の無力を思い知って。人間に戻りたい、って喚き散らしたっけ。今と、何が違うんだ。何も変わっていない。これじゃあ、何も変わらないじゃないか。それでいいのかよ。そんな訳ないだろ。

「私は………」

「ああ？」

「私は………！」

もはや足は立たなかった。体全体が痛みで危険信号を知らせてくる。意識を引き止めるのだけでも一苦労だった。

しかしそれでも私は、這いずり回って黒猫の方に向かう。

もう碌に前も見えない。首も据わらずに、視界があちこちに泳ぎ回る。

それでも黒猫のちょっと驚いた顔だけは常に視界の端に入っている。

私は今この瞬間、多分この世で最も無様だ。今の私は私が一番嫌いなケモノを体現するような、血と埃にまみれた動物だ。

そんなになってまで、私は何でこんなに必死になれたんだ。

「私は絶対に………」

人間に戻って何がしたいんだ。

「人間に戻らなきゃいけないの……」

猫にされて傷ついて、好きな人に裏切られて傷ついて、大切な親友に裏切られて傷ついて、親にまで見捨てられて、傷ついて。

「こんなところで……」

ボロボロになった心の中で、人間に戻る価値なんてないって、そう思ってた。この世界に私の居場所はないって思っていた。それでも、私はここに来たんじゃないか。

「這いつくばってる場合じゃない……」

こんな私に居場所をくれる人が居て。その人は、ずっと私を待っていて。だからどうしても人間に戻りたくなって。

「もう絶対に……」

死ぬ程辛い目を見て、死ぬより苦しい目に遭って、それでもやっぱり私は人間じゃなきゃ、我慢が出来なかつたんだ。

「決心を曲げたりしないって……」

どうしても、奥田先輩にありがとうって言いたいって。自分の気持ちを自分の口で伝えるんだって。

「誓ったんだ……」

たった一つだけのか細い、吹けば消える程儂い希望だ。人によつてはくだらない、なんて笑い飛ばすかもしれない。このままのうとうと生きた方が楽だ。人間に戻れば辛い生活が待っているのに、何で戻るのか。たった一つの感情なんか身を任せるなんて、馬鹿じゃないか？ 奥田先輩の事なんて、単なる便利な飼い主くらいに捉えればいいじゃないか。

「ありがとうって……」

ふざけんな。感謝するのは何よりも大切な事じゃないか。ありがとうって言葉を伝えられるのは、人間だけに許された特権なんだ。猫には出来ない、この世でもっとも尊い事だ。

「心配させてごめんって……」

あの人は、私を求めてくれていた。なら、私がこの感謝を示すのにすべき事は一つしかない。人に戻って、彼に感謝の心をぶつけることだけだ。

「もう大丈夫だから泣かないでって……」

目の前で黒猫が私を、惚けたような目で見ている。私に初めて見せる、間抜け面だった。

「言わなきゃいけないんだ……！」

私は、そのまま這うようにして、黒猫の腹に一発だけ猫パンチを見舞う。

これが精一杯だった。こんな、ノミ一匹さえ殺す事も出来ない、弱々しいパンチが、私の限界だというのか。

最後の力の一滴まで振り絞った私は、最早動く事さえ出来なかった。

駄目だった。私はやっぱり人間にはなれなかった。

ごめんなさい、奥田先輩。私、本当に最低な奴です。こんな私の事なんて、さつさと忘れて下さい。死んだら化けて出るんで、その時に謝らせてもらいます。

多分間もなく降ってくるだろう黒猫の最後の一撃を待つ私は、断首台に寝転ぶ死刑囚のような気分で目を瞑った。

「……………」

黒猫は何も言わないし、何もしない。私は、もう何も出来ない。

何故か、時間が静かに流れていた。冬の冷たい風が、私の傷に良く染みて無理矢理意識を覚醒させる。

なんだろう。黒猫はなんで何もしないんだろう。確認しようにも、もう身体は指一本動かない。

段々と繋ぎ止めていた意識も薄れかけてきていた。私が気絶するのを待ってくれているのだろうか。それならちよつとだけ優しいかもしれない。と、考えていた私の耳には、意外過ぎる言葉が飛び込んで来た。

「うわー、やーらーれーたー」

黒猫の、間抜けな棒読み声が頭上から響いてきた。

あまりにも咄嗟の事に意味は分からなかったが、黒猫はそのまま棒読み口調で続ける。

「まさかこの俺が喧嘩で負けるとはー」

何を言っているんだろう、この猫は。

勝敗は誰の目から見ても明らかじゃないか。どう見ても私の負けじゃないか。

そんな抗議の言葉を吐こうにも、私は口を開く事が出来ない。やっぱり、自分の言葉が吐けないのって、つまらないな。

「だから、お前を人間に戻してやらなきゃな。残念だけど、仕方ないよな」

黒猫のその言葉を契機に、ふいに身体の痛みが嘘のように抜けていく。

体全体を生温い風が包んでいるようだった。身体と空気の境目が薄れていき、全身から感覚が消え始める。

一体、何が起きているんだろう。黒猫は、なんであんな事を言っただんだろう。

なんで、私を人間に戻そうだなんて思ったんだろう。私は、回復した目を開いて、黒猫を見つめる。

黒い身体に、二つの月。黒猫は相変わらず、全くブレない佇まいで、私の方を見つめていた。

「気紛れだよ。

お前が人間に戻れなくて、可哀想だなんて思った。

人間に戻りたいって聞いて、ちよつと動揺させられちゃった。

お前を人間に戻してやつても良いかもなって思っっちゃったんだよ。

だから、人間に戻してやる。それだけだよ」

「……そう」

そうか。気紛れか。まあ、いいさ。猫は気紛れな生き物なんだ。

気紛れな、その場限りの感情に身を任せて、刹那的に生きているのが猫というものなんだ。

だったら、それでいい。如何にも、この黒猫らしい言い分じゃない

いか。

「元気でな、人間様」

「あのねえ、人間様って呼ぶの止めてよ」

そうだ。思えば今の所、誰も私の名前を呼んでない。

なんでだろ。みんな私に興味薄いのかな。……って、ネガティブに捉えちゃ駄目だ。これからが大変つてのは間違いないだし、もつと前向きに生きていかなきゃ。

「黒猫さん、お世話になったわ。ありがとう」

「止せよ気持ち悪い。礼なんて言われる筋合いはねえ」

「でも、ありがとう、だよ。やっぱり、うん。ありがとう」

ありがとうって思ったんだ。だから、ありがとうなんだ。何も間違っていない。

黒猫は、無表情のまま私の言葉を聞いて、やがて背を向けた。

「じゃあな……人間様。いや……人間。」

……結構楽しかったぜ」

「うん……また、会えたら良いね」

「……けっ！ ごめんだね！ また踏みつけられちゃ、かなわねえや！」

黒猫は吐き捨てるようにそう言った。声が震えているように感じるのは、私の気のせいだろう。黒猫は猫なんだし。

事の発端は黒猫の怨念だ。ここで爽やかに清々しくお別れと言うのは、黒猫の感情が許さないのだろう。だから、諦める事にする。

いよいよ、身体感覚が消え失せた。残っているのは、聴覚と視覚だけだ。

多分、これから人間に戻るんだろう。どんな過程を踏むのか全然分からないけど、多分分かってても意味ないし、興味もない。

「……………たく、お前のせいで俺まで人間みたいになっちまったじゃねえか」

「ん？ 今、何を？」

「……………んでもねえ！ もう猫を虐めたりすんなよな！」

黒猫の溜め息混じりのその言葉を最後に、私の意識は途切れた。

一番最後に黒猫が何の事を言っていたのか、良く分からなかったけど……………って、これはちよつと意地悪かも。

いずれにしろ、あの黒猫とはまた会える気がする。今日だって会えたんだ、いつでも、きつと会う事もあるだろうさ。

今度は、人間として。その時、ゆつくり聞いてやるう。

最後の最後で、ちよつと素直になれなかった黒猫さんの口からさ……………なんちゃってね。

私が現実に立ち向かう理由

人間に戻った私は、退院早々にして当然のように現実に直面する事になった。

まず最初に、両親がとつくに離婚していた事実。これは中々に重い。

親権は母親に譲られていたらしいのだが、当の母親は私が入院中に一度も見舞いに来ていない訳で。退院の時だけノコノコ顔を出す訳もなく、私は退院後一人で歩いて自宅に帰還して、母親と一悶着を繰り広げねばならなかった。

なんで見舞いに来なかった。なんでその事知ってるんだ。

なんで勝手に離婚した。これは二人の問題だ。

私の事はどうでもいいのか。別にそこまで言っていない。

本当の事を言え、私はどうでも良かったんだろ。ああそうだ、どうでも良い。

ふざけんな、それでも母親なのか。当たり前だ、腹を痛めて産んだ子だ。

そんな子供がどうでも良いのか。どうでも良いもんはどうでも良いんだ。

しまいにゃ泣くぞ馬鹿母め。泣いたら追い出さず馬鹿娘。

……つとまあ、食器類どころか植木鉢や電子レンジの投げ合いに始まり、最終的に包丁でのチャンバラなんてもので経て、ようやく私達親子の激し過ぎる喧嘩……と言うか最早殺し合いは、日暮れ頃にようやく沈静化した。

二人は怪我もなく、五体満足のまま肩で息をしていた。家中のものが散乱しているリビングの真ん中で、私達親子はグッタリと力無く床にへたり込んでいた。

流血沙汰にならなくて良かった、と思っているのは恐らく私だけではないだろう。こんな親子のシンクロは全然嬉しくないけど。

「ねえ、お母さん」

「……なによ」

カバモとい、馬鹿……じゃない、母が包丁でメッタ差しにされているソファに寝転がりながら、全身汗だくで懽然とした顔をしていた。

「私、お母さん嫌いだったと思ってた」

「……そう」

私は夕陽に照らされて赤く輝くガラス片を箒とチリトリで掃除しながら、言葉を続ける。流石に、照れくさくて、母親の方を見る事は出来なかった。

「でも、私、お母さん好きだった」

「……」

「なんにもしないお母さんだけど、いなくなるって思ったら、寂しかった」

「……私はそうでもないわ」

母は冷たく突き放す。声を震わせながら。

今、彼女はどんな顔をしているんだろう。怖くて振り返る事は出来ないけど、耳を塞ぐまでは頭は回らなかった。背中の方から、鼻水を啜る汚い音がやけに大きく聞こえて来た。

「……ごめんね。こんな、お母さんで」

母のその言葉だけで、私は少し安堵出来た気がした。私も、何故か泣きそうになったけど、その時は必死に掃除をする事で誤魔化した。

……この時、母なりに、私に対して思う所があったようだ。

母はなんとその後、多少だけど家事をするようになった。

気づいた時には冷蔵庫の中身が買い足されていたり、少しだけトイレが綺麗になってたり、部活から帰ってくると風呂が沸いていた。

色々と的外れで不器用な家事だけど、私は嬉しかった。

その上つい先日なんて、驚くべき事に近所のスーパーにパートに出ると言い出したのだ。

あまりにも大き過ぎる一歩。その日の晩は二人でファミレスで食事をしながら、父の話をした。私の快復の知らせを受けて、電話の向こうで泣いて喜んでいた、と母は語る。

でも、私は半信半疑だ。父から、死んだも同然の娘と罵られているんだから。

そんな父が、来週末に退院した私の様子を見に家に来るらしい。

果てさて、私はどんな顔をすればいいのやら。予定としては取っ組み合いの喧嘩だが、こればかりは相手の出方次第である。

……とは言え、言う事を聞くつもりもないけど。

一回くらい、娘の我が儘を聞いたって、父に罰が当たる事はないだろうし。

*

「……って、訳なんだけど」

「……ふーん」

クラスメイトの飯山典子は、私の家庭の事情を聞いて興味なさげに嘆息した。

今の典子は、私の記憶の中の今までの典子の中でも一番冷ややかな目であると断言していいだろう。ちなみに今は学校の昼休み。クラスメイトの大半が家から持って来た弁当を食べている。

教室内はえらく緊張した空気に包まれていた。理由は簡単で、私と典子にある。

典子が私の事を嫌っているのは、恐らく私が猫化している間に、クラスメイト中に広まっていたのだろう。

典子自身も、私に対しての剣呑とした雰囲気隠さなくなっている。

空手部の実力派である典子から立ち上る闘気と、そんなTNTみたいな典子を無闇に刺激する私を見て、クラスメイトは不発弾を抱え込んだ気分なのだろう。

「でさ、典子」

「……ちよつと良い？」

私の言葉を遮って、典子が箸を止める。切れ長の視線が、私を全力で突き刺していた。ライオンでもいるのかと思う程、背筋に寒気が走った。と、思った瞬間にはもう遅かった。

何かが、私の横っ面に飛んできた。何かは私の頭部をそのまま宙に浮かせ、横に吹き飛ばす。首と一緒に全身を持っていかれた私は、クラスメイト数人を巻き込んで床に転倒した。

顔を上げると、典子が右手を固く握りしめていた。ボキ、なんて骨が鳴る音さえ聞こえてきた。

「馬鹿にすんのもいい加減にしてよ！ 私が……私がアンタをどう

思ってたか……知ってるんでしょ!？」

典子は泣きそうな顔でそう言っていた。

勿論、知っている。他のクラスメイトにも聞かされたし、何より直で聞いた訳だし。

でも私はやっぱり典子から離れられそうになかった。

私だって離れようって思っていたけど、気づけば典子の隣に座ろうとする自分があるのだ。

やっぱり私は、この子と親友になりたいから。

今度こそ、本当に、心の底から分かり合える親友になりたいから。

「知ってるよ……典子、でも」

「五月蠅い馬鹿!」

そう言っただけで典子は、私の胸倉を掴む。

鬼の形相を私に近付け、拳を構えて動かない。いつでも、どんな風にも、殴れる筈なのに、典子は拳を振り下ろさない。

しばらく私達は見つめ合う、と言っただけで、睨み合う。典子は震える拳を握りしめたまま、瞳の奥に涙を溜めて、動かない。一触即発なこの空間で彼女を止める奴なんて誰も居ない。クラスメイトが狼狽した顔で、私達を遠巻きに眺めている。巻き添えを食らうのはゴメンだと言わんばかりだ。

助けて、なんて言うつもりはない。私は大人しく、審判の振り下ろす鉄槌を待つ。

「……っ馬鹿!」

結局典子は涙声で捨て台詞を吐きながら、私から手を離し教室から走り去って行った。

クラスメイトが誰も口を開かない。こんな空気を作って申し訳な

いけど、こればかりは妥協する訳にもいかない。

私のクッション代わりにしてしまった男子生徒に謝りながら、殴られた頬を擦った。腫れているらしく、熱を持って膨らんでいる。じんじんと痛む。黒猫の暴力よりもよっほど響く一撃である。

しかし、これくらいなんでもない。典子はもつと苦しんできた。気が済むまで、顔の形が変わる位まで殴られたって構わない。

私達の友情はまさしく木っ端微塵にぶち砕かれたと言っても過言ではないだろう。

でもまだ、希望はある。典子は私を殴るのを躊躇った。しこたま殴りたい筈なのに、典子は一回しか殴らなかつた。典子は、心の底から100%私を嫌っている訳じゃないんだ。那由他の彼方にまだ可能性が残っているんだ。

どれだけ細かく割れた皿でも、破片を集めてジグソーパズルのように組み合わせれば、元に戻る。……いや、元に戻っちゃ駄目だ。元に戻すんじゃないかって、割れた皿の粉末からもつと良い皿を作らなきゃいけないんだ。

材料は私の足元に散らばっている。なら私は、それを捨てずに拾い集めていくだけだ。

私と典子は、元の関係には戻らない。

だったら、元のものよりも素晴らしい、新しい関係を作ればいい。どれだけ時間がかかっても構わない。

いつか、本当に互いの事を許し合える、本物に親友になるために、私は絶対に諦めない。

*

さて、冬の午後の寒々しい授業風景なんて描写する価値もない。よって時間は放課後まで飛ぶ。私は退院早々、部活に復帰する事になっていた。

この部活には、私が猫になっていている間に三人程顔を合わせた人間がいる。

神宮司先輩、外山先輩、そして奥田先輩。

神宮司先輩と外山先輩に関しては、ぶっちゃけ顔も見たくないと言うのが本音だ。

ちなみに二人は、既に周囲も公認する恋仲となっている。

神宮司先輩はともかくとして、外山先輩は毎日毎日神宮司祐介ファン倶楽部の皆様からの嫉妬を如何に躲すかを試行錯誤する日々らしい。

神宮司先輩が私にアプローチをかけていた事は、部内では完全になかった事扱いされている。しかし態度にはしっかりと現れていて、周りの部員達は、まるで腫れ物を触るように戦々恐々と私に接してくる。それが苛ついて、私は練習途中であるにも関わらず神宮司先輩と外山先輩を、部員全員の前で呼び出してやった。

一年生の分際で先輩二人を呼びつけると言うのはあまりにも大胆というか失礼な行動だったが、事情が事情であるせいか、或いは私の腹黒い本性を全開にした殺意剥き出しスマイルを恐れてか、巻き添えを恐れた部員達は何も言わなかった。

硬式テニス部が使っている人工芝のテニスコートの隅っこで、私は並んで肩を竦めている二人を眺めやった。

外山先輩は目線を斜め上に向けたまま冷や汗を垂らしている。悪戯がバレた悪ガキのような顔をしている。

神宮司先輩は顔を俯けた状態で、全く動こうとしない。こちらはまるで地蔵のようだ。

どちらも私の方を見ようとしない。私は多分今、無表情だろう。心とは裏腹の表情を作るのは大得意だ。

「二人揃ってそんな顔するって事は……」

「……………」

「……………」

「私に負い目があるって事、ですよね？」

二人は沈黙したままだ。外山先輩はとうとう首を脇に反らし、神宮司先輩はゆるゆると頭を下げ始めている。

私は二人にトドメの一撃を加えてやる。

「悪い事したときつて、どうすればいいんですかね？」

「……………」

「……………」

「どうすれば、いいんですか……ねええ？」

わざとねちっこく聞いてやる。二人は気まずそうに顔を合わせ、同じタイミングで頭を下げた。息が合ってやがる。なるほど、似合いの二人って訳だ。

「ごめんなさい」

「本当に、済まなかった」

「まあまあ、二人とも。顔上げて下さいよ」

私は今度は天使のように満面の微笑みを浮かべながら、二人にそう言っただけ。

そして起き上がって来た神宮司先輩の顔面に、全身全霊で全体重を乗せた平手打ちをかましてやった。横で倒れ伏す神宮司先輩に驚く顔をしている外山先輩にも、同様に平手打ち。二人は折り重なるように倒れ伏し、私は彼らの背中に片足をかけて見下ろしてみる。

痛みに潤む外山先輩の瞳を見ていると、なんだか妙に気分が高揚してくる。なるほど、黒猫め。こんな気分を味わっていた訳か。楽

しいなこりゃ。

「おおっと、これはこれは。どうしたんすかね、先輩方。

この私の天の女神のようなプリティフェイスを地獄の鬼を眺めるような目で見るなんて。

私い、悪いのは騙し討ちした私じゃなくつてえ、雪解け水のように純粋な私の心を弄んだ先輩方だと思っんすけどお。

その辺り、先輩達はどう思いますかあ？」

「……ひい」

外山先輩の小さな悲鳴が聞こえてきた。

足に力を込めて、体重を乗せる。別に私はそこまで重くないため、大した重圧にはならないだろうが、二人は動かない。

余程私の顔が恐ろしいのだろう。周りで練習していたテニス部の部員達が遠巻きで呆然と見ている。殺意を一身に浴びる外山先輩なんて、歯の根が噛み合ぬようで、口の奥をカチカチと震わせていた。神宮司先輩に至っては耳を塞いでいる。なんとという様だ。こんな奴、やっぱりこつちから願い下げだ。

ここまで酷い事をやっている私だが、別にもう怒っている訳ではなかった。言うなれば、これはただの仕返しだ。

この場で私が二人で遊んでやる事で、チャラにしてやろうと言う魂胆だった……のだが。

「おい、何やってやがる！」

私の背中に声がかかった。

待ちわびた声だったんだけど、何も今じゃなくても良いじゃないか。こんな時位、見逃してくれば良いのに。

色々台無しだ。私としてもムードってものは大切にしたいって言うのに、この男にはやはりデリカシーが圧倒的に足りていないらし

い。

私は振り返った先にいた、陰気な男の咎める視線を受けて、頭を抱えなくなった。

片目が隠れているゲゲゲの鬼太郎みたいな彼は、私が人間に戻る切っ掛けになった奥田先輩である。

奥田先輩は私に冷ややかな目を向けている。やっちまった、と言うのが私の正直な感想だ。

「何って……なんだろ。イジメ？」

「てめえ……兎に角、足を離せ」

私は素直に従う。外山先輩と神宮司先輩は立ち上がり、そそくさと黙ってその場から退散していった。

後に残ったのは、私と奥田先輩だけだ。

奥田先輩は私から目を逸らす事なく近付いてくる。

殴られるのだろうか。と、思って肩をすばめて待っていたのだが、奥田先輩は何もしようとしない。ただ私を見たまま、口を開くだけだ。

「お前の気持ちも分からんでもないが、止めておけ。

他の部員の迷惑だ。人気のない場所でやれ」

人気のない場所ならいいのか。一瞬疑問が頭をよぎったが、それを考えるより先に頭を下げるべきだろう。

「……すみませんでした」

奥田先輩は顔に少しだけ心配そうな表情を浮かべて、私を労るように声を潜める。

「それと……お前、長期入院でどうかしたのか？　なんだってこんな暴力的な……」

「あー、ごめんなさい。私ってばおしとやかなイメージあるけど、あれ、猫被ってただけなんすよ」

「テメエの猫被りは知ってたがな、そこまで危なっかしい奴じゃなかっただろ」

「ものの弾みって奴ですよ。ずっと猫被りっぱなしじゃ、ストレスも溜まるって」

私はわざと、いつも以上にフランクな体育会系の喋り方で奥田先輩をおちよくる。ただ、吐いている言葉は紛れもなく真実である。多分私は、彼の前では自分を偽る事はまずないだろう。これからの長い人生でも、割と関わっていく可能性があるけどそこはまあ、何て言うか……あんまり言わせんな。

奥田先輩は驚くよりも呆れたようで、髪の毛を掻き上げながら、疲れたような溜め息を吐き出した。

「……まあ、なんでもいい。兎に角、練習に戻れ」

「あの、先輩」

私は背を向ける奥田先輩を呼び止めた。

奥田先輩は面倒臭そうに振り返る。私はそんな彼に微笑んでみせた。

心の底からの、微笑み。こればかりは例えこの瞬間に天地がひっくり返っても猫を被る余地はない。私の、心の奥底で暖まっていた感情がゆっくりと、表に現れていく。

「先輩……私のお見舞いに、結構来てくれたんですね？」

「な……に、言ってんだ。別に、そんなには」

「お医者さんに聞きましたよ。三日に一回は来てたって」

「……………部員の心配するのは、当然だろうが」

奥田先輩は少し顔を赤くして、斜め下に俯く。なにやら照れているらしい。

だが…………正直に言おう。気持ち悪い。この人がこんな顔をしてるのは、ぶっちゃけ似合わない。

やっぱりムクれた面をして、誰彼構わず視線の槍でぶち抜いてる方が、イメージ的に合致するんだ。

まあ…………だからと言って、照れてる顔が嫌いだとは言わないけど。こんな顔を見て、引かずに笑っていられるのは、多分私くらいなものである。

そう思うと、ちょっとだけ優越感。

「先輩」

「なんだよ、さっさと練習に」

「あの、い…………言いたい事が、その、あって…………」

私は一気に自分の顔が熱くなっているのを自覚した。

テニスコートに吹き抜ける冬の寒々しい風が、まるで私達を冷やかしているように傍らを通り過ぎていく。

アホか。別に愛の告白をするわけじゃないのに、何を口籠っているんだ。

二人揃って俯き加減で、顔を赤くして、チラチラとお互いの顔を窺い合つて、本当に馬鹿みたいだ。周りの部員が勘違いするだろうが。変な噂立ったらどうしてくれるんだよ、全く。

…………でもまあ、私の心中も察してほしい。何の為に、ここまでやって来たのか。辛い現実を押しつけてまで、人間の言葉を取り戻したのか。つまり、そう言う事だ。

万感の思い全てを込めるには、一つの言葉では足りない。

でも、私はこの一つの言葉に全てを込める。

様々なものを混ぜ込んだ、何十何百もの、感謝の気持ちと……ひよっとしたら、本当にもしかしてひよっとしたら、小指の爪の先くらしいの、愛情も入っているかもしれない。

さあ奥田先輩。覚悟して下さいね。耳の穴を開通直後のトンネルみたいに綺麗にかつ穿じつて、よおく聞いて下さいね。なにせこの私が、猫を被って十五年生きてきたこの私が、人生で一番素直な感情を吐き出してやるのだ。私の心の叫び、真正面から受け止めて下さい！

「先輩、本当に……！」

*

これで、私を翻弄し続けた一連の出来事は全て、本当に全て終わりを迎えるのだが……さて、ここから少しだけ蛇足を加えておこうと思う。

全てを振り返り終えた私は、黒猫の事がふと気になって、後日一人で冬風吹き荒ぶ町中を歩いて、例の祠まで足を運んだ。

しかしその祠は、つい先日降った大雪で耐え切れずに倒壊し、現在は危険地帯とされて立ち入り禁止区域になっていた。

原型を留めていない木材の瓦礫を遠くから眺める私は、辺りに黒猫の姿がないか、探してみる。雪が積もった鳥居の上、瓦礫の隙間、森の奥。金色の猫目を探してみるが、何も見つける事は出来なかった。

代わりに私は、既に崩れているその祠に向かって手を合わせた。聞いた話によると、どうやらこの祠は猫の神様を祀っていたらし

いのだ。あの黒い化け猫と猫の神様が関係しているのかどうかは、良く分からない。でも参拝客がいなくなって寂しくなった猫神様が私に悪戯した、なんて思うとちょっと可愛いから、私はそう思い込む事にする。

拝み終わった私は、祠に背を向ける。

ここで背中は何者かの気配を感じ取ったりして振り向いて一瞬だけ感動の再会……なんてドラマティックな事も起きる訳なかった。

黒猫は、もうここに居ない。なら、会わないでもいいさ。人生は長いんだ。この事は死ぬまで絶対に忘れられないんだし、私が死ぬ間際にも看取りに来て、その時に話が出来れば良い。相手は化け猫。寿命くらい問題じゃないだろうしね。

さて、黒猫との再会の代わりに、もっと驚くべき出来事が私に降りかかった。

ポケットに突っ込んである携帯電話が鳴り出す。相手は誰だ、とディスプレイを開いて、私は慌てて通話ボタンをプッシュする。

「もしもし……典子？」

私はマフラーに首を埋めながら、歩き出す。前に思ってたよりもずっと温かくなった世界に包まれて、私は自然と顔が綻んでいた。

私が現実に立ち向かう理由（後書き）

最後まで読んで下さった方、本当にありがとうございました。
もしよろしければ、簡単でも良いのご感想やご意見等を頂けたら、なんて思っています。

以下、自作品語り。しかも長いです。
どうでも良いって方はこのままブラウザバックをお願いします。

内容の話。

猫被りが、猫を被っていない周りの人々に絶望して、かと思っただけから小さな希望を拾って、再び原点へと帰っていくお話。

今回は今までと違い、始まりから終わりまで完全に一貫したお話になったと思います。寄り道少な過ぎてちょっと淡泊な感じですけど、書き終えた後は思わず溜め息が出ました。疲労と言うよりは達成感の意味で。

個人的な話。

私の個人的な趣味ですが、こういう割に合わない取引を行なうお話が大好きです。たった一つの、とか言われるとテンション上がったタイプです。

主人公の話。

実は、初期の頃の主人公の「私」にはちゃんと「木島 里奈」と言う名前があったのですが、あれよあれよと進めていくうちに彼女の名前を呼ぶ機会が減ってしまい「いつそ名無しで良いんじゃない？」と言う結論に至ってしまった訳です。でもやっぱりちょっと無理があったので、次回作への反省点とします。

登場人物の話。

主人公以外の登場人物がなんとなく薄い気がします。記号化された幼馴染み、記号化された憧れの先輩、記号化された家族 e t c。登場人物、と言うよりは登場記号、といった感じになってしまいました。読者の皆様のご意見を頂けたら、と思います。

一人称の話。

個人の心の動きを描くには、三人称よりも一人称の方が書きやすいです。しかし、個人の心の動きを読者に魅せるには、三人称の方が良さそうですね。説明しすぎずに行間を読んでもらう文を書く。これは永遠の課題になりそうな気がします。

ちょっと自慢っぽい話。

この小説は、余所で書いた小説(つていうか二次SS)にて「心理描写上手いですね」と言うお褒めの言葉を頂いたせいでテンションが上がった頃、かれこれ半年くらい前にプロットを組んだお話です。実際に書き終えたのはつい最近ですが。全体的に躁鬱の激しいお話であり、心理描写の「主人公が陥っている絶望や幸福感の程度」に変化をつけるのが難しく、上手くいった自信がなかったり。それに関して、シビアな御言葉を頂けると、とても嬉しいです。

そして最後に。

実は最後まで入れるべきかどうか迷った小説の最後の本文があったりします。これを入れるとちょっと最後の最後まで説教臭くなるし、読後の余韻(あったらいいなあ、つてな程度ですが)が薄まるかと考え、抜いたのですが……後書きに書くべきような文ですし、このまま書かないでおくのも勿体ないので、締めという言葉として代用させて頂きたいと思います。

「私」からのメッセージかなにかだと受け止めて頂ければ、恐悅です。

*

私は色々なものを学んだ。ゴキブリの捕まえ方とか鼠の血の味なんていう、碌でもないものも沢山あるけど。

素直に生きなければ生き残れない猫の世界で学んだ事を、素直に生きていては生き残れない人間の世界に還元しても良いものか、私にはまだ分からない。

多分私は、またそのうち猫を被って生きていくようになる。人間として生きる以上、それは仕方ない事だろう。

でも、私は猫として生きたこの人生のうちの一瞬の時を、一生忘れたいしない。

人は、誰でも無意識のうちに猫を被って生きている。だから八方美人は悪じゃない。でも、八方美人は常に最善とは限らない。

時には汚い面を曝け出さないと、本当に心を揺さぶる大事なものは、決して見えてこない。

私が見てきた、猫被りの裏側……大切な人達の知らない面は、決して綺麗なものばかりではなかった。目を背けたくなるような邪悪が潜んでばかりだ。

でももしかしたら、時には絶望に突き落とされた人間さえも突き動かすような宝物も眠っているかもしれないんだ。

だから、本当に大事なときは、被っている猫を取り去ってみる勇氣も必要って事だ。

一番猫被りだったこの私が言うんだから、間違いないね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3285s/>

私が猫になった理由

2011年4月22日12時19分発行